# 圍碁獨習

三

232
335

232-335
*1200701770740*

# 圍棊獨習

第參卷

232
335

內藤湖
71.11
正本

帝國圖書館藏

宮内省圖書寮
宮内省圖書寮藏
昭和七年一月二日

# 圍碁獨習第三卷目次


死活篇（その五）

門（アシダ）……（一）
打替……（六）
押つぶし……（九）
追落……（一三）
盤（ワタリ）……（一五）
死活練習（二十目置碁）……（一九）
門、打替、押つぶし、追落、盤

基礎篇（その四）

着手は位置によつて得失あり……（二五）
一目打拔の輕重……（三一）
形の善惡……（五六）

死活篇（その六）

劫……（六〇）
死活練習（二十目置碁）……（七二）
死活と劫について

基礎篇（その五）

形の用ゐ方と得失……（七九）
行びについて、立と下、出と約、引と粘、曲とグズミ、尖、尖附と雁行、綽と綽卷り、覗と掛粘、約、一間飛、二間飛、小斜走、大斜走と大々斜走

其他の形の用ゐ方と得失……（一〇〇）
打缺き、シボリ、綽込、附越、切、切違、切提、打拔、當抱へ、斜走粘、二重粘

――第三卷目次終――

# 圍碁獨習　第三卷

七段　鈴木爲次郎

## 死活篇（其五）

### 門（アシダ）

死活篇とは、云ふまでもなく石の死活と、之に次いで攻合と、次に以下説明致します、劫との、此四つが主なるものでありまして、其外には門、打替、押つぶし、追落、盤、斷等の變化もありますが、之は特殊のものでありまして、前の死活攻合劫の四つに較べると、變化も簡單であり、又變つた形も割合に少いのでありまする、然し之等も、實戰に應用さるゝ範圍は大層廣いものでありますから、此處に先づ門の形から説明を初めると致します。

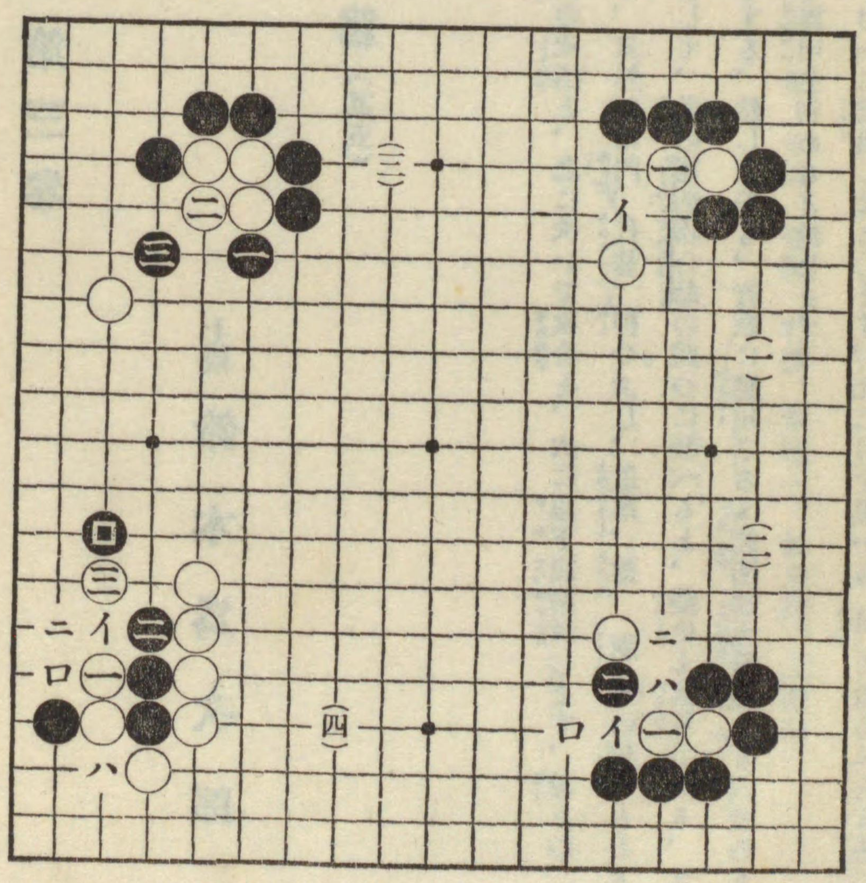
門とは、死活篇三十二圖（一）で白一に逃出したとします。此二目を黑から征で取らふとするに

は、前方にある白の一目が邪魔になつて、どうも征では此二目を取る手はありませぬ。

處が此形は、黒は三つも立つて居つて、大層強い石となつて居りますから、之を利用し(二)圖黒一に打て二目を圍むので、斯ふなつては最早此二目は逃出す手はありませぬ。此時白イなれば、黒ロ、白ニなれば、黒ハとなつて白死であります、で斯様に黒二との様に白二目を取る手段を門と云ひます。

(三)、此形は、黒一と、三

死活篇第三十二圖






目の白を當りとし、白二に逃げた時、黒三、と門にカケて白を圍みます。

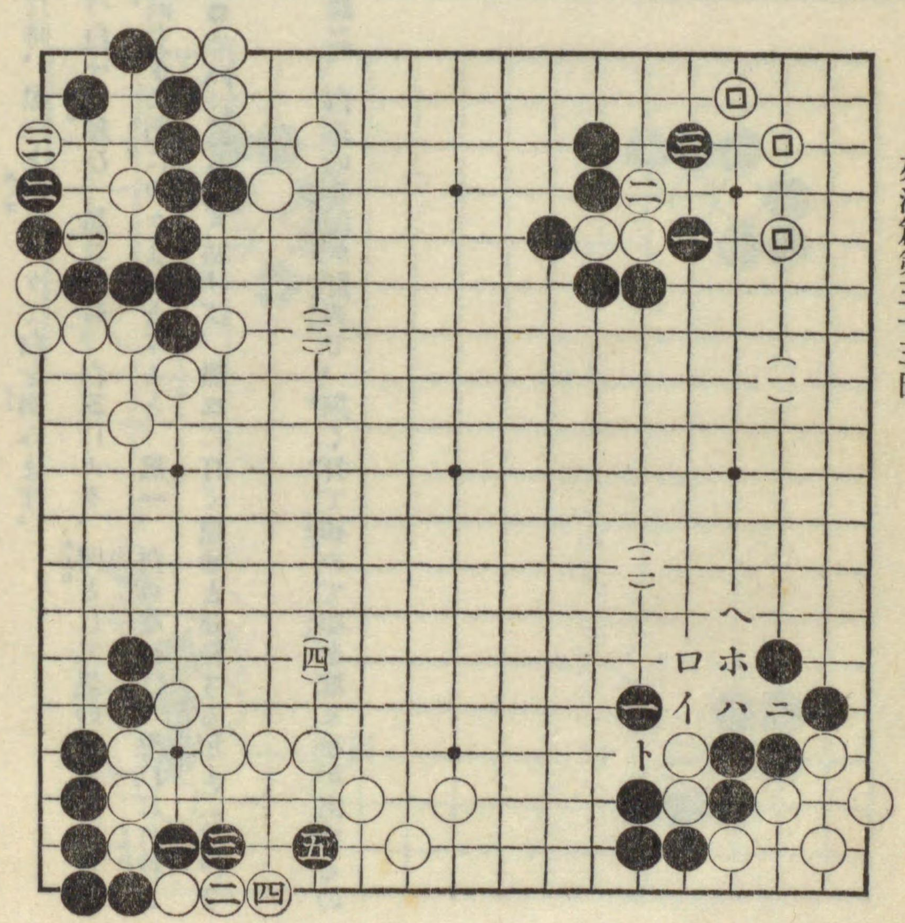
(四)、之も(三)と同じで、先づ白一に追ひ、黒二の時、白三にカケ、門として黒の三目を取ります、處が初め白一に追ふ手を、直ぐイに門にカケよふとすると、黒一、白ロなれば、黒ハに打拔いて、白の圍みを破ります。又白ロでハに一目を粘げば、黒ニに打て黒㊀と連絡する形となります。

故に斯ふ云ふ形では、白一、黒二、白三の手段が肝要で、斯く打て初めて黒を取る事が出來るのであります。

**第三十三圖**　門は、前に述べました間接包圍の最初の手段で、變化としては、別に六ヶ敷もないが、實戰には征に次ぎ、多く出來る形であります。

（一）、之も黑一に當て、白二の時、黑三と門にカケルので、之に對し、白㊁の三目は、何の効力も無い石となつて居ります。

（二）、此形黑一にカケル手が、善い手であります。白イに逃げれば、黑ロ、白ホ、黑ヘ、白ハ、黑ニと打て、白死




死活篇第三十三圖



であります。

で此變化の中、白ホに綽込んだ時、圖の樣に黑ヘに打てば白死でありますが、此手を若し誤つてトから當りとすると、白ハ、黑ニ、白ヘとなつて白は逃出してしまへます。

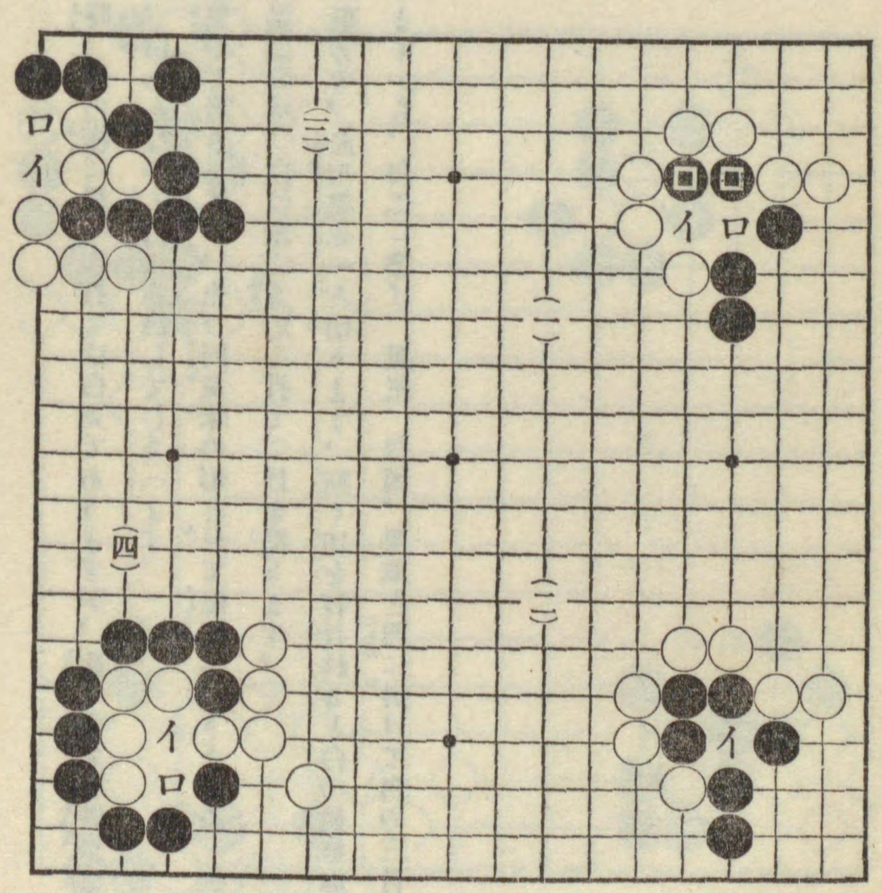
（三）、此形は、門の變化と少し異つて居りますが、先づ同意味の形と見て差支へありませぬ。變化は白先づ一に切つて當りとし、黑二の時、白は三の方から打て二目を提ります。

（四）、門の變化の中では、六ヶ敷方で、此形黑先一と切ります、斯く切を打たれると白の最終線にある一目は、當りとなつて居りますから、白二に逃げ、黑三、白四、黑五と門に掛けて白の三目を提ります。

## 打替

打替へとは、先づ一、二石を投じ、其捨石の効力で敵の活力を減じ、遂に之を打拔く巧妙な手段を云ひます。

**第三十四圖(一)**　黑◎◎の二目は、普通の形とは少し異つて居りますが、若し白が尋常の方法でイに當るとしますと、黑はロに粘いで、二目の黑を連絡してしまひます。で此形では、白イに打ず、ロに投ずるのが好い手であります、此手は、わざ〳〵




死活篇第三十四圖





一目を捨てる樣な手で次に黑にイに打れると此一目は取られてしまひますが、然し一目を提られた。其後の形を見ると、(二)の樣に黑三目は當りとなり、次は白の手番で、猶イに打て三目を打拔いてしまひます。

之はつまり、(一)で白ロに投じた捨石の効力により、黑を駄目づまりとした結果によるので、即此方法を打替と云ひます。

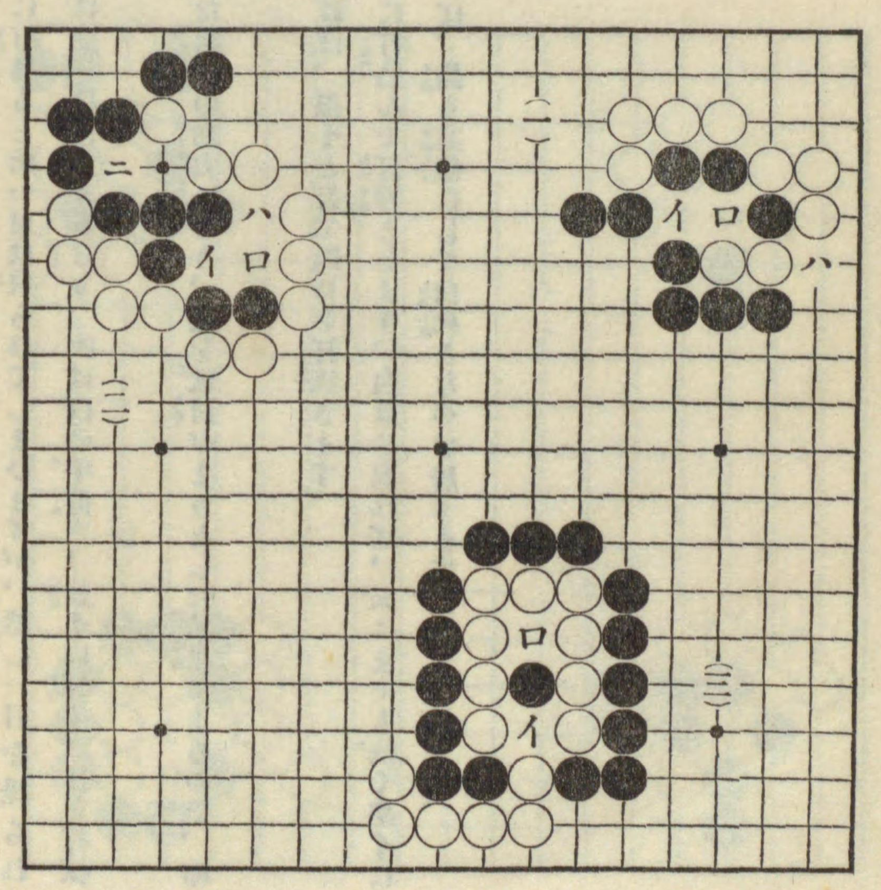
(三)、黑イに打込み、白ロに取れば、黑イと打て四目を打拔きます。

(四)、此形も同じ手段で、黑イに打込んで打替とします、白ロに取れば、云ふまでも無く黑イに打拔となり。又白、其儘に捨置けば、黑も其儘にして白死となつて居ります。

**第三十五圖(一)**　白イと打込んで打替とします、黑ロに取れば、前記の樣に白イと打拔。又黑ロの手をハに打てば、白ロに打て三目を打拔ます。

(二)、白先づイと打込、黑ロに提れば、白ハに當りとします、此時には黑は三目を捨てるほかはありませぬが、若し黑イに三目を粘ぎますと、白ニに打込、打替として八目の黑を取ります。

(三)、打替の形は、前圖の通り、先づ一子を投じ、敵を




死活篇第三十五圖



駄目づまりとして取るのでありますが、又圖の樣に、黑イに打込二目として捨てる手段もあります。

白はロに當りとなつて居りますから、此時白ロに打拔く一手で、次に黑猶イ點に投ずるのであります。

白は次に此一目を打拔けば、白は當りとなつて、猶黑にイと打たれ、打拔れてしまいます。

## 押つぶし

押つぶしと次の追落とは、死活の中でも、面白い變化のある形であります。

で其打方は、前の打替と同じでありまして、一目或は形によりて數目を犧牲とし、此捨石の効力により、敵の形を重複せしめ、同時に駄目づまりとして、之を取るのであります。

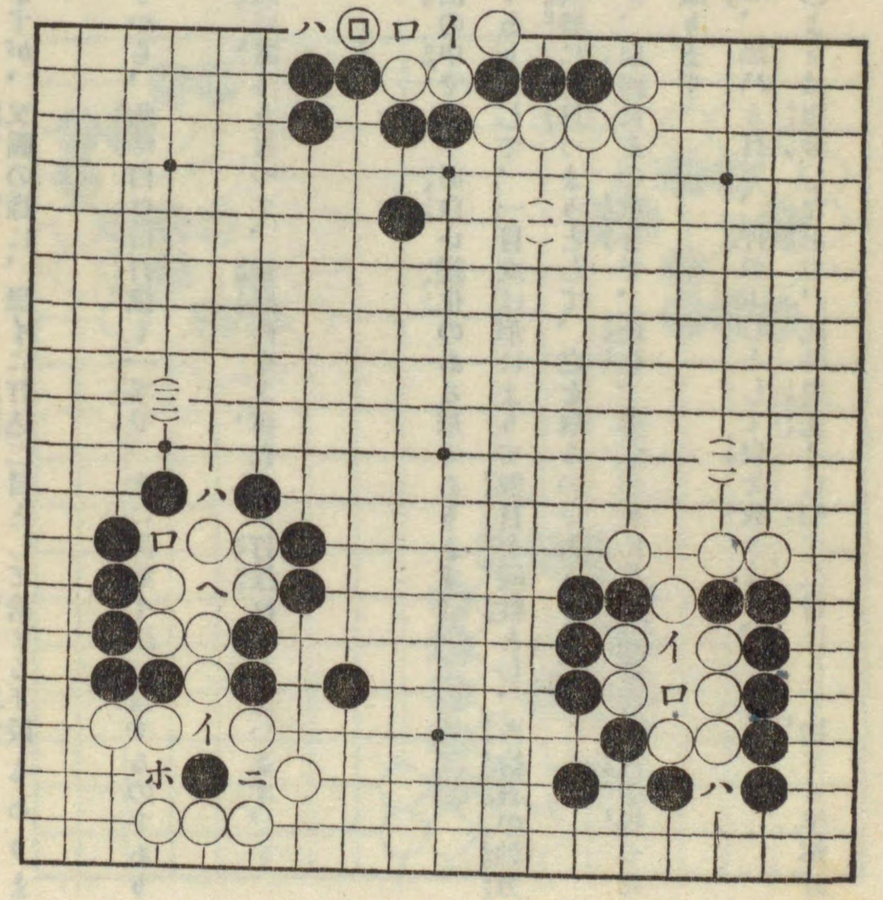
**第三十六圖**　(一)黑の三目と、白四目との攻合で、此形、黑先づイに投じ白ロに一目を提つた時、黑ハに押つぶしとして白を取ります。

(二)、黑先イに打込、白ロの時、黑ハと打て、押つぶしとして白を取ります。

(三)、此形は、前の(一)、(二)よりは複雜した形で、此時黑先イに切て二目にして捨てる手が好い手であります。

白ロに打てば、黒にハと打たれて白敗となり。又白ロてニに打て二目を取りますと、其時、黒ロ、白ホと打抜、黒ハに當りとして三目を取ります。

處が初めに、黒イに切る手を打ず、只ロに打ちますと、白イに粘ぎ、黒ハなれば、白へと打て、白三目をも連絡してしまひます。



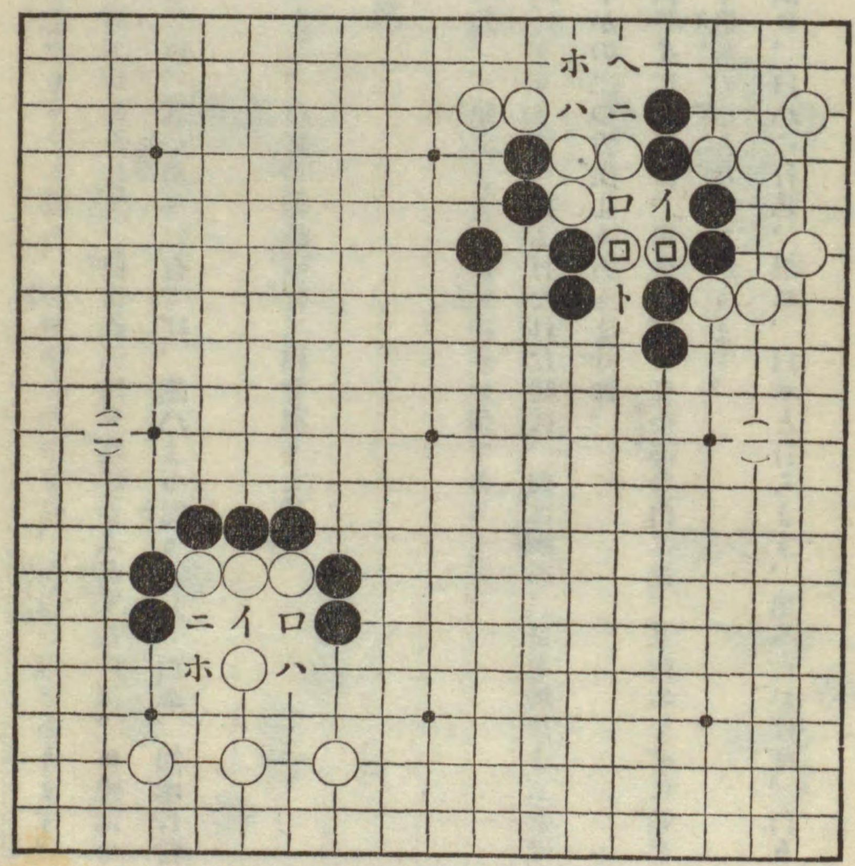

死活篇第三十六圖





**第三十七圖**　(一)黒先押つぶし　圍まれて居る黒の四目は、無論此處で二眼を作る方法はありませぬ、又此時黒イに粘げば、白ロ、黒ハに切れば、白ニ、黒ホ、白へと打て攻合黒負であります。

處が此形、押つぶしの手段により白ロの二目を取り、黒四目を逃出す手があります。それは黒先づロに打込、白イ、黒トに當りとします。白若しロに粘げば、黒ハに切て全部の白は死。又白ロの粘をへに守れば、黒ロと三目と打拔ま




死活篇第三十七圖

す。

(二)黑先押つぶし　此形を「鶴の巣ごもり」と稱へ、押つぶしの中では、面白い形であります。で黑先イに割込むのであります、斯ふ打たれた時、白は此三目を逃げよふとするには、ロ或はニに打て一目を當りとする外はありませぬ。若し白ロに打てば、黑ハより當りとし、白ニ、黑ホに當りとして、押つぶしとします。

又白ニに打てば、黑はホから當りとし、白ロ、黑ハに打て白を取ります。

## 追落

**第三十八圖**　追落は押つぶしに似て、猶之よりも變化の多い形であります。

(一)、黑先イに打込、白ロ、黑ハに下ります、斯ふ打たれた時は、白は隅の二目を助けよふとするには、ニに粘ぐか、又はイと粘ぐかの二つ方法よりありませぬ。

若しニに粘げば、黑ホに當り、白猶イに粘げば、黑へに切つて全部の白は死。又白ニをイに粘ぐも、黑ホに四目を當りとし、同じく追落の形となつて居ります。

(二)、白先追落　白先イに出、黑ロ、白ハに打込、黑ニ、白ホと打ちます、黑へに粘げば、白トに當りとし、四目を提ります。



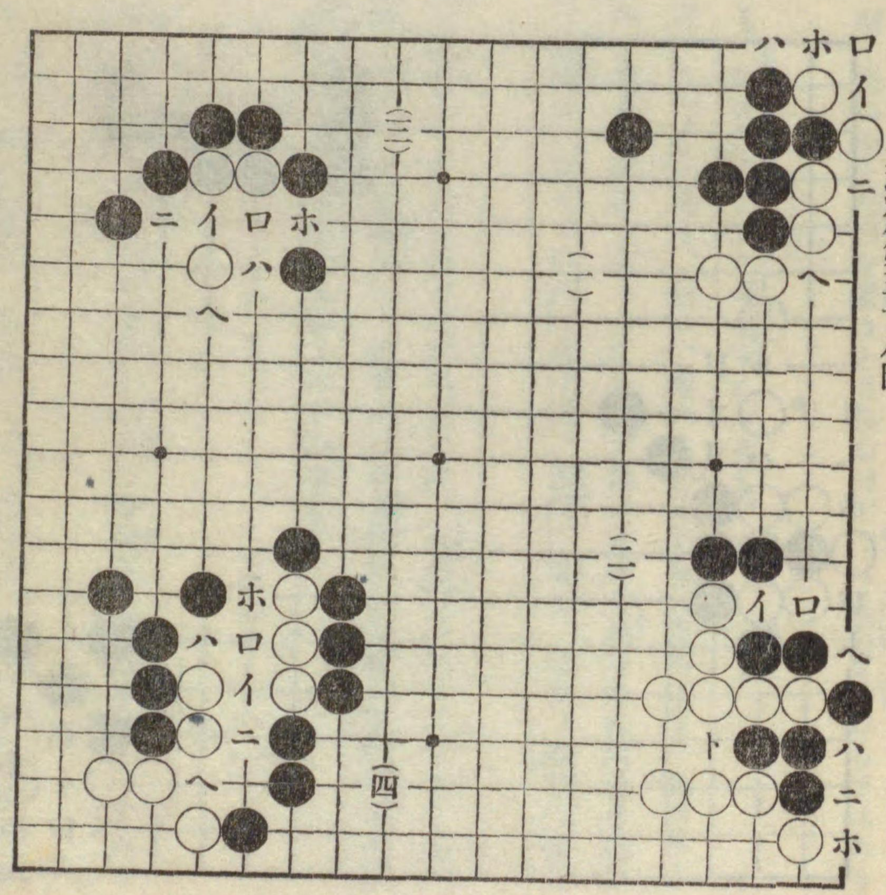


(三)黑先追落　此圖は黑は征を利用する追落の形で、黑先イに綽込み、白ロなれば、黑は此一目を捨てハに切り、白ニ、黑ホに當りとします。

白若しイに三目を粘げば、黑はへに當りとして、以下征で白を取る事が出來ます。

(四)黑先追落　黑先イに綽込、白ロに打てば、黑は前述の追落の手段により、ハに切つてイの一目を捨て、白ニに提り、黑ホに當りとします。

白若しイに四目を粘げば、黑へに打込、打替として白を取

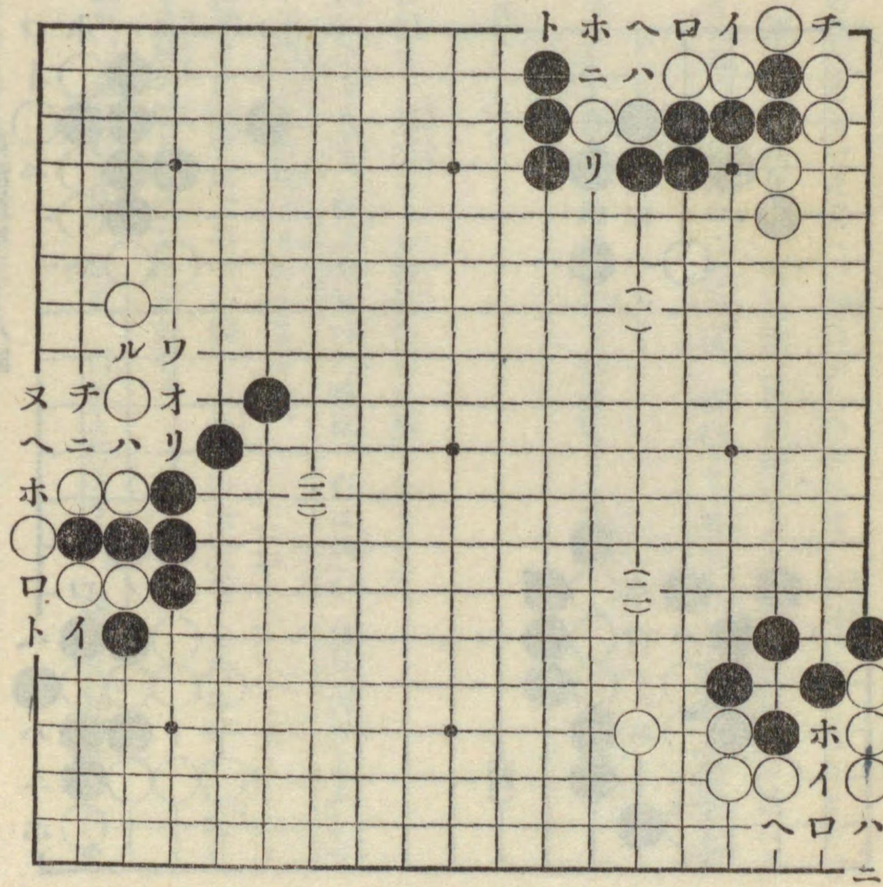



死活篇第三十八圖

ります。

**第三十九圖**　(一)黑先追落　黑先づイと打込、白ロ、黑ハに切り、白ニの時、黑は猶此一目を捨てゝ、ホに打ち、白ヘ、黑トに粘いで、追落として白の三目を取ります。

(二)黑先追落　黑先づイと綽込、白ロ、黑ハと打缺くので、黑は此ハに打缺く手順が肝要であります。此白時ホに拔けば、黑に直ぐイと四目を打拔かれますから、白はホでニに一目を提り、黑ホの當となります、白ハに粘げば、黑




死活篇第三十九圖



へに切つて白死でありますから、斯く黑にホと三目を當りとされた時、白は此石を助ける手はありませぬ。

(三)黑先追落　圖は追落の中でも、變化の多い六ケ敷形であります。

扨黑は此石を追落の形とするには、先づイに當て、白ロ、黑ハに綽込を先に打ちます、白はニに應ける一手、依て黑ホに打缺、白ヘ、黑トに四目を當りとします。白は此處で若しホに四目を粘げば、黑チに當り、白リに一目打拔、黑猶ヌに當り、白ハに粘げば、黑ルに當り、白オ、黑ワに打て全部の白を取ります。

で斯樣に、巧妙な手順で、順々に追落として白を取る之等の變化は、死活篇の中でも可なり六ケ敷方で、若し之等の形が實戰に出來た時に、之を應用し、相手の石を追落として取る事が出來る樣になれば、其技量は既に長足の進歩を爲して居るものと云ふ事が出來ます。

## 盤

盤とは、先づ一着を下し、此一着手によりて、弱い石を強い味方に連絡する方法を云ふのであります。

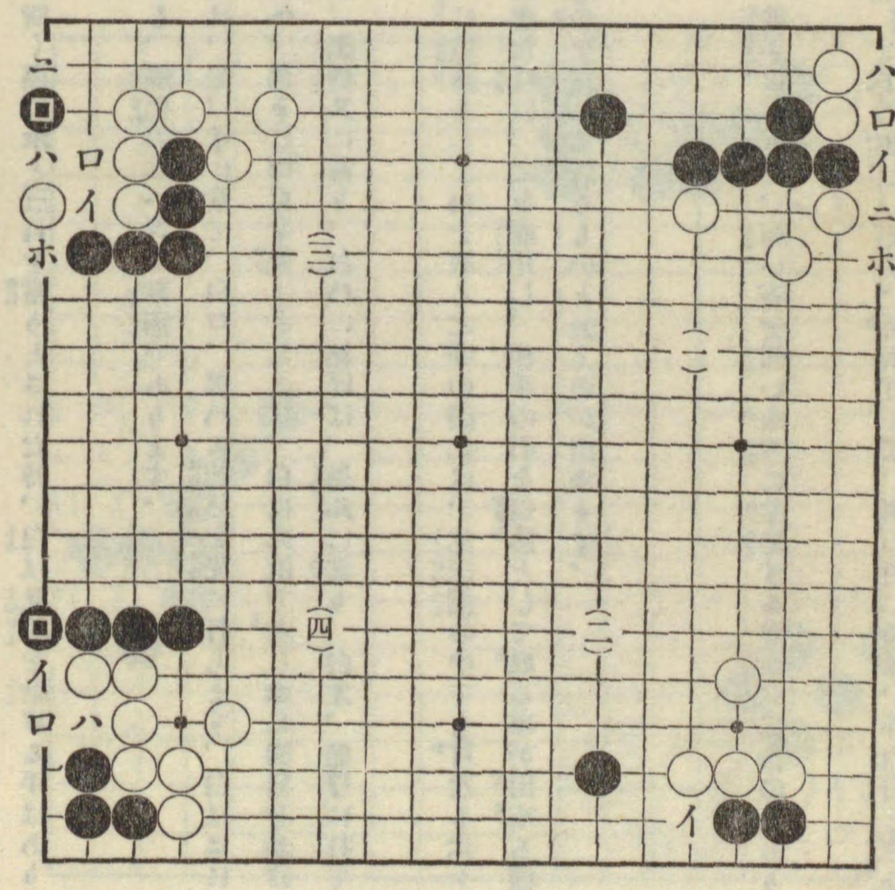
**第四十圖**　(一)白先盤　白先イに打て盤とします、斯ふ打てば、隅の白二目は、外の白と完全

に連絡するので、此時黒ロに打つも白ハに取り、又黒ロをニに打つも、白ホに打抜くまで、白の連絡は確であります

（二）黒先盤　黒イに打てば隅の石は外の一目に連絡する事が出來ます。

（三）黒先盤　黒先回の一目を盤とするには、黒イに出、白ロなれば、黒ハと切り、白ニ、黒ホと打抜きます。

（四）黒先盤　黒イに打て盤とします、で此形で、黒回の一目は此石の盤に大切な關係を持つて居るので、若し此石




死活篇第四十圖

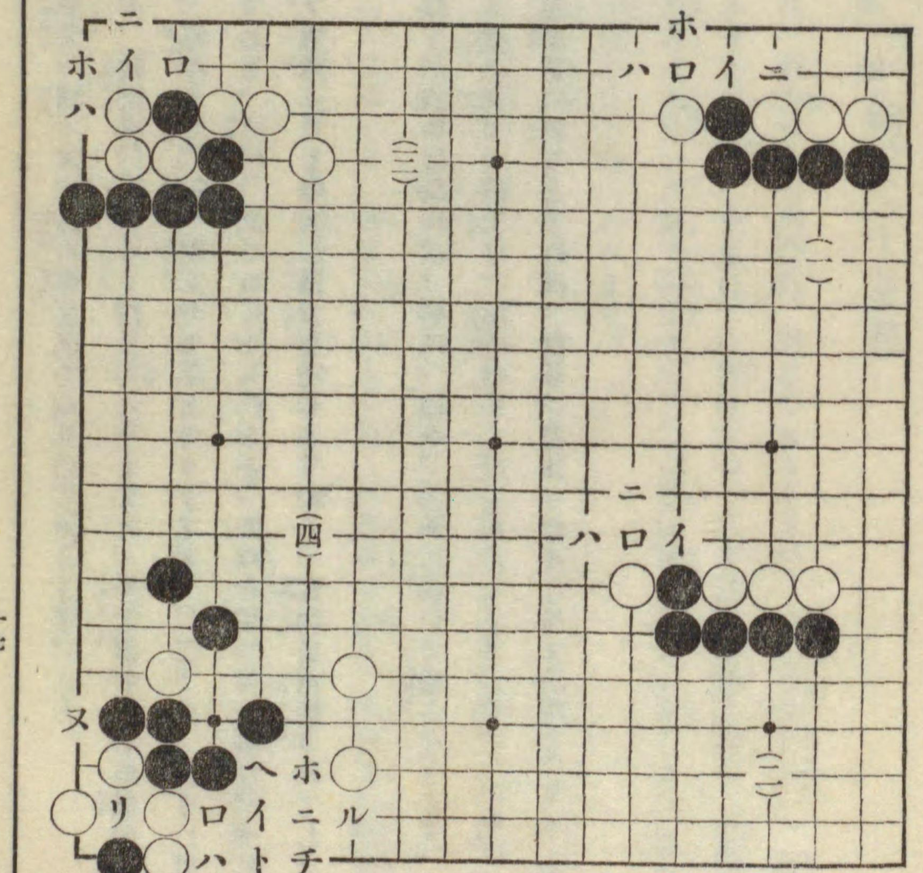


の無い時は、白次にロに打ち黒ハなれば、白回に打抜。又白ハを回に粘げば、黒ハに粘いで、隅の黒は死となります。

第四十一圖　（一）白先盤　白イに打て、隅の三目と、外の一目とを盤とするので、此盤は白に取つて、石の死活に關する大切な處であります。

で斯くイと盤つた時、次に黒ロに切るも、白ハと打て此ロの一目は死、次に黒ニなれば、白ホの打抜迄であります。

斯様に盤の形は、前圖及び本圖で見る様に必ず盤の第一




死活篇第四十一圖

線或は第二線で出來るもので夫れ以上の線では、盤の形を成さぬものであります。

假りに(二)の様な形があるとして、此形は(一)と全く同じでありますが、只位置が(一)は盤の上隅邊に近く、白からイと打つ手は、端から第二線の盤となる手でありますが、(二)では、白イに打つても、此手は盤の中央に近き處であり、次に、黒にロに切られると、此ロと切つた一石は、次に白ハに打てば、黒ニに打つ迄、以下何處までも發展し活力を増しますから、此白は兩斷されてしまふのであります。

(三)黒先盤　黒イに打て一目を捨て、白ロに取れば、黒ハ、白ニ、黒ホに粘いで盤となります。

(四)白先盤　互先の定石に出來る盤の形で、變化は、此時白イに打て盤とします、黒ロに出れば、白ハ、黒ニ、白ホ、黒ヘ、白ト、黒猶チに當りとすれば、白リ、黒又、白ルに打て白勝となります。



## 死活(門、打替、押つぶし、追落、盤)練習(二十目置碁)

二十目置碁と二十五目置碁とでは、打方は先づ白黒共、同じでありますが、只置石の工合が、縦は五つで、此方は二十五と同じでありますが、二十五目では横は五つ、二十目では横は四つ、其間一路廣くなつて居りますから、自然白は此廣い方面で活動せんとし、黒は置石の多い縦の方へ白を攻めよふとするので、其間多少の相違があるのであります。

第十圖　(一)白も黒も共に手堅い打方で、之は普通ある變化であります。初めに白一の打込は、隅で簡單に活を得よふとするには、絶好の場所で、斯様に白に打込まれますと、黒としては、此石の眼を取り捕虜にしよふとする手は殆んど無いと云つて宜いのであります。

で此形では、黒は如何打つが宜いかと云ふと、黒は白を圍んで外への發展を防ぎ、外を黒の勢力範圍とすれば、黒の勝局となるのでありまして、此意味に於て黒二に約へたのであります。

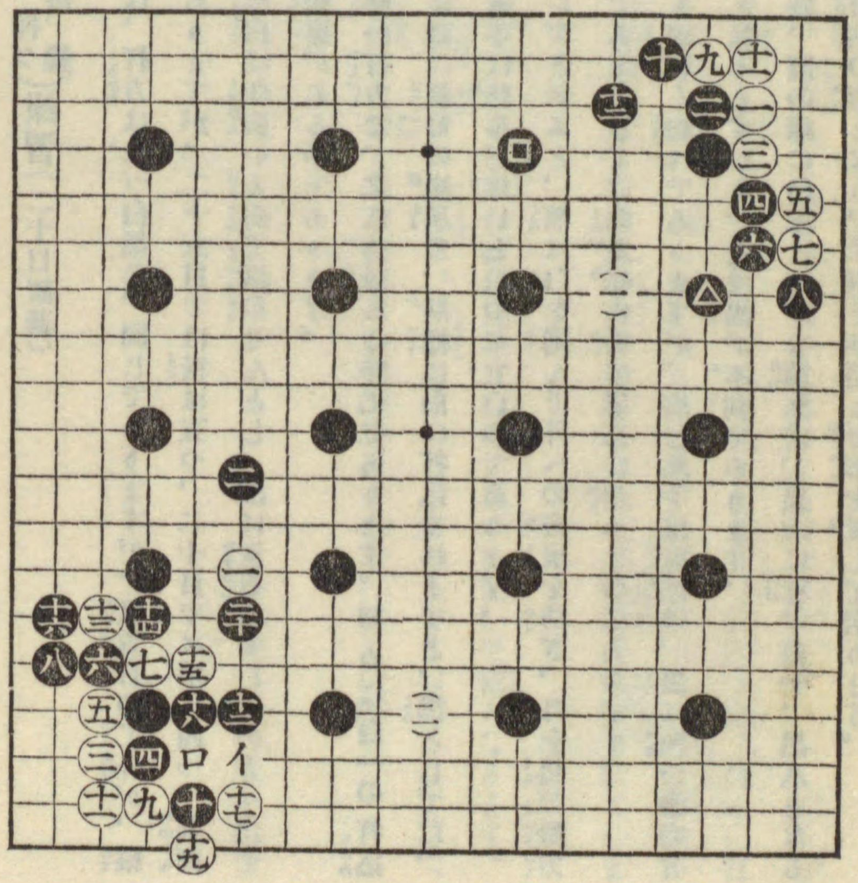
で此二の約へも、之を三に打ても同じく約へでありますが、然し此手は前述の、黒は狹い△の方を守り、廣い□の方へ白を追ふ手となりますから、之は黒が不利であります。

次に白三に押し、黒四に約へた時、圖の様に白五と下から綽れば、黒六に行、白七、黒八となるので、此黒八の手は、黒△の石と掛粘の形となり、此石と連絡し好形を成して居ります。

白九、黑十、白十一の綽粘は、白はまだ隅の石が活の形として充分でありませぬから、此綽粘を打つたので、斯ふ打て置けば、もう手を拔いても白の活は確となつて居ります。

黑十二の掛粘は極く堅い手で、此形となつては、最早此方面では白に手段の餘地はありませぬ。

（二）、前記の樣に打てば、隅の白は確で黑に取られる樣な事はありませぬが、然し此打方では白はあまり堅過ぎて、大勢を動かし、勝敗を爭ふ迄には到底至りませぬから、圖の樣に變化を六ヶ敷し黑を迷はす手段として、白一に打ち、黑二、白三に打込、黑四、白五、黑六、白七に切つたと致します。



第十圖

扨此形で、此七の一目は、初めに一と打てありますから、征に取る手はありませぬ。故に黑は八に下つて隅を攻め、白九、黑十、白十一と粘いだ時、黑十二と守つたのであります。

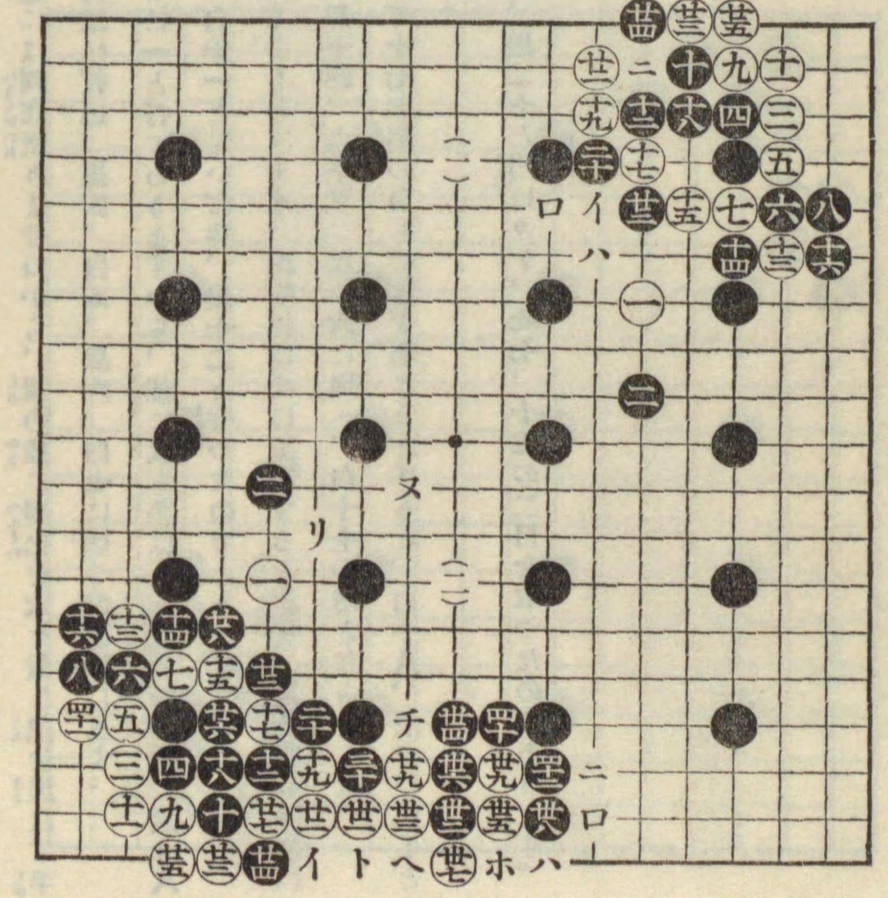
又此黑十二の守りは、イに掛粘ぐ手もあります。此變化は次に說明するとして、圖の樣に十二に粘いだ時、次に白十三に打てば、黑十四、白十五、黑十六に抱へ、白十七の附となりました。

次に黑十八で、若し十九に下つて十七と隅の白との盤を斷たうとすると、白十八、黑ロ、白イと切つて、黑の五目は死となります。

故に黑十八に粘、白十九の盤り、黑二十と門にカケ、此七、十五の二目を取つたのであります。

**第十一圖**　（一）、此圖は前の黑十二からの變化で、黑は圖の樣に十二と掛粘ぐ手もあります。次に白十三と打てば、同じく黑十四に切り、白十五、黑十六の抱へとなりました。

白十七は、前記打替の手段でありまして、次に、黑十八の手で若し二十に打ちますと、白十八に打替として、黑の四及び星の石を取つてしまひます、此二目を取ると隅と中の白は連絡し、此戰黑敗となるのであります。








白十九、黑二十に切り、白二十一、黑二十二に當りとなりました。又此手順の中で、白二十一でイに打つと、黑二十一に取れば善いのでありますが、若し此二十一の取で、ロに打ちますと、白二十一、黑八、白二十三、黑二十四、白二十五、黑二十二の時に、白ニに打つて同じく打替となり、黑の五目は死となります。

（二）、白二十五までは前の變化と同じであります、扨次に、黑二十六で二十七に粘ぎますと、白イに打ち、之も打替となつて黑死となります。故に黑二十六に取り、白二十七に切盤り、黑二十八の打拔となりました、次に黑三十に出、白三十一、黑三十二、白三十三に粘、黑三十四までは、黑は白を攻めながら外を圍つた手で、斯うなつては、白一の方面は全く黑の勢力範圍となり、此方面では白は活動の餘地はありませぬ。然し若し白一方面に着手する即リの邊に打つとすると、黑は只遠くヌの邊に圍つて置けば自然其石は死となるので、白は斯かる狹い、堅い間では二眼を得る餘地は無いのであります。

白三十五は、只下の邊を盤つて黑の地を消す丈の手で、あまり善い手ではありませぬ。此時黑三十六に粘ぎ、白三十七に盤つた時、黑三十八に約へて、白の出を防ぎました、次に白三十九で若しロに附けますと、黑八に下つて盤を防ぎ、白四十ニなれば、黑ニに當り、白三十九、黑四十と當りとして、白三目は死であります。

白四十一と、隅で白活とした時に、黑四十二に二目を當りと打ちました、此時に若し白ホに二目を粘ぎますと、黑ヘに打缺、白ト、黑パに當り、追落として白を取る事が出來ます。





# 基礎篇（其四）

## 着手は位置によつて得失あり

着手は、力の活用、切、凝、又は行尖飛の用ひ方などによつて、大層得失のあるのは、前に説明した通りでありますが、又着手は其石の有り場所によりても、得失のあるものであります。

假令、形としては完全無缺であつても、盤に、隅、邊、中の別があり、又其別により各異る意味もあるので、位置によりては、非常に惡い手となる事もあります。

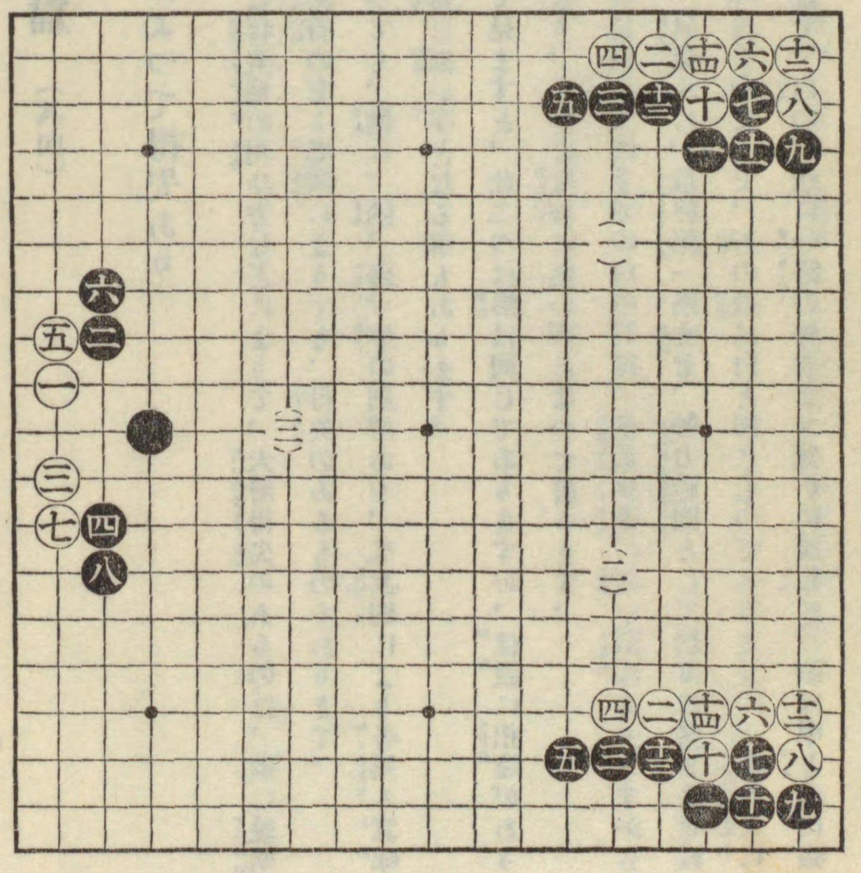
扨此處に、(一)と(二)と比較して見ますと、此二つは形は同じでありますが、位置に相違があり其相違によりて、一方は善い形となり、一方は反對に惡い形となつて居ります。

**第四十七圖**　先づ(一)では、白二以下十四までの白の石は、皆最終線に近い處にありますから之等の石は勢力の發展を阻止され、只僅かに、最終線一路丈を、勢力範圍として居るに過ぎませぬ處が黑の方は如何かと云ふと、黑一以下十二まで、石の數は白と同じ七つでありますが、其盤上に及ぼす勢力は實に白とは格段の相違で、白の、邊に一路の勢力より無いに反して、黑は中と邊に強い力を持つて居ります。

又(二)は、形も打方も、(一)と同じでありますが、位置が(一)と全然反對の爲に、結果は反對となる譯で、(一)では、白が邊に約へつけられて居るに對し、(二)では黑が邊に約へつけられて居ります。

只(二)では、十三、三、五の三目が、盤の一番端から、二路上にある丈に、(一)と比較して稍黑が優つて居りますが、之とても黑低く全體の形勢は、(一)と反對に黑が大に惡いのであります。

斯樣に、形としては(一)、




碁礎篇第四十七圖

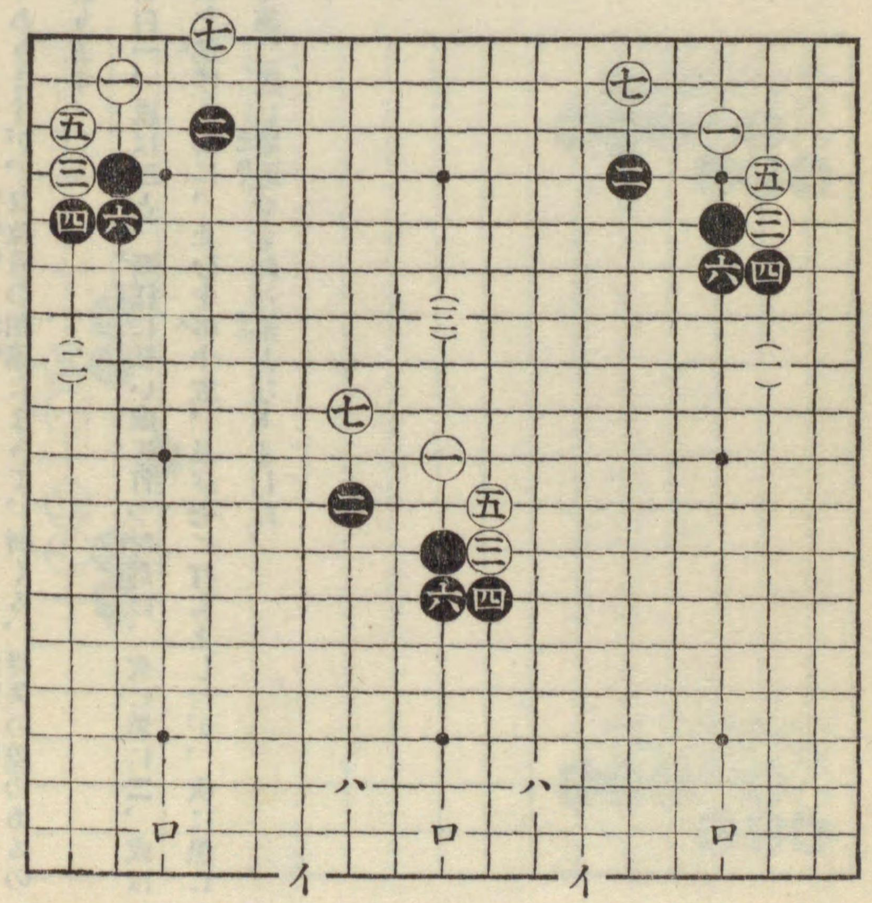


(二)同じく、又共に完全なものでありますが、只位置の相違によりて、斯くる、得失の差のあるのは、此二圖によつて見て明かであります。

(三)、之も白の惡い形で、初め白一、或は三と、斯樣に低い處に打つた爲に、次に黑に二、或は四と掛けられ、白は此一、三の石を逃げる爲に、止むを得ず五、及び七に打ちましたが、次に黑に六、八と行びられて、遂に下邊の第二線に壓迫せられた形となりました。

**第四十八圖**　(一)、(二)、(三)について見ますと、(一)と(三)は向きは同じ、(二)は反對の向でありますが、形は(一)、(二)、(三)共に全く同じであります。處で之等の石の、場所の違ひによる得失を研究して見ますと。

先づ(一)の形は、只形丈で見ると、白七は低く、又三、五も稍低い位置で、之丈では白が惡い損でありますが、白は一に打て隅の最要點を占領して居る丈に此形は白が惡しくもなく互角の分れであります




基礎篇第四十八圖



次に(二)は如何かと云ふと、之れは、特に白の惡い形であります、先づ初め白一の打込からして斯く二線の低い處に打つのは惡しく、之が爲に以下白は此石を活とする必要上止むなく三、五と打ちましたが、黑に四、六と約へられ、白七に走つても、此走りも第一線で最惡の場所でありますから、之迄の形、白はまだ活路が充分で無いに反し、黑は相當に外に形勢を張つて居ります。

(三)圖の形は如何かと云ひますと、位置が中にある丈に、只之丈では善惡は定め難く、まづ互角と見られるのであります。

大略以上の通りで、隅邊及び隅邊の端と中との利害得失について、猶此處に簡單に區別しますと左の三つに分つ事が出來ます。

一、盤の一番端イに打つ手は、特別の場合を除く外、必ず惡手となります。

二、第二線、ロの線に打つ手も、位置低く、發展に乏しいので、之も多く惡手であります。

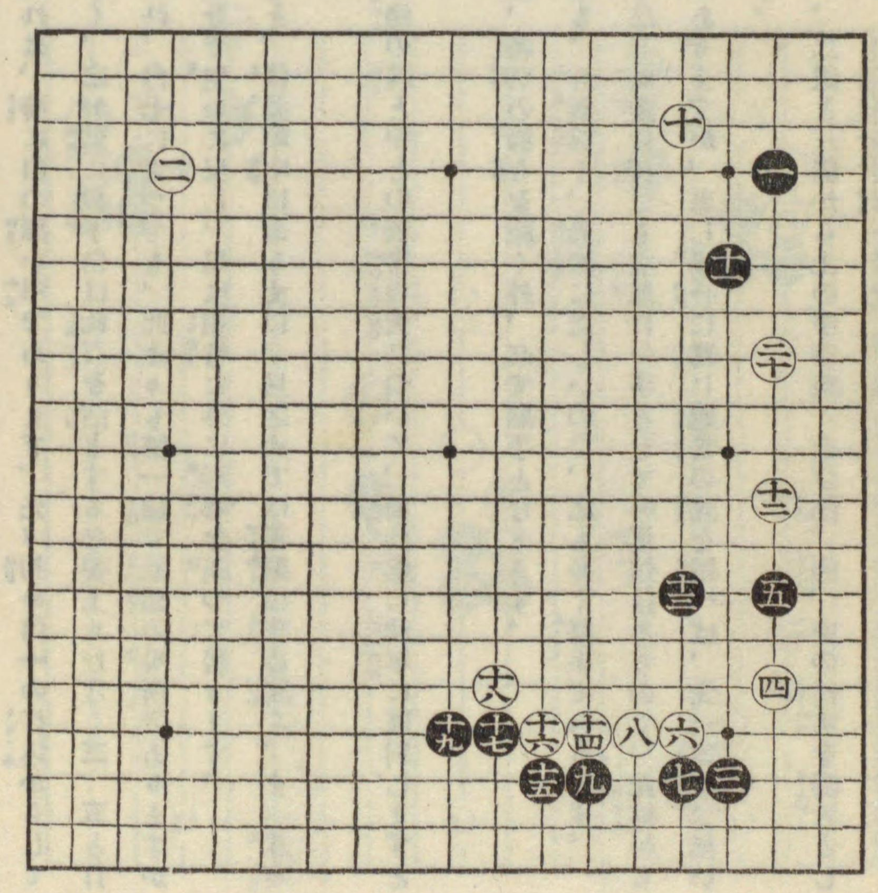
三、夫れより上、三線ハからは、何處に打ても立派に一手としての價値はあるので、此線から上は、形によつての得失はありますが、若し場合に應じ適當の點を選べば、先づ間違は無いと云つて宜いのであります。

**第四十九圖**　扨次に前述の一、二線と三線から上の中の線、及び隅、邊、中の優劣を參考として、茲に普通一般に配置される、互先の布石を研究して見ますと。

先づ初めは盤上の隅三線と四線の交叉點、黑一に打つのを最善い手と致します、之は隅の三線四線の間は、根據を得、地を拓くに、盤上では他に及ぶ處なき、最好い場所となつて居るからであります。

次に白二は、四線と四線の交叉點黑の一とは位置は少し異つて居りますが、之も亦隅に先鞭をつける手として、良い處であります。

黑三も前と同意味の手、次に白四は懸りと云ひ黑三に對




基礎篇第四十九圖



抗し、隅と中を爭ふ手であります。黑五は三の黑と相應じ、斯く三線に白四を一間に夾み擊つた手であります。

白六以下は、前の三、四、五などゝ異ひ、隅邊に根據を占める手では無く、白四を守りながら、黑を攻めたので、既に斯かる形となつては、白は專ら中の勢を主として打つ外はありませぬ。

次に白十二は、白六、八の厚みを利用し、黑五の一目を攻めた手で、斯樣に一方が厚くなつた時は、他の一方から之を夾擊するのが、常に善い手段となつて居ります。

次に黑十三と單關に進み、白十四に押せば、黑十五に行び、白十六、黑十七に綽ね、白十八同じく綽、黑十九と下邊に地を作つたのであります。

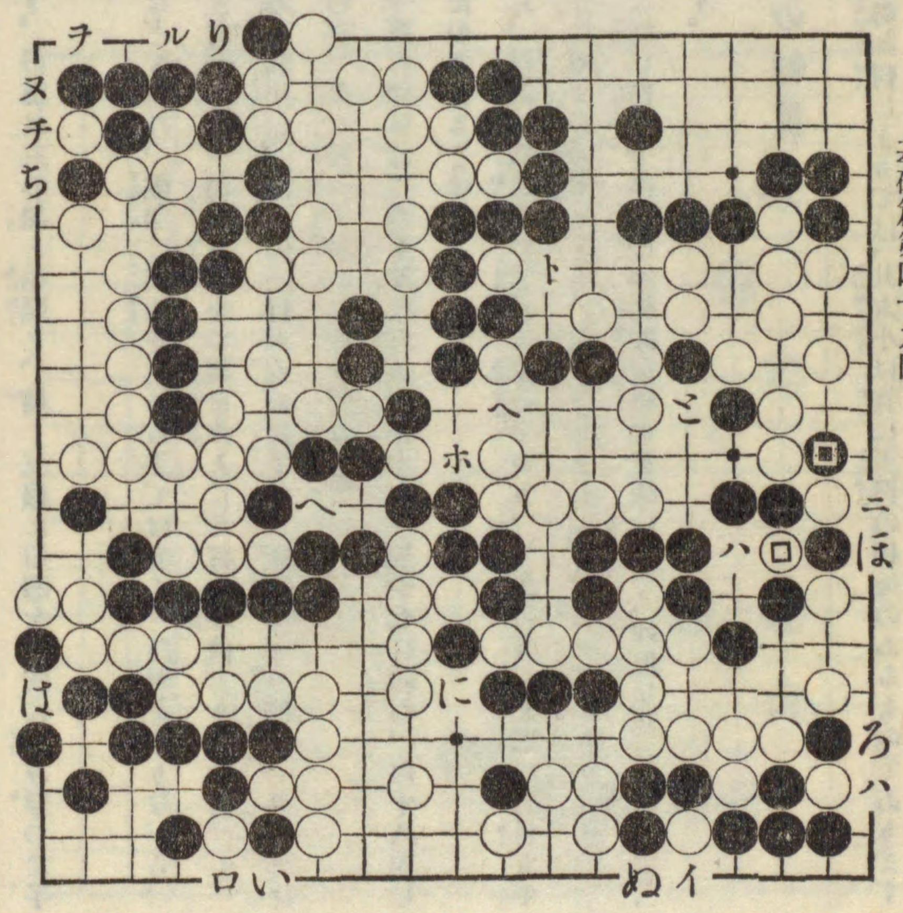
白二十の時、此邊の形を見るに、白四、六以下の數目は安全であり、又黑の五、十三の二目も中に飛出して居る爲に、白からは急に圍んで捕虜とする手もありませぬから、白は二十と斯く邊の三線に打つたので、又斯樣に邊に二間に拓く手は、白の根據を得る意味に於て、如何な布石を問はず、常に善い場所となるのであります。

## 一目打拔の輕重

同じ一目の打拔でも、四方の形勢如何によりては、其大小は實に雲泥の相違のあるものであります

之を圖について見ますと、四十九圖の中で、黑の方から石を打拔く事の出來る箇所はイ、ロ、ハ、ニ、ホ、ヘ、ト、チ、の八つであり、又白からは、「い」、「ろ」、「は」、「に」、「ほ」、「へ」、「と」、「ち」、「り」の九つと外に白「ぬ」に打つて三目を打拔く箇所とあります。

で石の數は、「ぬ」を除く外皆同じ一目でありますが、然し此同じ一目の中でも大さから見ると、數十目の處もあれば、又十目、五目、二目、或は只半目の得より無い小い處




基礎篇第四十九圖



もあります。

で此處に其大さ比較研究して見ますと、先づ此形で黑の手番として、何の一目の打拔くのが一番大きいかと云ひますと。黑チの一目打拔であります。

此一目は、只此一目の死活丈では無く、此れに連續する黑石の死活に關する大切の處であります。

之れは其形を仔細に見れば、すぐに了解されますが、此形で黑チに拔かず、反對に白に「ち」と打拔かるゝとしますと、次に黑又に下るも、白リ、黑ル、白ヲに點せられ、隅は一眼となり、上に連續する黑には一眼を作る餘地も無く、大石は死となるのであります。

次は白の手番で、白「ほ」に打拔くのが大きい處であります、斯ふ打ちますと、黑回は自然死滅し此邊白の地となりますが、若し反對に黑から二に打拔かれるとすると、白は地を破られた上、白回の一目を捕虜とされます。

且つ夫ればかりで無く、此一目打拔は先手となつて居ります。

**第五十圖**　先手と云ひますのは、此形黑の、上に連續して居る石は、右の端から左の邊△まで也逢して居りますが、此大石はずつと見渡した處、眼の組織は一つもなく、只黑イに打拔く手によりて、僅かに上の黑と連續する手があるばかりであります。

で此、黑**イ**と打拔と云つても、此一目は、損得から見ると僅かに二目に當る處で、また此形では外に**ハ**或な**ニ**など、之よりも大きい處は澤山ありますが、黑は大石の死となる關係上、止むを得ず**イ**と打拔かなければならぬので、從つて前圖白「**ほ**」の打拔は先手となるのであります。

扨次は白**ロ**に三目を打拔く順序となります、此打拔は、大さにして何の位の處であるかと云ひますと、白から斯く**ロ**に打拔くと、反對に黑から**ハ**に打拔くとの差は、約十二目に當ります。（詳細な計算は次卷侵分の部にゆずります）

扨白に**ロ**と打拔かれて後、黑は次には**ニ**の一目提りであります、此手は前圖**チ**の打拔と同樣、隅の黑の死活に關する處である上に、損得にして先づ七目に當る處であります。

斯樣に大きい處を漸次打拔いて行つて、次は白**ホ**に打拔く順序となります。

此一目は、之れ以外の他の一目の打拔と比較しては遙かに優つて居る處で、**ニ**よりも稍大きく八目に相當する處であります。

之を打拔いて後は、だん〳〵小い一目となつて參つたので、先づ黑は**ト**に打て一目を粘ぎ、次に白**チ**に當り、黑**リ**に粘、白**ヌ**に粘、黑**ル**、白**ヲ**の行となります。

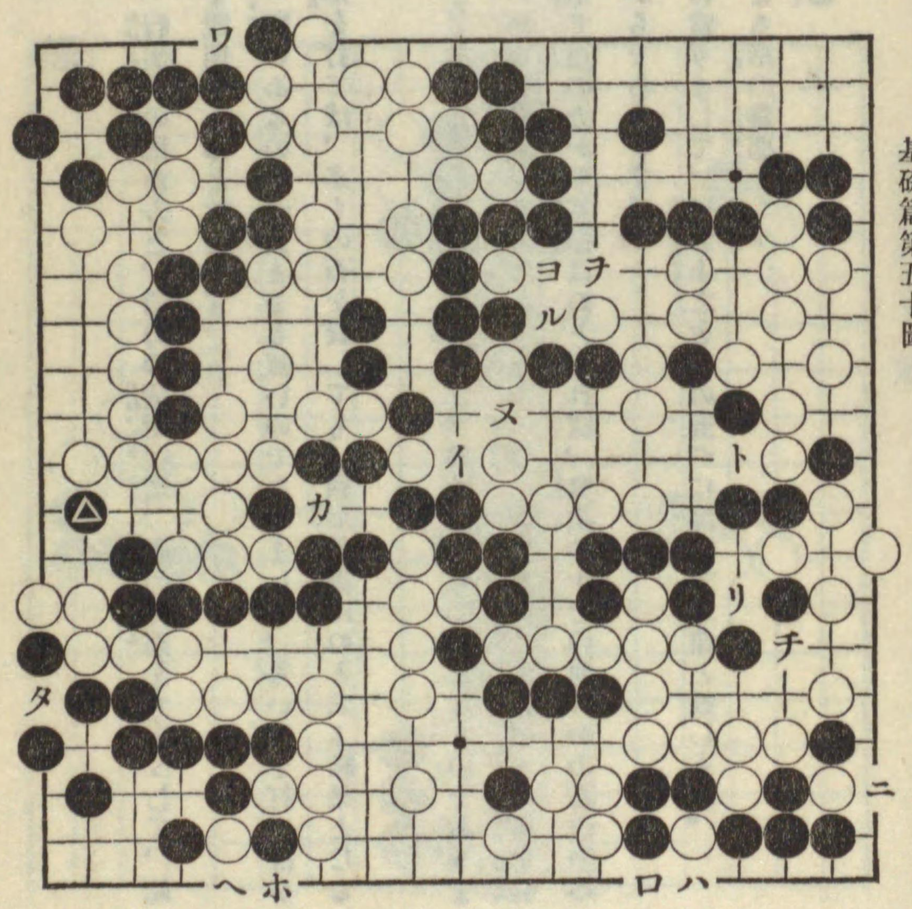
斯ふなつては愈々小い一目はかり殘つてしまつたので、次は黑**ワ**の粘、白**カ**の打拔、黑**ヨ**の打拔となるので、之等は大さにして只二目の處であります。





最後に白**タ**の劫提は、俗に半目の劫と稱へて居ります、之はつまり、白**タ**に提り、次に白之を粘ぐ、つまり此處に二手を費して漸く一目得となる處であるので、此手は最終局となつた時に打つ手であります。

斯樣に一目の打拔でも、大小樣々でありまして、四十九圖の**チ**或は圖中**イ**の樣に一手數十目のものもあれば、又**タ**の樣に二た手かけて、漸く一目にしかならぬ處もあります。




基礎篇第五十圖

# 形の善惡

前の基礎篇で說明致しました、行尖飛の用ゐ方と、活力の活用、切、凝の善惡をもとゝして、此處に普通實戰に出來る形の善惡を說明する事と致します。

で此形の善惡の局面に直接影響のあるのは云ふまでも無いのでありまして、善い形を打てば少い石で勢を張る事が出來、惡い形を打てば、多くの石を費しても、猶形勢振はぬと云ふ結果となるのは云ふまでもありませぬ。

で此形とは、決して單獨に出來るもので無く、黑白石が接して、其處に初めて形となるのでありまして、從つて打方の巧拙は直ちに形の善惡となるのであります。例へば黑白互に十目づゝの石を費して相對して居るとして、扨其形で黑の方が形勢振はぬとすれば、其黑の十をの何れかの石の中必ず急所をハズレた惡い石があるからであります。

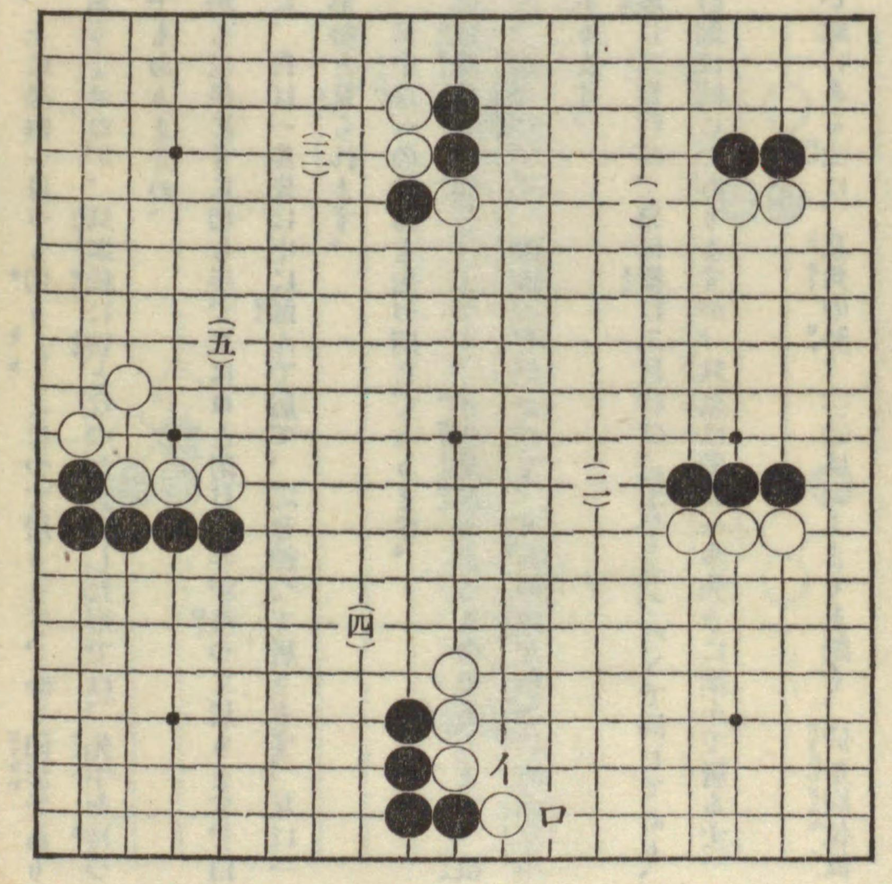
で之より形の善惡を說明するに當りまして、便宜上之を左の五つに區別する事と致します。

一、活力の用ひ方如何による形の善惡
二、切と凝とによる形の善惡
三、行、尖、飛の形の善惡
四、地と外勢との比較による形の善惡
五、着手の多少による形の善惡

此中先づ活力の用ゐ方の可否による形の善惡とは、

**第五十一圖**　此圖は(一)(二)、(三)、(四)、(五)共に白黑互角の勢であります。

(一)は、黑二目、白二目互に行の形で相對し、(二)は黑三目、白三目相對して居るので、形もまだ斯樣に、單純の中は、何らに善惡のあらふ筈もありませぬ。




基礎篇第五十一圖

(三)は、黑二目、白二目相對し、上に黑白一目づゝ切り〳〵となつて居ります、全く同形でありますから、之丈では何れに可否もありませぬが、只斯樣に切となつた急迫した形では、先手を持つた方が大層有利となるのは云ふまでもありませぬ。

(四)、白黑形は異つて居て、黑からは後にイに切る手、又はロと附ける手が殘つて居ります、白としては此處が稍薄弱である代りに、白は一歩先に中に進んで居て、之を補つて居ります。互に一得一失はありますが、先づ互角の形勢と見られます。

(五)、白黑共に、形に缺點無く、又中邊への勢力も先づ同じであります。

**第五十二圖**　次に形は、其石の根據の有る無しによつて、多少善惡のあるものであります。根據の有無とは、前に說明致しました、隅、邊の三、四線に石があつて、其石の眼を作るに便利な場所を占領して居る如何を云ふのであります。

先づ(一)について見るに、黑は縱に二目行び、白は横に二目行び、活力も五つづゝで同じであり、又下邊に根據を占めて居て、之等の點は同じでありますが、只黑は◎に一歩先きに進んで居る丈、稍黑が優つて居ります。

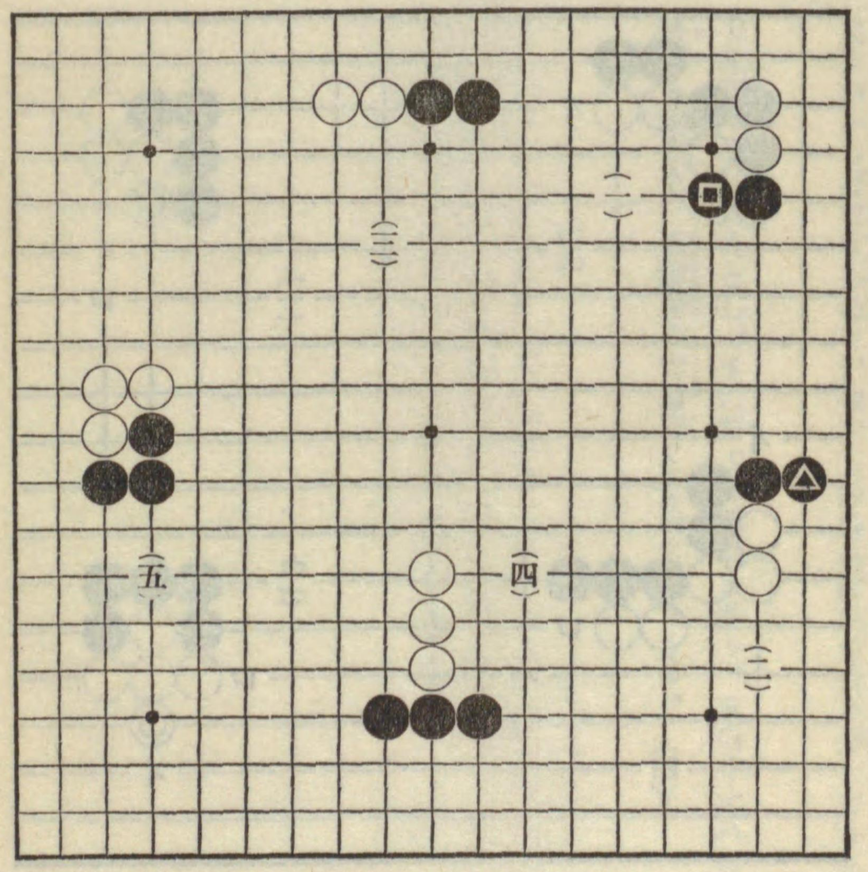
(二)は、此形黑△が邊二線の低い處にある丈に、互角の勢。(三)は云ふまでも無く、同形同位置で、得失はありませぬ。





(四)は如何かと云ひますと、勢は白が優つて居りますが、只此形白は全く根據の無い浮石でありますから、同じ三目づゝではありますが、黑の有利な形であります。

(五)も互角の勢で、白黑共に根據を持ち、又中への發展も先づ同じと見られます。



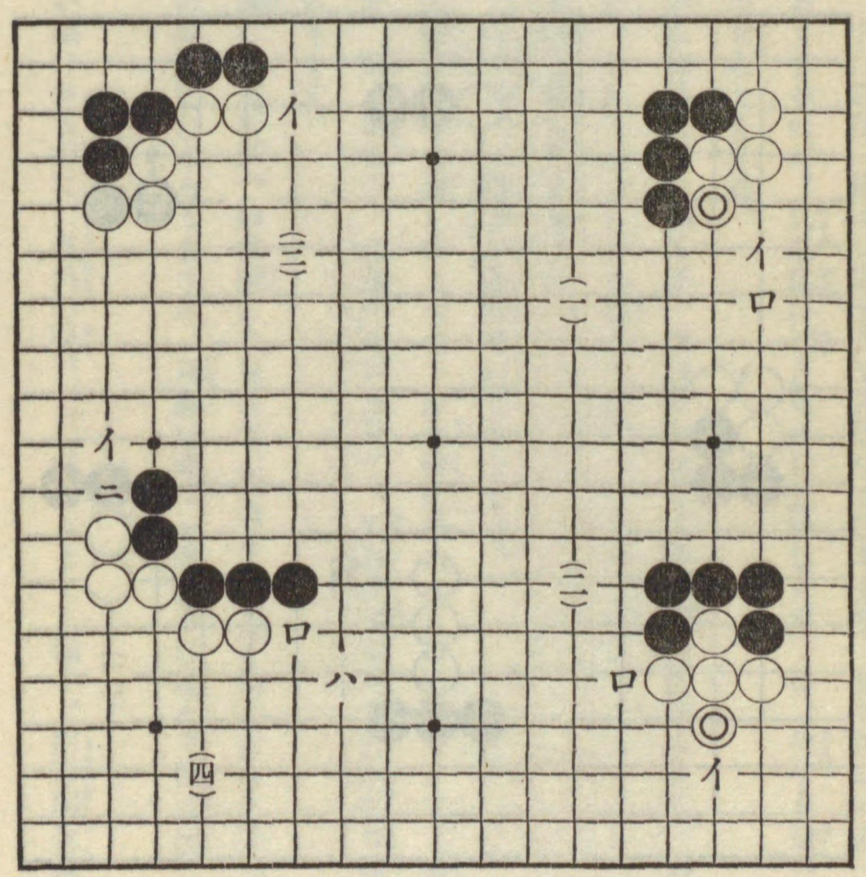

基礎篇第五十二圖

**第五十三圖(一)**　白◎の一手が、稍重複して居る丈に、黑が優つて居ります。若し此一手がイ或はロの邊にあれば、白は隅を占領して居る丈に、幾分優つて居ります。

(二)、此形白◎の石が、イ或はロとあれば申分の無い形であり、ますが只圖の樣に石と石と重り合つて、稍凝り形て居る丈に黑優つて居ります。

(三)、先づ互角の形であります、此次のイ點は白黑何れから打つても大層善い處で、若し之を白から打てば白優り、黑から綽ねれば黑の善い形となります。

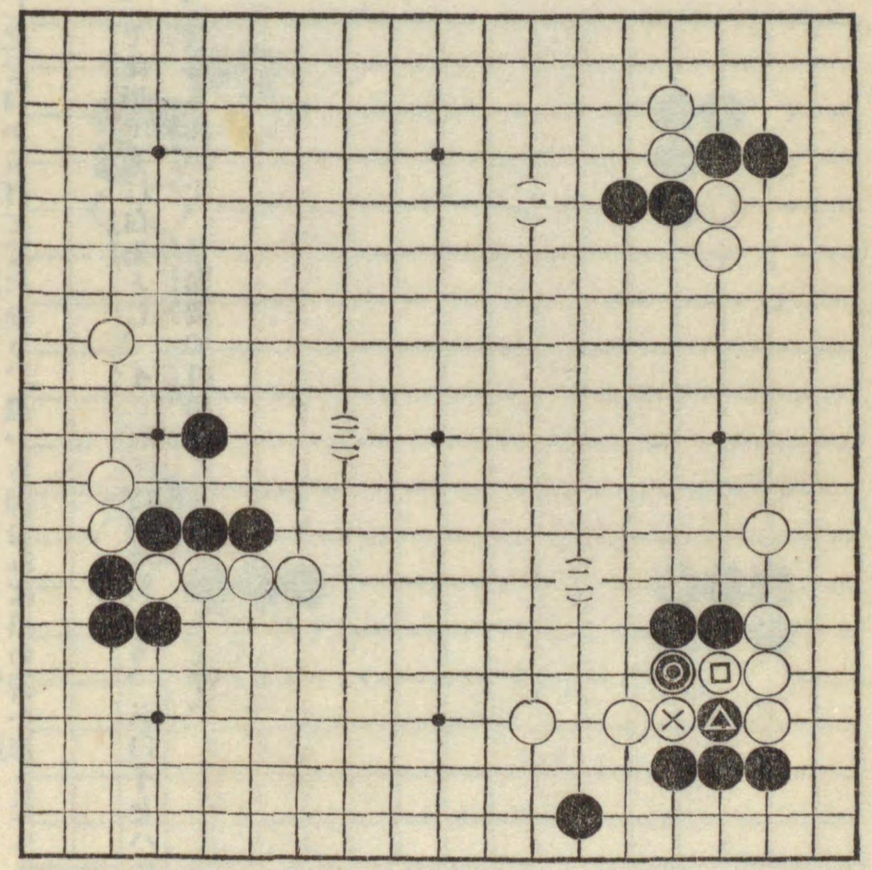
(四)、之も互角の形であります。で此形で次に白先とし、イに打てば黑ロに曲り、又白イをハに打てば黑ニと約へるので此二つは、何れも此形で、最緊要の打場所となつて居ります。




基礎篇第五十三圖

**第五十四圖**　次は切と凝の形について二、三圖示しますと、五十四圖（一）、（二）（三）切となつて居る形で、三ツ共互角の勢であります。其中（一）は切の形の中、普通見る形でありまして白黑共に互に二つづゝ行び〳〵となつて居ます。

（二）は黑△◎、白□⊗の切違が基で、之から互に石は行出して居ります。其中白□以下の五目は下邊に根據を占め之に對して黑△以下の五目は隅に根據を占め。又白⊗以下




基礎篇第五十四圖



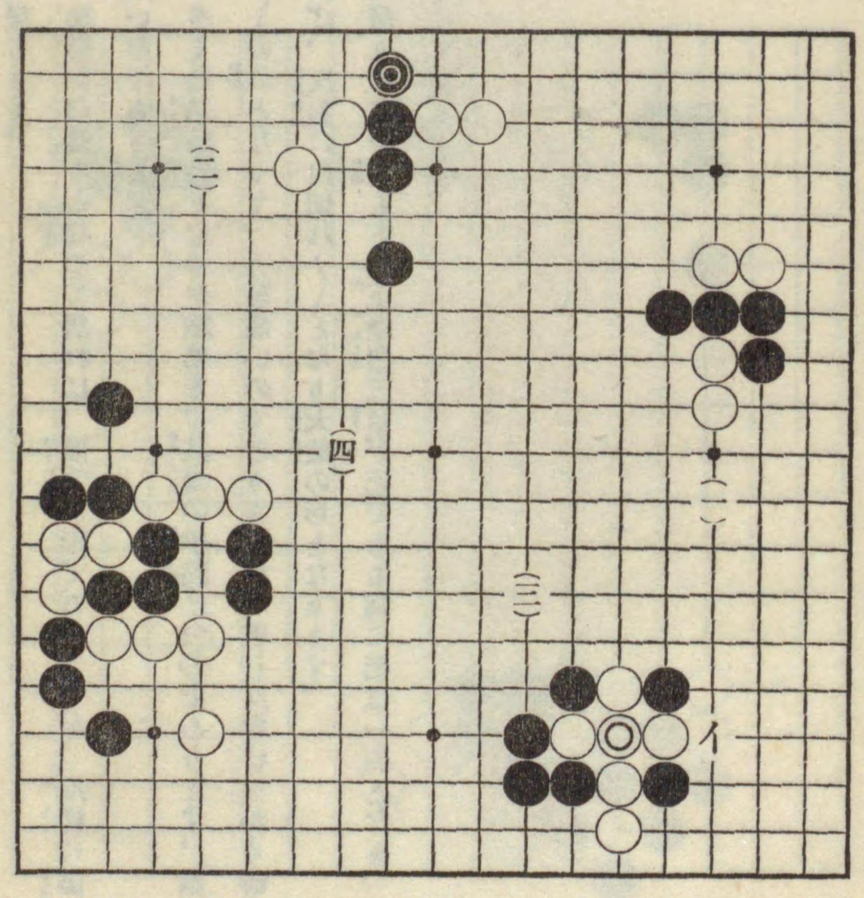


の三目は中に展之に對し黑◎以下の三目も中に發展する形となつて居ります。

（三）、之も（二）と同じく、白黑の、邊中の勢力は先づ同じであります。

**第五十五圖**　前圖は、切は互に切となり、又同じく中邊に發展した互角の勢でありますが、夫れとは反對に、切についての最惡い例を擧げて見ますと、

（一）、同數四目づゝでありますが、白は石を二つに切られて居る爲に黑の強い一石に




基礎篇第五十五圖

對し、白は二つの弱い石となつて居ります。

(二)、黑◎が若し白であつて、此處が白盤りとなつて居れば、通常の形でありますが、斯樣に黑に◎と突拔かれては、大層白の惡い形であります。

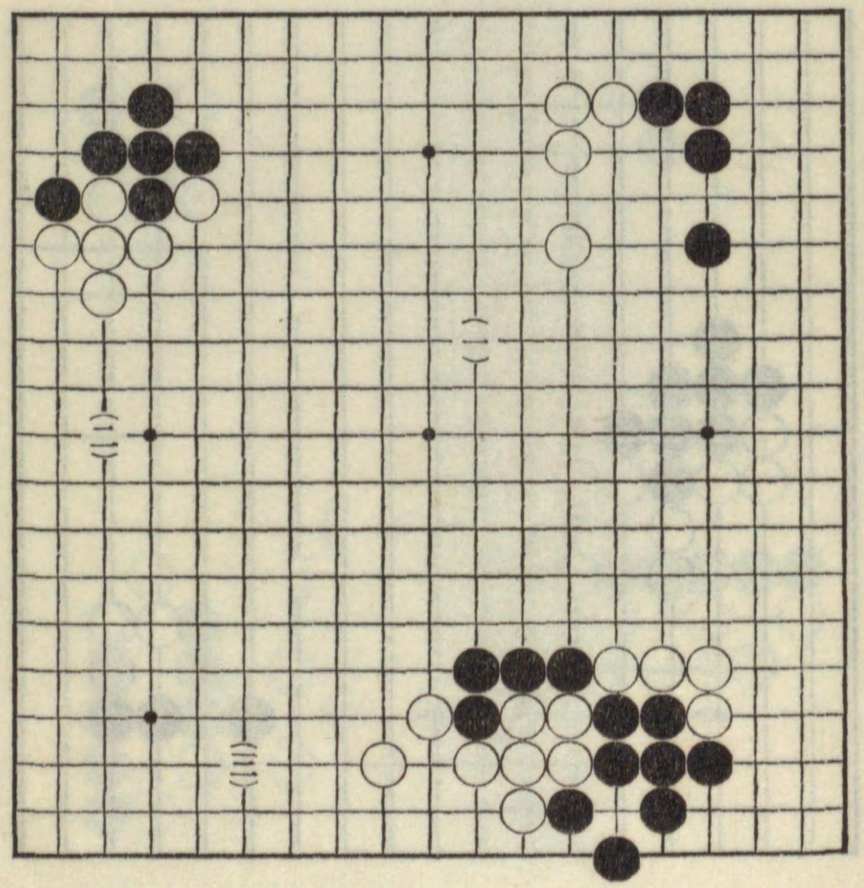
(三)、圖の樣な形となるのは、多く白劫勝粘となつた結果で、其劫の爭點は白◎であります。圖の樣に白◎に粘げば、黑は切れ〳〵の形となりて、大層惡いのでありますが、若し反對に黑から◎に劫提、次に黑イに劫打拔となれば、反對に白切れ〳〵となり大敗の形となります。

(四)、白と黑、互に切となつて居りますが其もとの下邊白三目が死である爲に黑は一石となり、之に對し、白は二つの弱い石となつて居ります。





**第五十六圖**　凝も、前の切と同樣、互に凝形となつて居れば別に提得はありませぬ。第五十六圖(一)、(二)、(三)について見るに此形は双方共に稍凝形でありまして又双方の形勢も先づ互角となつて居ります。

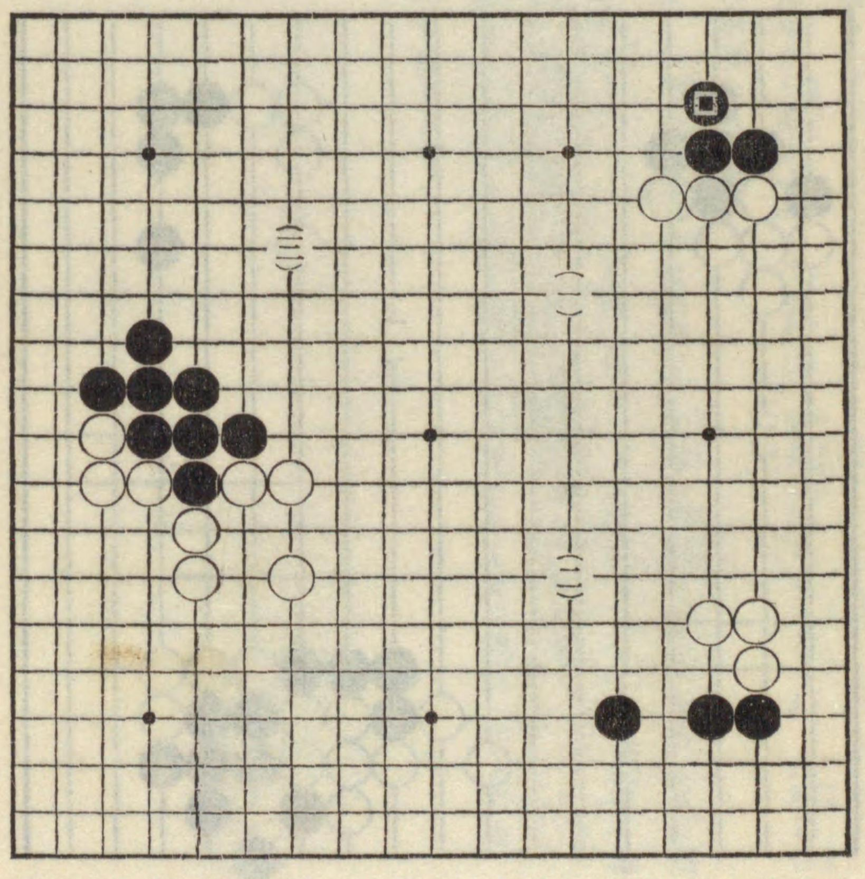



碁礙篇第五十六圖

**第五十七圖**　處が一方凝形であつて、一方が完全な形であるとすれば、非常な勢力の消長を來す譯で、之を圖について見ますと、先づ(一)では白三ッ、黑三ッの中、黑回の一目が凝形となつて居る丈、白の形稍優つて居ります。

(二)も先づ同樣でありまして、之は一層白の惡い形であります。

(三)、同じく八目づゝでありますが、白黑の形勢を比較しますと、云ふまでも無く、白大層優つて居ります。




基礎篇第五十七圖



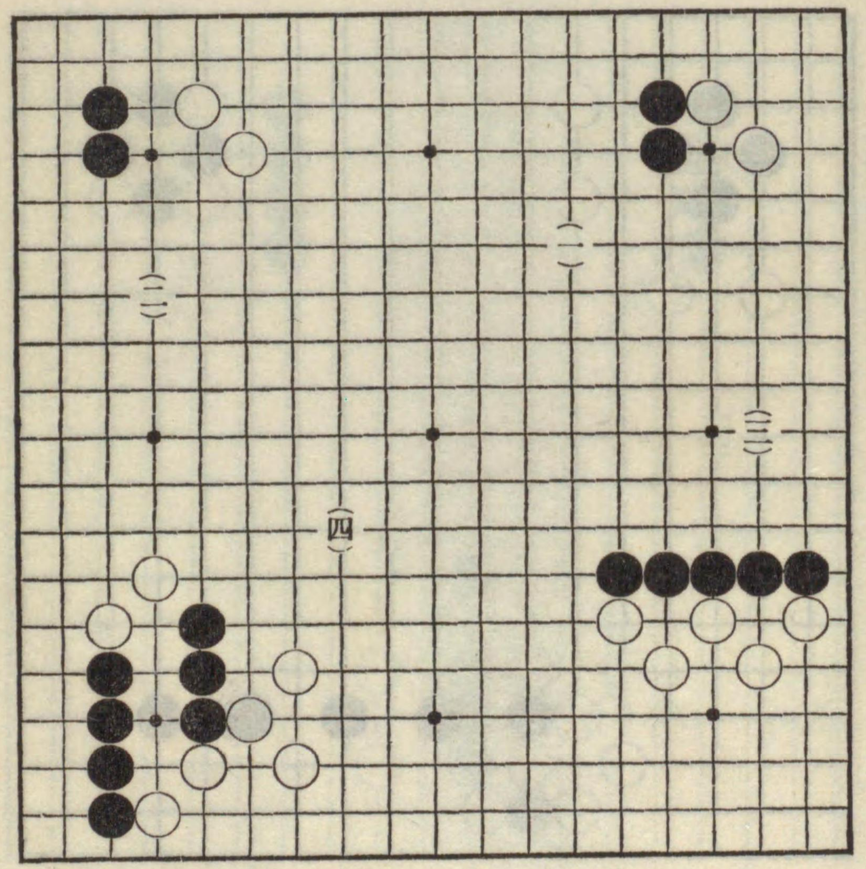


**第五十八圖**　次に行、尖、飛による形の善惡を區別して見ますと、先づ行尖との場合では接して居れば行、離れてあれば尖の方が優つて居ります。

圖について見ますと、(一)は黑の方が善い形で、(二)は黑の惡い形であります。

(三)は黑優り、(四)は互に接し、又互に離れて居りますが全體から見ると、白の優勢な形であります。

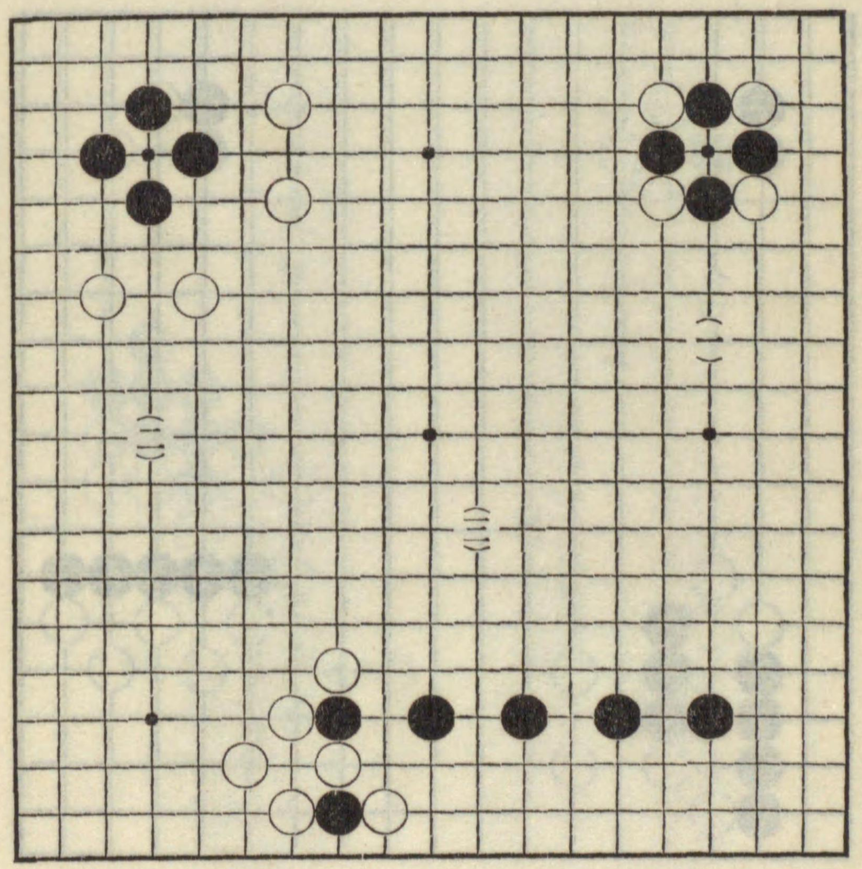
**第五十九圖**　次に尖と飛の場合は、接して居れば、尖離




基礎篇第五十八圖

れて居れば飛の方が優て居ります。(一)は互に石が接して居りますから、此形では尖の黑の方が、白よりは優つて居りますが、(二)では反對に白が優つて居るので、(一)の白切れ〳〵の形に對し、(二)は黑が凝り形となつて居ります

(三)は、白は尖、黑は皆飛の形となつて居て、又石の敷も互に六目づゝてあります、で何れが宜いかと云ひますと左方の接して居る二目の黑は惡い形でありますが、其代り右に一間飛と離れて居る處は黑




基礎篇第五十九圖

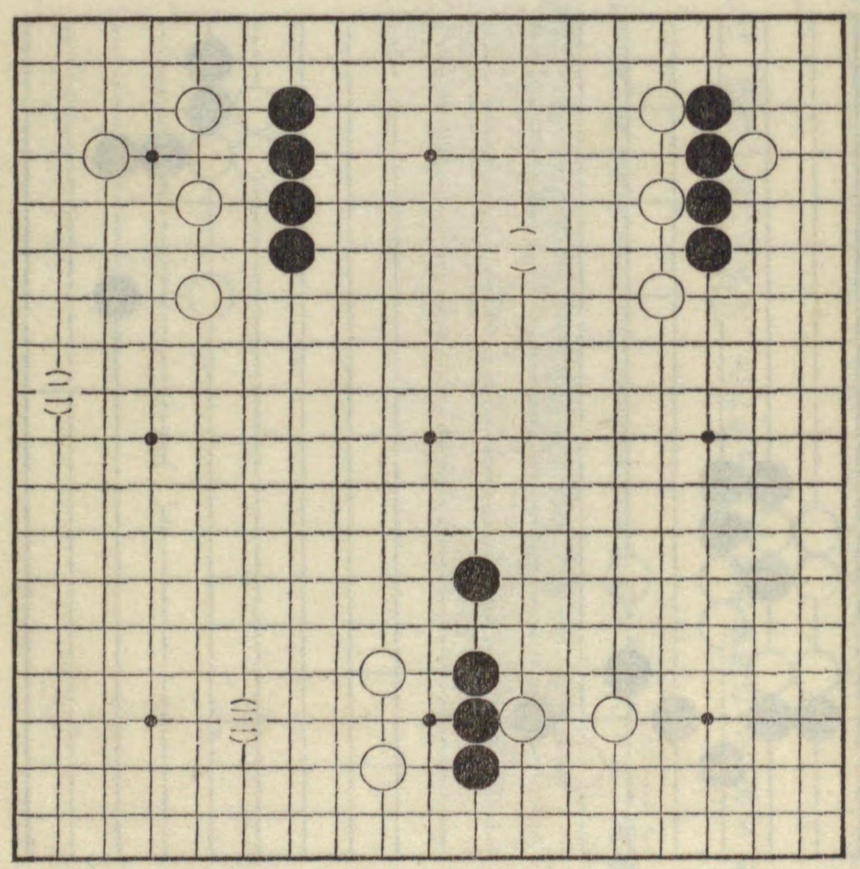




が優つて居りますから、全體から見ると先づ互角の勢であります。

**第六十圖**　行と飛の形については云ふまでも無く接して居れば行、離れて居れば飛が優つて居ります。之は前二つより一層甚だしい形となるので、一つは全く切れ〳〵の石となり、一つは非常な凝り形となります。

(一)は云ふまでも無く白の切れ〳〵の形でありますが、之が同形でも離れて居るとなると、(二)の樣になつて黑の



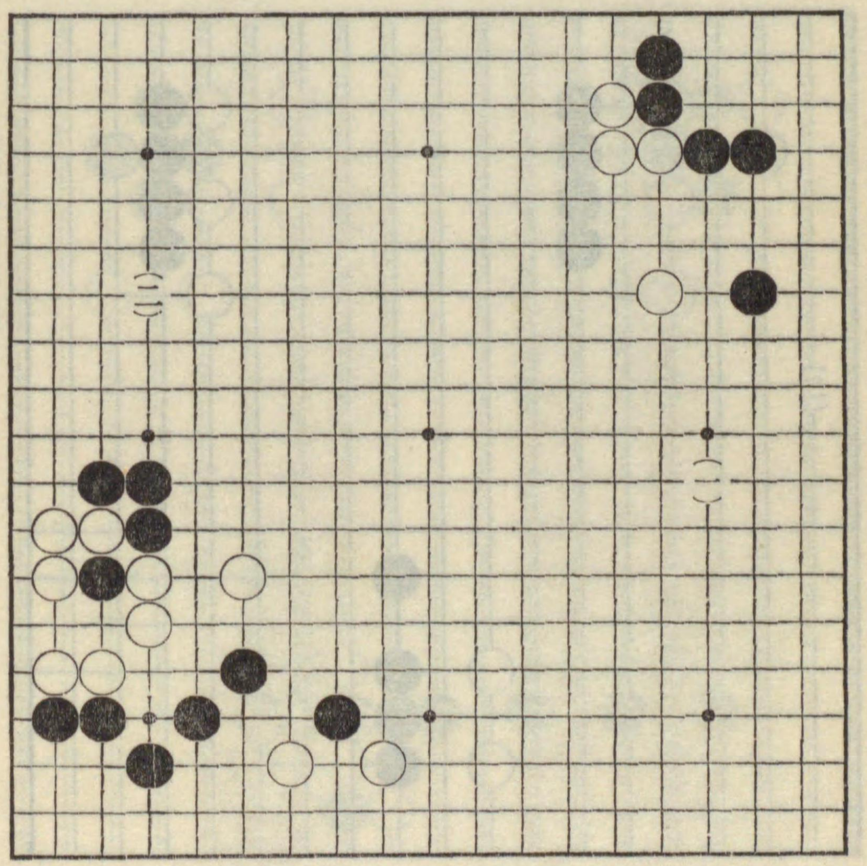

基礎篇第六十圖

凝り形となります。

扨(二)の形は如何かと云ふと、中央の黑三目は稍凝形でありますが、之に對し白一目が密接して居る丈に之を補ひ、又石の數も四目々々で、形勢は互角であります。

**第六十一圖**　(一)は、隅の黑四目と白三目とは適當に行となつて居るし又之から離れて二間飛になつて居る、白黑の一目も皆適當の位置にありますので、此形も互に優劣はありませぬ。

(二)も皆適當に行、尖、飛




基礎篇第六十一圖





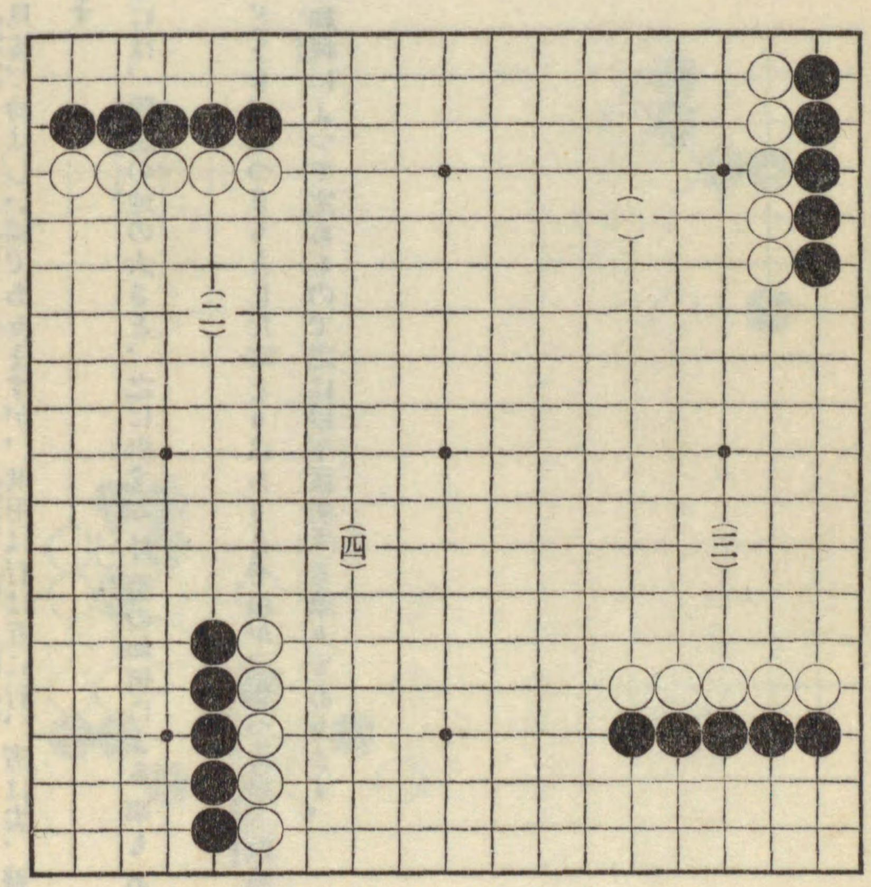
となつて居る形でありまして、一見甚だ紛はしい樣でありますが、其形は行は互に行、劣は尖、飛は飛とはつきり區別されて居ります。

猶之れ以外に形の善惡を定めるには、隅邊の地の大さと、之に對する外勢の如何による事もあります。

此地と勢とについての善惡は、どうも、はつきりとした定まりはありませぬが、先づ大略、隅邊に與へた地を、外勢で償ひ得るか如何によつて定めるので之は以下説明する通りであります。

**第六十二圖**　之は極く簡單の例でありまして、先(一)では前にも説明した通り白優り。(二)は黒の地二線となつて居りますから先づ得失無く。(三)は稍黒優り。(四)は黒の有利の形となつて居ります。

形は簡單でありますが、然し之を碁として總ての變化を見分ければ、容易に地と勢についての優劣を知る事が出來るのであります。



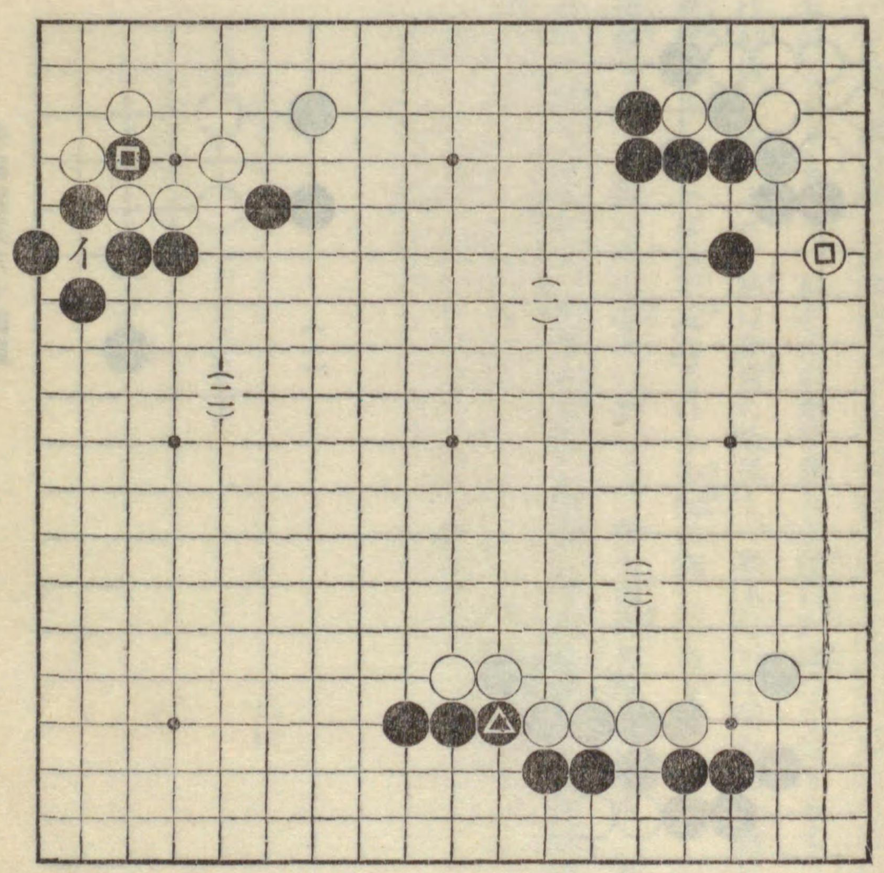







**第六十三圖**　(一)、(二)、(三)共に、先づ互角の勢でありますが、猶仔細に此三つの形の得失を區別して見ますと、先づ(一)では白ロが低い丈に稍黒優り。(二)は黒にイ白一目を打拔いて居り、白は黒ハを抱いて居りますが、然し此形は黒ロの石にまだ味を殘して居る丈に、黒優つて居ります。

(三)は黒△以下一路高く圍つて居る丈に、形としては黒稍優つて居ります。然し場合によつては白に斯ふ打つ事も

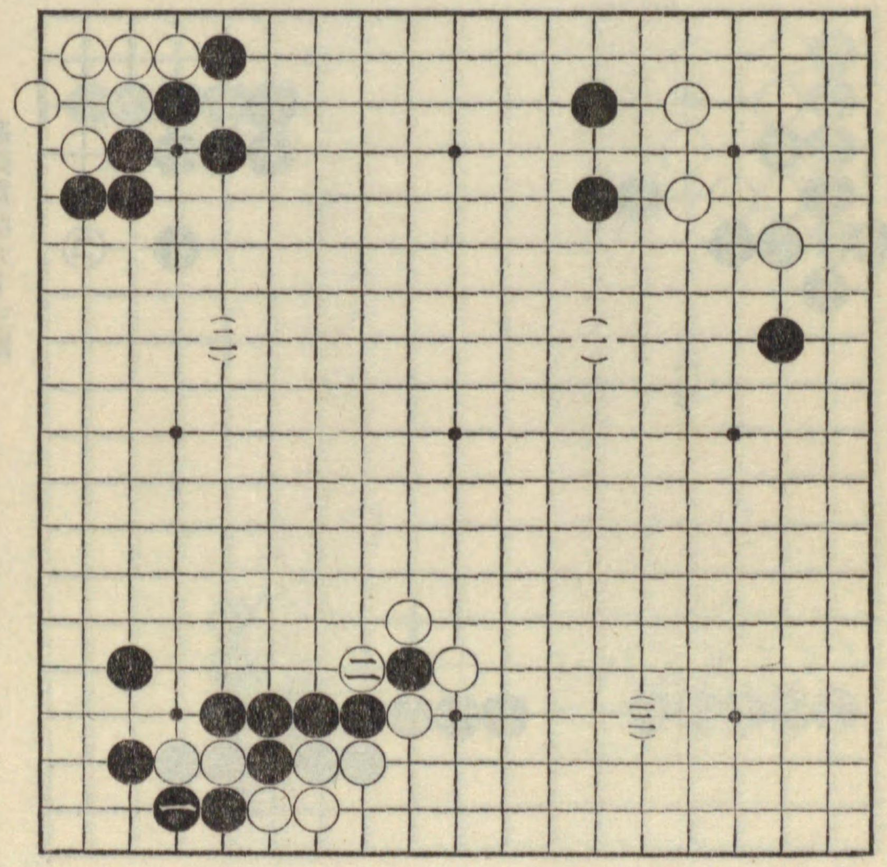


あるので、此形は互先のうちの定石となつて居ります。

**第六十四圖**　(一)は白三目、黑三目で、此形は白三目で隅に曲つて居る地の方が、黑一目の外勢より優つて居ります。

處が(二)は之と反對に白大に惡しく、白六目で圍つて居る隅の地は僅かに數目より無いが、之に對し黑六目の外勢は、厚壯であつて隅とは比較にはなりませぬ。

(三)は黑一と二目を提つて隅を地とし、次に白二で、一




基礎篇第六十四圖





目を打拔いて中央を厚くしました、で此形隅の地と中央の厚みとの比較でありますが、白二との一目の打拔が如何にも中を厚壯にするのでありまして、只之丈の形で見ると稍白が優つて居ります。

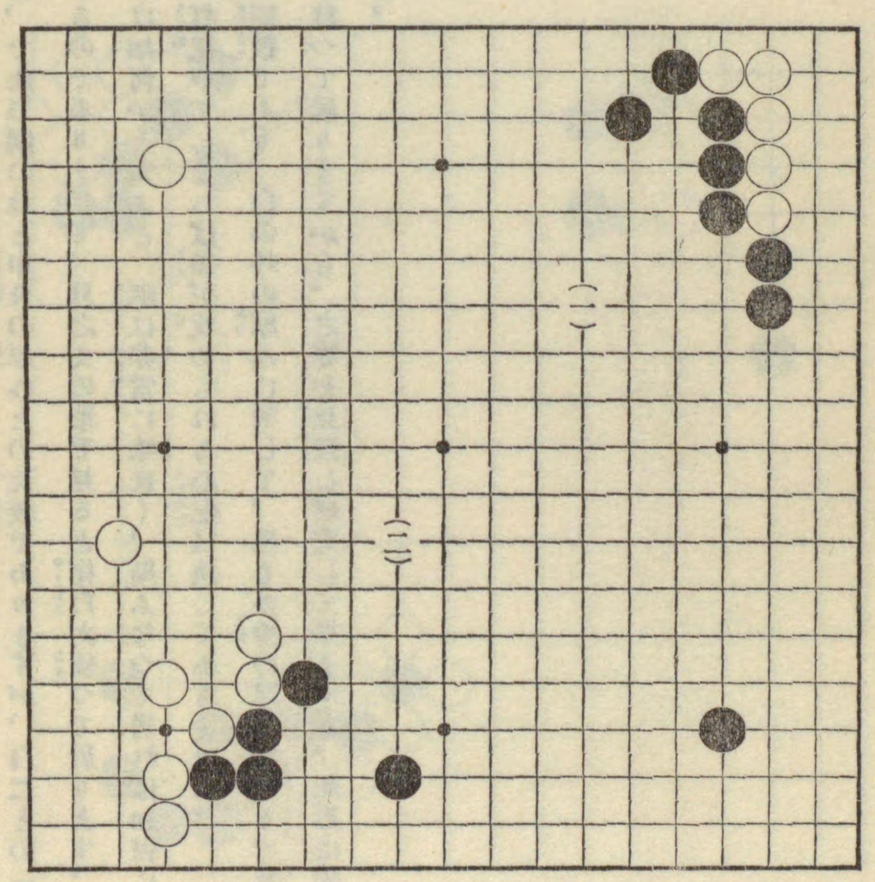
處が黑一と隅の二目を提つた形は如何かと云ふと、隅は非常に味良く、斯ふなつて居れば如何に白が近寄つて來ても、此二目さへ打拔いてしまへば黑が攻められる心配は決してありません。

で石の數は黑十目、白十目、で同數であり、白の外の厚みに對して、黑も多少の厚みはあり、其上隅に十六目以上の確定した地を持つて居りますから、之等を比較し研究して見ますと、此形は先づ互角の分れと見る事が出來ます。

**第六十五圖**　形の善惡を見分けるに、又白黑の費した着手の數を調べて見る必要もあります。(一)では黑の外勢は遙に隅の白よりも優つて居ります、處が此形双方幾目の石を費して居るかと云ひますと、白五目に對する黑七目で黑の方が二目も多くあります。

二目餘計に費して居て扨それで何れが宜いかとの研究になりますが、其見分けは甚だ困難であります。

そこで(二)圖を見ますに、




基礎篇第六十五圖



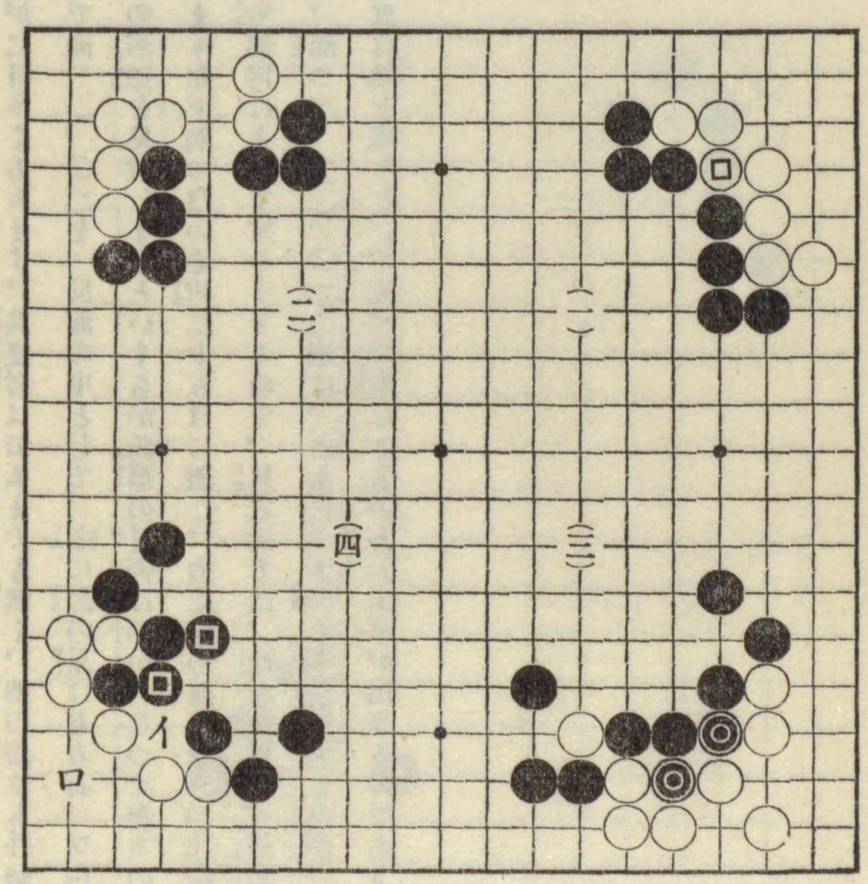


之も白七目に對する黑五目で、白が二目多くあります、其優劣は云ふまでも無く、地の廣さも外勢も遙かに白が優つて居ります。處で此(一)、(二)を一局面の中として、之に黑の星にある石、又白の星にある石を加へて、偖其全面の形勢を見渡しますといくらか此形の可否は明かとなつて參るのであります。で此全面の形勢はつまり左下隅の白の地約二十五目に對し、右上隅の黑の厚みの比較となりますが、無論之は其後の打方如何によつて定りまするので、只之丈では、此形勢は先づ優劣無きものと見られるのであります。隨つて、(一)、(二)の形は、ともに二手多く費して居ますが、二手多く費して、扨之丈の厚み、又は地を得るとして先づ得失なきものと云ふ事が出來るのであります。

**第六十六圖**　先づ(一)、(二)、(三)、(四)の形をよく見ますと其何れも、黑の外勢又白の隅の地には甲乙はありませぬ。處が其費す石の數は如何かと云ひますと、(一)、(二)、(三)、(四)共に皆違つて居ります。

先づ(一)では白七目に對する黑七目、同數であります。同數で之れ丈黑が外を圍んで居るとすれば、此形は黑優勢であります。

(二)は白六目に對する黑七目で黑が一目多く、又此形は




基礎篇第六十六圖





互先定石の中にもあり、双方得失はありませぬ。

(三)は何うかと云ふと、白八目に對する黑十目で、黑が二目多くあります、石の數が二つ多くして、其外勢と隅の地は(二)、(一)と大差はありませぬから、之は黑の惡い形であります。

(四)に至つては、白六目に對する黑九目で、黑が三目も多くあります。三目も多く費して居ながら、其形勢は(一)、(二)、(三)と同じてありますから、此形の黑の大に惡いのは云ふまでもありませぬ。

つまり(一)と(四)と比べますと、一角の形勢は同じでありながら一方(一)の方では、他に三手も多く活躍して居ると云ふ結果でありますから、到底比較にならぬのであります。

つまり之は形の善惡より來る結果でありまして、先づ(一)では白ⓘの一目が不用の場所にあり、(二)は完全無缺、(三)は黑◎◎の邊活動力稍ニブリ、(四)は後に黑イ、白ロになるものとすれば黑ⓘⓘの二着が重複し不用の着手となつて居るのであります。

# 死活篇（其六）

## 劫

死活篇には、前に述べた通り、死、活、攻合、征、門、打替、押つぶし、追落、盤などの別がありますが、此中で實戰に多く出來、又變化の六ヶ敷形は、何と云つても、死、活、攻合と茲に說明致します劫との四つでであります。

劫とは、只其劫の形丈として見れば至極簡單でありますが、前の死、活、攻合、盤などと異り、劫は獨立したもので無く、死となる劫、又活劫、攻合の劫、盤の劫もあると云つた樣に、之等種々なる變化に伴つて劫の意味も異りますから、從て變化の六ヶ敷のも、只此點にあるのであります。

**第四十二圖**　扨劫の原形とは何んなものかと云ひますと、圖の(一)、或は(二)の樣に、白◎の一目は、三方((二)では二方)を黑に圍まれて、當りとなつて居る形で、此時黑先イに打てば白の一目を打拔く事が出來ます。

處が黑にイと打拔かれた時、其跡の形を見ると、黑一は當りとなつて居り、且つ白の手番であるから、白も此一目を打拔く事が出來ます。

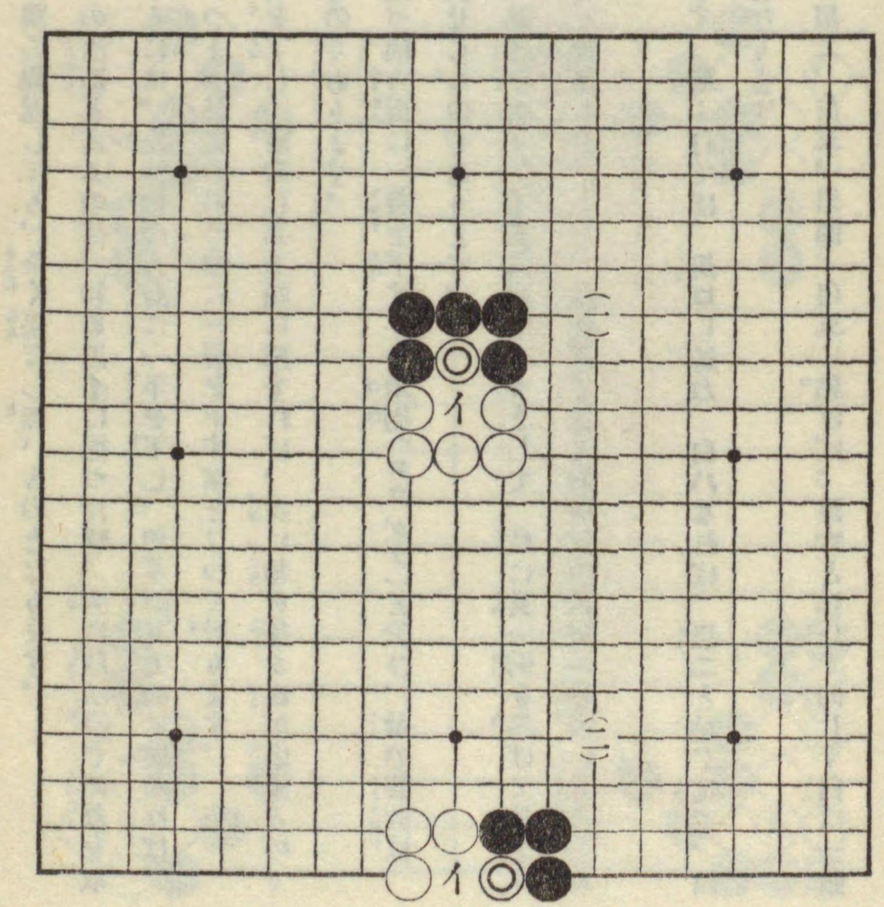




劫とは、常に斯ふ云ふ形から出來るもので、又斯樣に取りあふ狀態を劫と云ふのであります。

但し劫を爭ふには一つの法則があります。其れは圖の形で黑イに打ち◎の白を打拔いたとします、次に白の手番で黑の一目は提れる形にはなつて居りますが、しかし直ぐ此一目を提返す事を禁じられて居ります。

何ふ云ふ譯かと云ひますと、黑イに一目取り、直ぐ次に白◎に提返し、又黑イに提




死活篇第四十二圖

るとしたら、此爭ひは際限無く、幾ら繰返しても、全く果てし無いものとなります。

そこで此劫を爭ふについて一つの法則と云ふのは、初め黑イに提つた時、次に白は直ぐ此劫を取る事は出來ず、此劫を提らんとするには、先づ他の方面に一手を下し、相手が其方面に應ずれば、其時初めて劫を提る事が出來る、つまり劫提の前に他に一着を下す事となつて居ります。

で一方も之と同じく、他に一着を下し、敵若し其方面に應ずれば、次に劫を提る事が出來るので劫に常に斯樣にして繼續さるゝものであります。

又斯樣に劫を提らんとして、先づ他方面に一着を下す手を劫拋（コウダテ）と云ひ、劫の勝敗は、つまり善い劫拋の多少によりて決せらるのであります。

**第四十三圖**　劫となる形は、前述の通りで千差萬別でありまして、茲に其一例を擧げて見ますと、假りに四十三圖（一）の樣な形に遭遇したとして、扨此形で白先如何打つのが一番善い方法であるかと云ふと。

此形で白イに一目を粘ぐとします、斯ふ打てば、黑ロに綽ね、白ハなれば、黑二と粘ぐ迄で、白は隅に二眼を作る餘地無く、死となります。

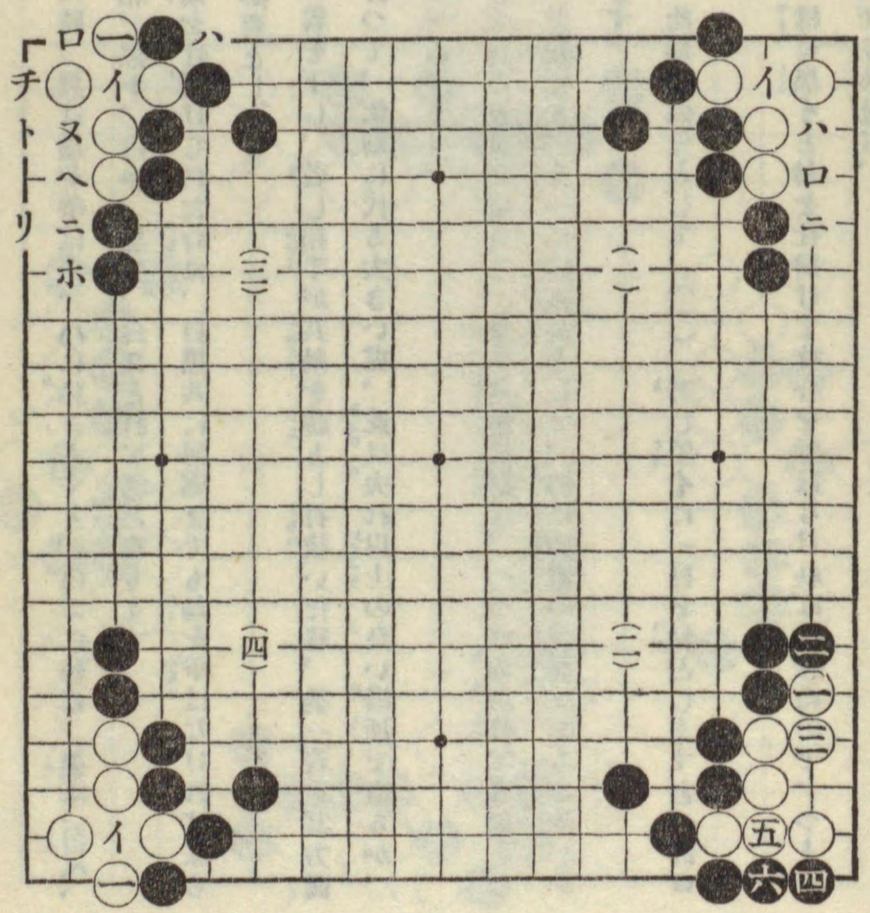
又（二）の樣に、白一に綽れば、黑二、白三、黑四、白五に粘げば、黑六と粘いで同じく白は一眼よりありませぬ。





斯樣に、此形では、（一）の樣に白イと粘いでも、又（二）の樣に白一と綽ね、黑二、白三と粘いでも、共に白に活は無く、此二つの應手は共に惡手となるのであります。

然らば如何打つのが、一番善いかと云ふと、白は（三）の樣に一と打て劫に仕掛けます、劫は此形に於ける最普の手で、つまり此石の死活は劫の勝敗によつて定まるもので若し白劫に勝つてハと打拔けば白活となり、又劫に負けて黑にイ、次に黑にロと打拔か




死活篇第四十三圖

れば、白死となります。

又初めに、白一と劫を仕掛けた時、黒は劫を爭はず、ハに粘ぎますと、白ニに綽ね、黒ホ、白ヘ、次に黒イと劫を提れば、白ロに粘、黒ト、白チ、黒リ、白ヌと打て活となります。

故に此形、(四)圖、白に一と劫を仕掛けられた時は、白黒共に何處までも劫を爭はなければならぬので、又之には前述の劫拋を必要とします。

で劫拋と云ふのは、他方面に一着を下し、若し相手が其劫を勝とし打拔いた時、猶一着を其方面に連け打つ、つまり二着を連け打つて、此劫に代る大きい處、或は夫れ以上の良い場所であるか、によりて劫拋の善惡は定まるものであります。

**第四十四圖**　劫と、劫拋との關係は前述の通りで、劫の至難の點は、一つは如何打てば劫として活或は死となし得るかと云ふ、其變化と、今一つは扨劫として、他に適當の劫拋が有るか無いかと云ふ、此二つの見分けであります。

圖は攻合の劫の形であります、此形で黒先として、(一)、若し黒イに一目を粘としますと、白ロに打て攻合白勝となります。

故に斯かる形では、必ず(二)の様に黒イと劫を仕掛けて攻合を爭はなければならぬので、つまり劫の勝敗は、攻合の勝敗となるのであります。

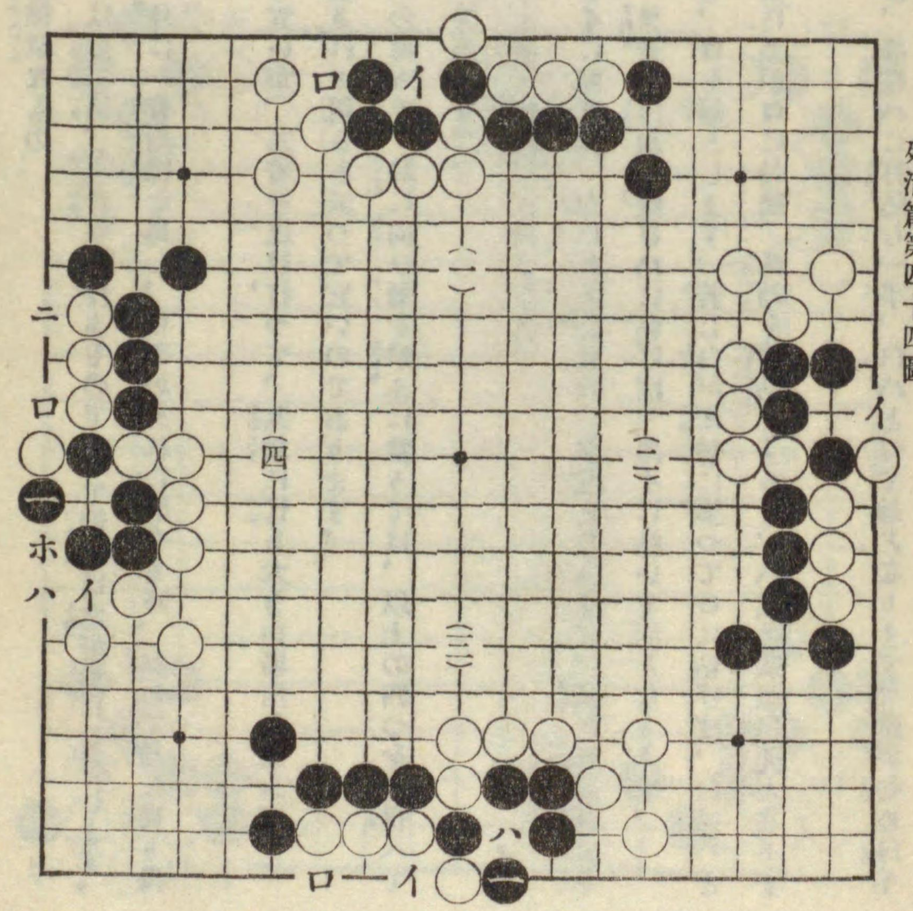




(三)、扨黒に一と劫を仕掛けられた時、若し白イに粘げば、黒ロに當りとし、同じくハ點の劫爭によります。又(四)の様に白イにツメますと、黒ロに打拔、白ハ、黒ニと打て攻合勝。又白イの手をハに打つも、同じく黒はロに打拔、白ホ、黒ニと打て同じく黒勝となります。

で劫についての變化は以上の通りでありますが、茲に夫れ等を綜合し其要點を揭げて見ますと。

一、劫の形は、互に四つ




死活篇第四十四圖

目に抜き合ふまでゞ、至極簡單なもの

二、形は簡單であるが、之には死、活、攻合等の伴ふもので、隨て變化は之が爲に複雜します。

三、劫を提る規定としては、外に一着劫拋を爲し、相手が夫れに應ずる時、初めて劫を提り得ること。

四、劫拋は、盤面上何れでも宜いが、二着を連け打つて、其劫に代る大きい場所を選ぶ事。

先づ以上四つで、劫の大意は盡されて居ると云つて宜いのであります。

**第四十五圖**　劫の要領は以上の通りで、局に向ひ劫を爭ふに當りては、以上の四つを心得へて着手すれば、決して誤りはないのであります。

扨次には、劫についての種々なる形を研究して見ますと。

(一)黑先劫　此形で、黑若しイに粘げば、白にロと打たれ、黑死となります。故に黑は劫の手段でロと打て、イを劫とします。又若し白劫を避けハに粘げば、黑イに粘いで活となります。

(二)白先劫　此形白イに打ち、ロを劫とします、若し白が此劫に勝つてロに粘げば、白はハとニに一眼づゝ二眼となり。又反對に黑がロに劫提、此劫を勝粘とすると、ハ點は缺眼白死となります。

(三)白先劫　白イに附ければ、黑はハに打込む一手、白ハと提て劫となります。處が初め白イ

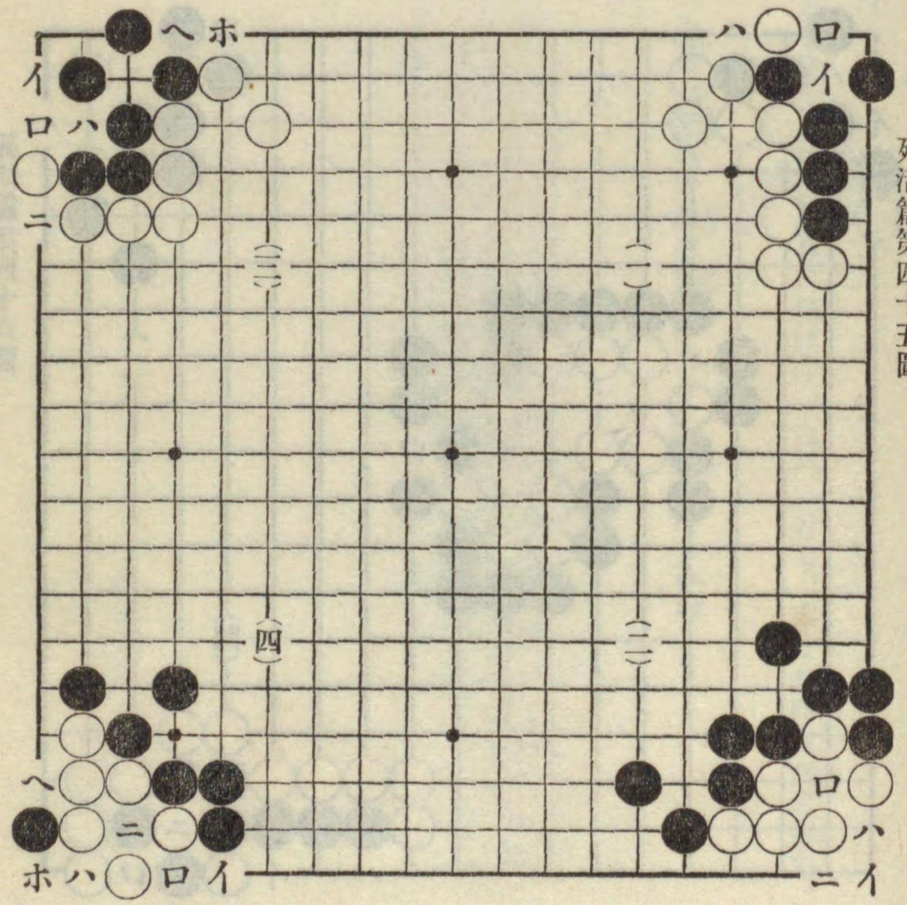




をロに打ちますと、黑イ、白ニ、黑ハ、白ホ、黑ヘとなつて二眼となります。

(四)黑先劫　此形黑先イと下る手が、善い手であります、白ロに眼形を作ると、黑ハに打込三目を當りとし、次に白ホに提れば、黑は此ホを劫とします。又白ホに提らずニに三目を粘ぎますと、黑ホに粘、白ヘに三目提、黑猶ホに點じて白死となります。

又此變化の中で、初め白ロに打つ手を、ホに打込ますと黑ロに眼を缺き、白ヘに提れ



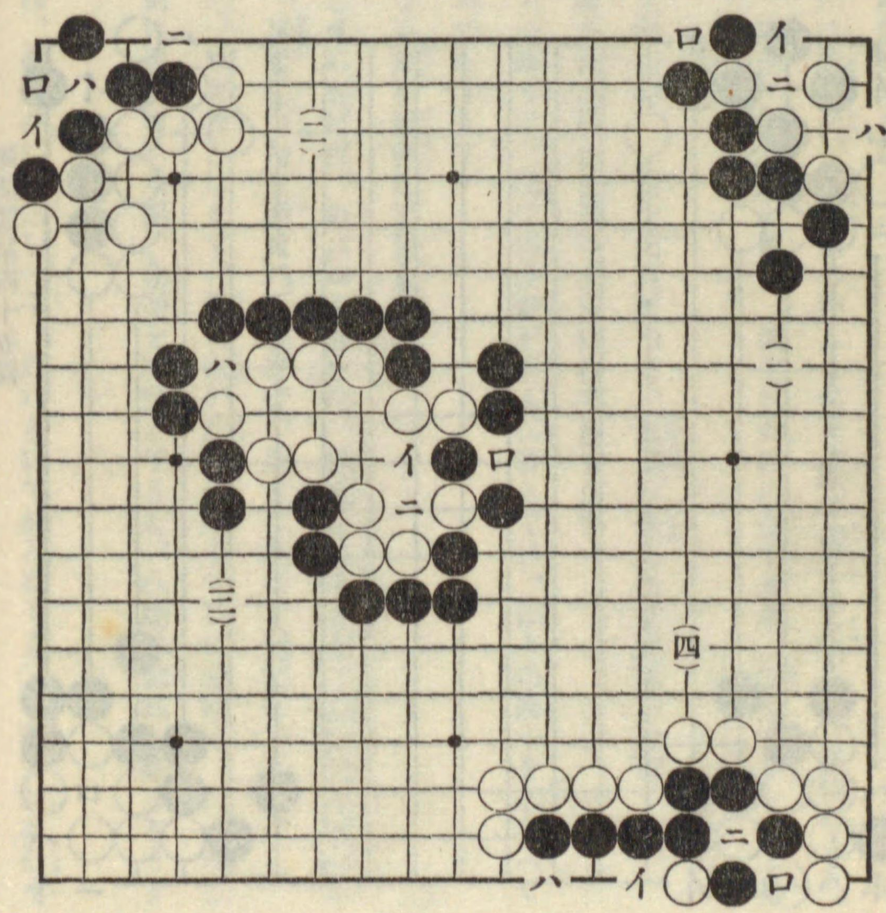

死活篇第四十五圖

ば、黑ニに劫提となり。又白ヘの提をニに粘げば、黑ハの劫提となります。

第四十六圖　(一)、(二)、(三)、(四)共に皆死活の劫であります。此中。

(一)白先劫　白はイと打て劫に應けます、若し黑ロに粘げば、白猶ハに打て、ニを劫とします。

(二)黑先劫　此形黑イに粘げば、白ロに當り、黑ハ、白ニと打て一眼。又黑イの手をニに打てば、白ロに打て同じく死であります、故に黑は








初めロと打つて、イを劫とします。

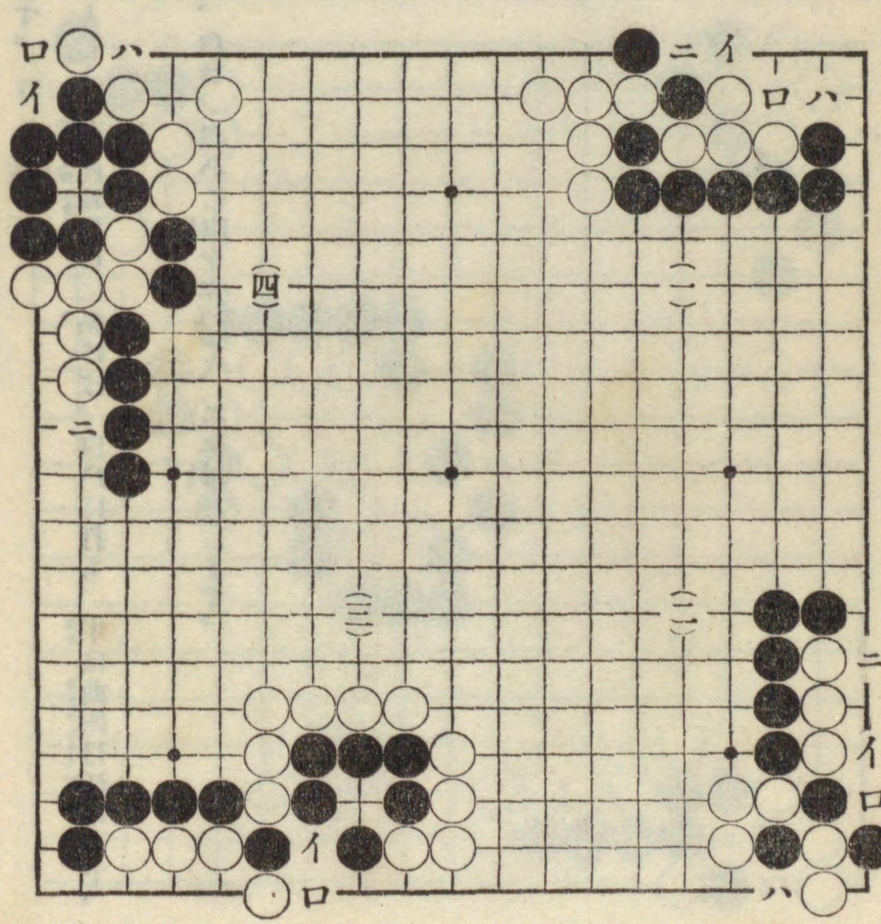
(三)白先劫　白イと打て劫とします、此時黑ロに粘げば、白ハに打ち、中は曲四目活の形で、矢張りニを劫とします。

(四)黑先劫　黑イに一目提、白ロ、黑ハに眼を作つて、ニを劫とします。

**第四十七圖**　圖は皆攻合の劫の形であります。

（一）黑先劫　黑の一目は當りとなつて居り、白の四目は二手でありますから、普通の樣に黑ロに打てば、白ニに打拔いて黑負となります。處が此形黑イに劫を仕掛ける手があります。白ニに提れば、黑は他の劫拋をして此劫を爭ひ、次に白ロに逃げれば、同じく黑ハに當りとし劫とします。

（二）黑先劫　此形黑イと劫に仕掛る手が、大層善い手




死活篇第四十七圖



であります、白ロに提れば黑は此劫を爭ひ、又白ロに提る手をハに提れば黑ニに打て同じく劫となります。

（三）黑先劫　黑ロに劫を仕掛けます、此形では斯く打てイの劫を爭ふより外に良い方法は無いので、外の手では何れも黑敗となります。

（四）白先劫　白イに打込んで劫となりますが、次に黑ロに提り、白ハ、黑ニ、白イと提て同じく劫となります。

# 死活（死活と劫について）練習（二十目置碁）

茲には劫となる形と、劫抛との實際の變化について説明する事と致します。

**第十二圖**　初め白一と附けた時、黒は先づ二と隅に着手して四、△の堅い方面に白を攻め、次に白三に行びれば、黒も四と堅く粘いだので斯く行に對する粘は定法となつて居ります。

白五に對し、黒六の約へは良い手で此形黒四、六は綽となつて居り、且つ黒△の一目があります から、斯く約へて少しも危險はありません。次に白七に對しては、黒八は普通の應け手であります。

白九の綽は、此場合劫に仕掛けよふとする強い手で、白としては、此方面の形を紛はしくするには、斯ふ打つ外はありませぬが、然し黒としても、次に十と切り、以下劫爭となりますが、黒も此劫の難關を越へてしまへば、却て分り易い、打易い局面となるであります。

白十一に劫に仕掛ける手は、圖の樣な局面で、まだ他に白黒石が接した場所が一つも無く、隨て劫抛として二着を連け打つても、好い所の無い局面では、善い手とは云へませぬ。

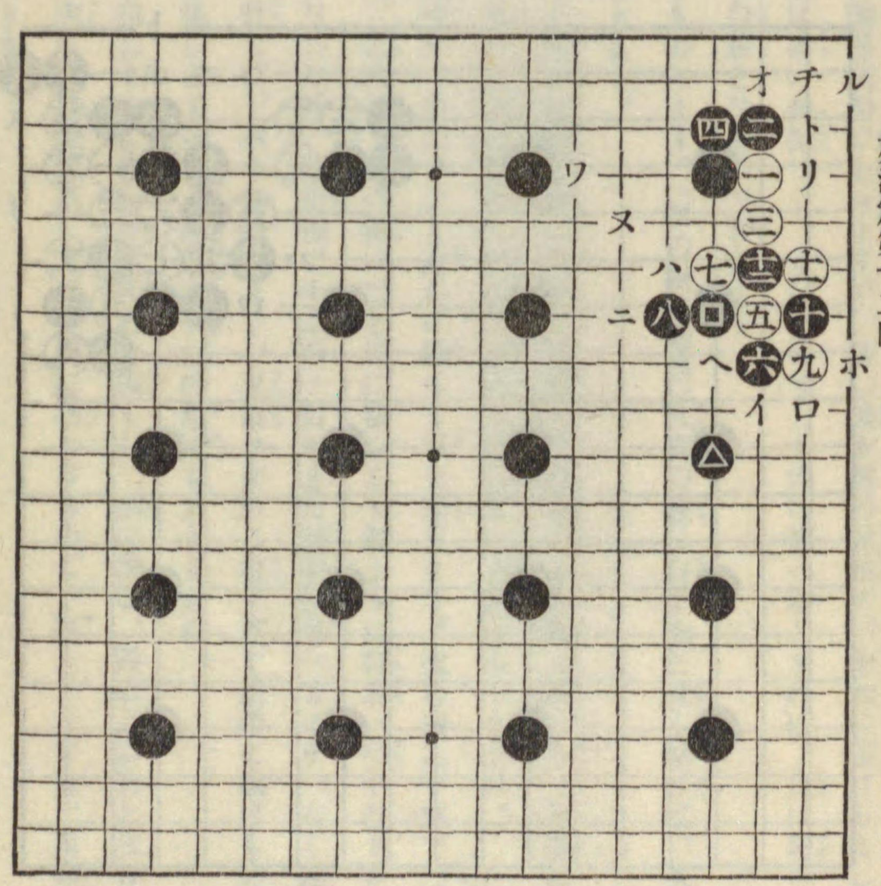
然し白としては、斯く十一に劫を仕掛けるより外に、好い手は無いので、外の手では如何打ても完全に活とする方法はありませぬ。假りに此手を十二に粘ぐとしますと、黒はロと打て九の一目を





取り、白ハに切れば、黒イ、白十一、黒ホに一目打拔、白ハ、黒ニ、白トなれば、黒チの約へとなり、次に白リに粘ぐも黒はヌと打て外を圍み、白ル、黒オと粘いで、此方面に白は一眼よりありませぬ。

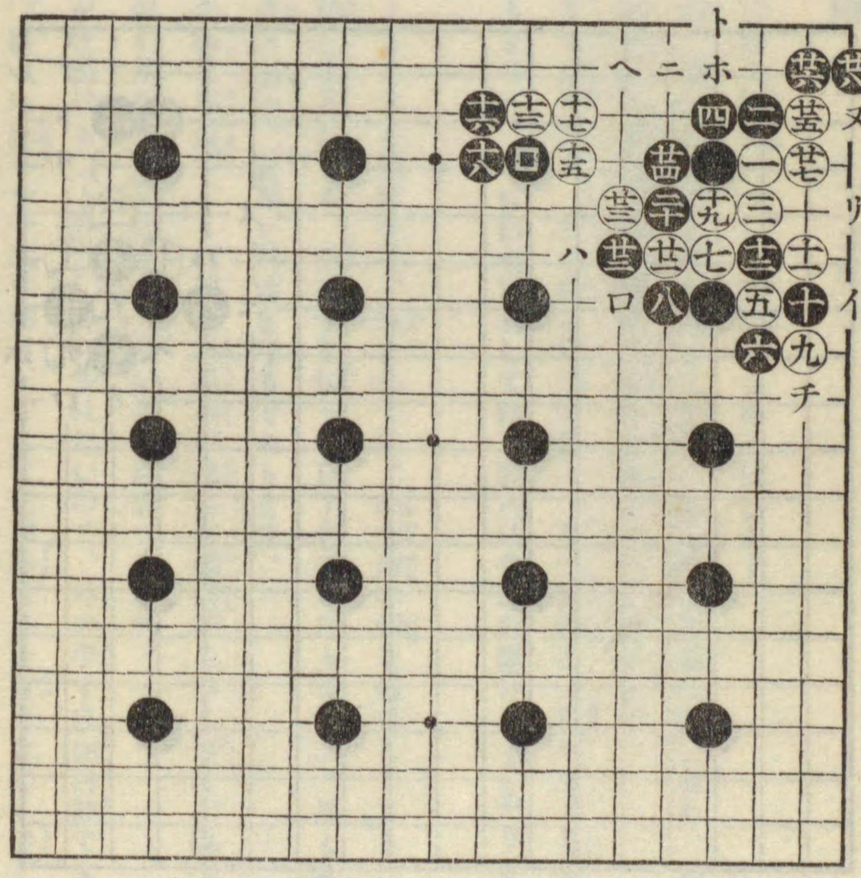
又白リの粘で、ヌに打て外に逃出そうとする手も、黒ワに應けて居て、斯かく多數置石のある中央に向つては、矢張り白に逃げる方法は無いのであります。




死活篇第十二圖

**第十三圖**　黑に十二と劫を取られた時、白は他に劫抛をしなければなりませぬが、扨斯かる局面では、前に述べた通り善い劫抛はありませぬ。

止むを得ず、十三に附けて黑㊀に迫つて見ましたが、此處は石の死活に關する處でもありませぬから、黑は云ふまでも無く、十四と打て劫勝粘次に白十五に綽ねた時、黑は十六と約へ、又此十三、十五の二目をも攻めたのであります。








既に斯ふ云ふ變化となれば、無論黑優勢でありますが、若し黑十四の劫粘で、十七に應けるとしますと、白丸に劫提となり、今度は黑に劫抛なく、止むを得ず、十六に抱へるとすれば、白は此一目を捨て、イの打拔となつて、劫白勝となるのであります。

白十七では十八に切つて戰ふ手もあります、（次の變化參照）又圖の樣に白十七と堅く粘げば、次に黑も十八に粘ぐのが良い手であります。

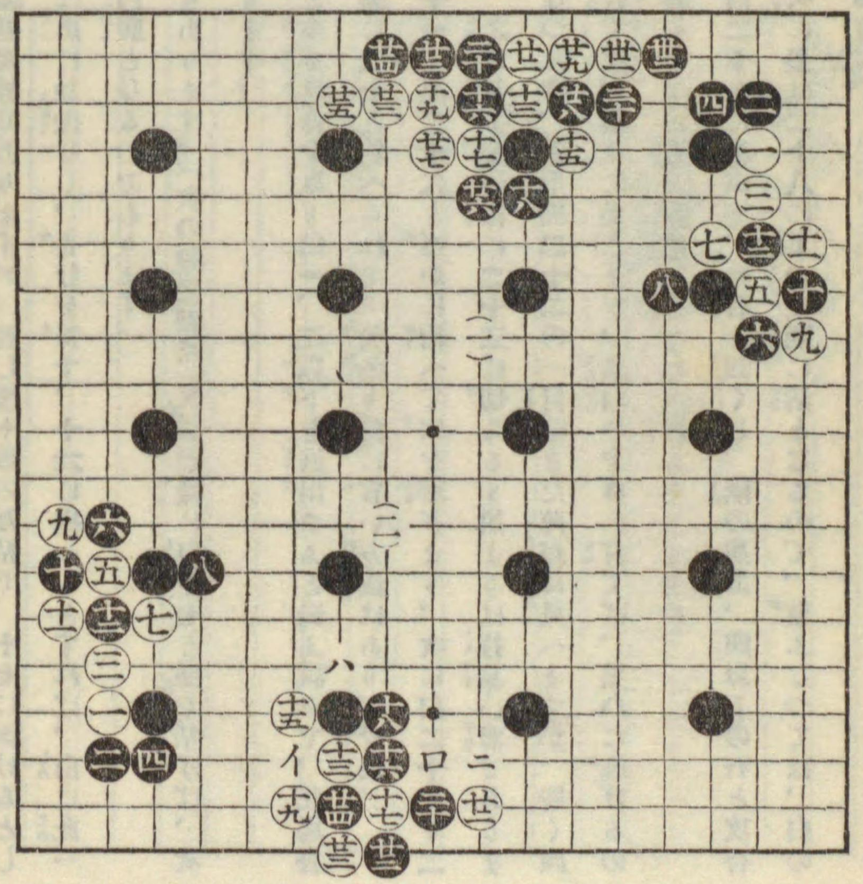
白十九の粘は、白の十五、十七と多少連絡を取り白一、三以下を逃出さふと云ふ試みで、此場合止むを得ぬ手でありますが、次に黑に二十と約へられて、矢張り白に宜い方法はありませぬ。

其變化は、黑二十の約へ、白二十一、黑二十二と直かに約へて出を塞ぎます。次に白二十三で二十四に切れば、黑二十三に粘ぐ迄、之は却て圖の樣に二十三に切らるゝ黑よりは打易い形であります。で斯く白二十三、黑二十四となつた時、此形黑二十二の一目がまた薄弱に見へますが、斯く四方の黑の堅い形では、次に白八に打てば、黑ロに粘ぐまで、又白八をロに打てば、黑八に逃げるので何れの手でもすぐ他の味方に連絡しますから、此黑は少しの危險もありませぬ。

次に白二十五と綽、黑二十六、白二十七に粘いで、此石を強くし、隅の黑二、四以下の石と攻合としよふとしたのでありますが、次に黑は二十八に下つて隅に活となるので、斯ふなつては、白の敗は益々明瞭となつて來たのであります。

猶斯かる形となつた時、次に白二に打つとしますと黒ホ白へ、黒トに下つて隅は曲四目の活、次に白イに盤れば、黒チに約へ、白リ、黒又となつて、白に手段はありませぬ。

**第十四圖**　劫勝粘となつた形の如何に有利であるかは前圖の結果によつて見るも明でありますが、猶詳細に、劫勝粘と劫替りとの得失を比較して見ますと、(一)圖、黒十四の劫勝粘は、此一手で白の數目の活動力を奪つて、此



死活篇第十四圖　㊀劫粘



方面に三十目の地を確定する事を得ましたが、之に對する白の劫替りとして得た結果は何ふかと云ひますと、只十三、十五と二着連けて打つたと云ふ迄で、少しも黒の死活には影響無く、猶其上に黒に十六と約へられて、却て白二目は攻められる結果となつたのに過ぎませぬ。

白十七に切り先着を利用して戰とした手も、斯く他の方面に黒石の多い形では、矢張り無理で、黒は十八に行び、白十九と打つも、黒二十に下り、白二十一の時に、黒先づ二十二に打て二目の活力を多くし、次に白二十三では、チカに二十四と約へたい處でありますが、十七、十九は切々の形となつて居るから、止むなく二十三に行び、黒二十四、白二十五の行となりました。

扨此時黒は十六以下の四目を見るに、活力は四つに延びましたから、黒二十八と切り、白二十九、黒三十、白三十一、黒三十二と約へて、此石と攻合とし黒一手の勝としたのであります。

(二)、之も白十七からの變化でありますが、圖の樣に白十七と二段に綽ねた手は、所謂手筋で大層面白い手であります、若し此時に黒十八で、二十四に切り、白イ、黒二十と一目を抱へますと、白十八、黒ロ、白ハと一目を打拔きます。此形は白十七の一目を捨石として上の一目を打拔きますから、之れは白有利の形であります。

黒十八は確で、此手は白の十七の二段綽に對する應手として一番善い手であります、白は次に十九に掛粘、黒二十、白二十一と附け盤を打つた時、黒二十二に綽ねたので、白は此時二十四に粘げ

ば黑二と打つて、二十一の白は全く連絡の無い石となつてしまひます。

故に白二十三と劫に應けましたが、黑二十四の劫提となつて、同じく次に白に善い劫拋も無く、次に白は何處へ打ても、黑イの劫打拔となつて黑全勝の勢となるのであります。



# 基礎篇（其五）

## 形の用ゐ方と得失

形は、一卷で說明致しました通りで、石と石と直線にある場合と、石と石と斜線にある場合と、石と石と離れてある場合との、三つで、之れ以外には決して變つた形はありませぬ。

又其直線行の中、斜線尖の中、離れて打つ飛の中、此三つの中にも、他の黑白の石との關係上、種々名稱を異にし、又意味を異にする事も前述の通りであります。

で此基礎篇の五では、夫等の色々に異れる形の用ゐ方と得失について說明する事と致します。先づ

**第六十七圖**　行について、行は前に述べた通り直線に打つ形の總稱でありますが、又單に行の形についての意味は(一)及び(二)圖で見る通り、敵の石よりも一歩先きに進む手でありますから、此手は石を發展せしむるには、直線に打つ形の中では、一番優つて居ります。

次に押とは、行に對する形でありまして、押せば行びる、又行びれば押すと云つた樣に、此二つは關聯した形となつて居ります。又此手は(三)、或は(四)で見る樣に、敵より一歩後れて打つ手であ

りますから、行の形に較べると、發展力は劣つて居ります。

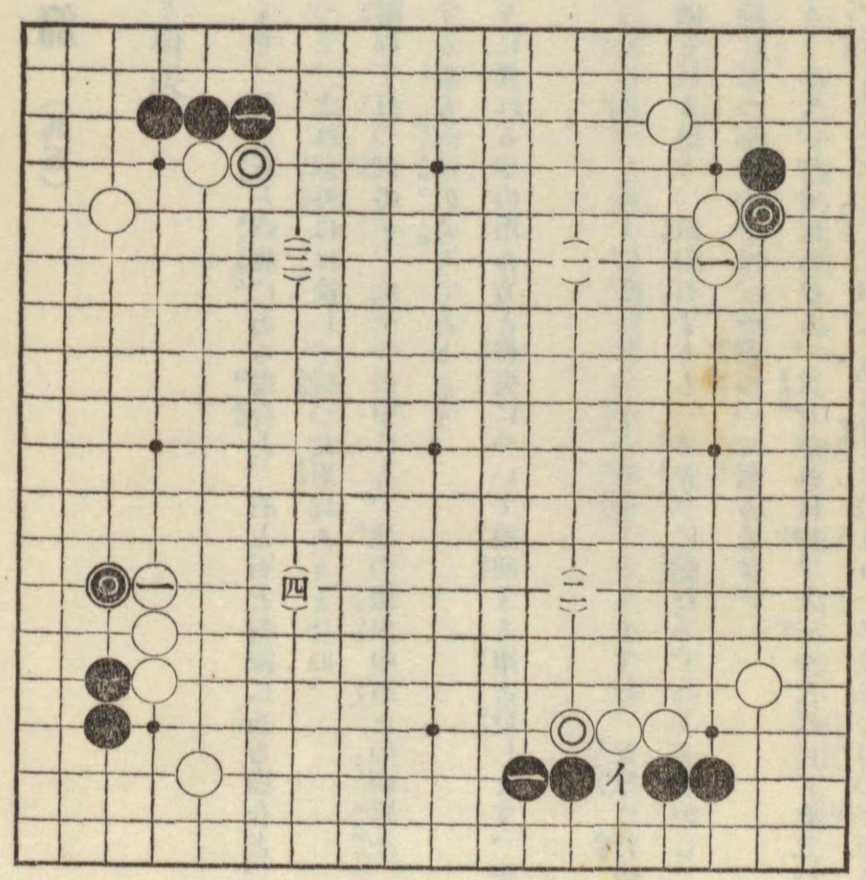
敵に行は(一)の様に先きに發展する時、又(二)の様に一歩進んで根據を占める時に用ゆる手。押しは(三)の様に敵に約へらるゝを防ぐ時、又(四)の様に敵を約へようとする時用ゆる手となつて居ります。

**第六十八圖**　立と下

立は(一)、黑◎に對して白一と立つ手、又(二)、黑△に對して白一と立つ手を云ふので、此手は敵の石より一歩先きに、中に向ひ眞直に行出す形であります。

又此立の中でも、(一)では我石を守りながら、中へ進み(二)では、中へ進むと同時に中に形勢を得る手で、何れも中央を主として打つ場合、用ゆる手であります。

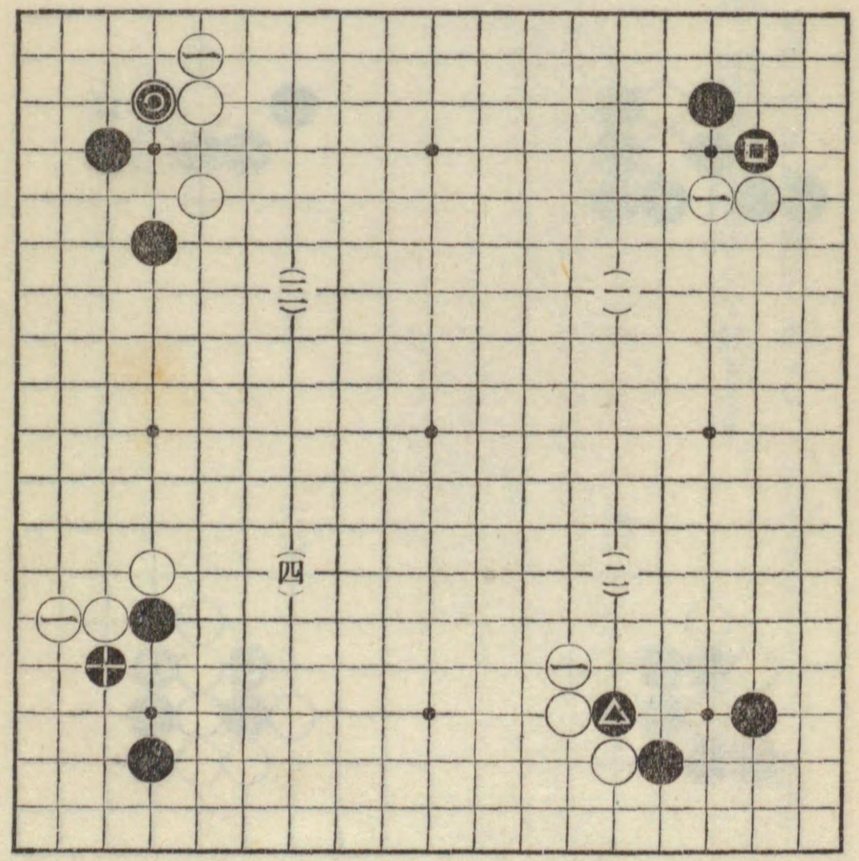
(三)は、黑◎に對して白一に下り、(四)では黑✚に對して、白一に下つたのであります。で此下りは、圖の様に、下邊に打つ手でありますから、立の様に中に勢を得る場合で無く、下の地を主とする




基礎篇六十七圖







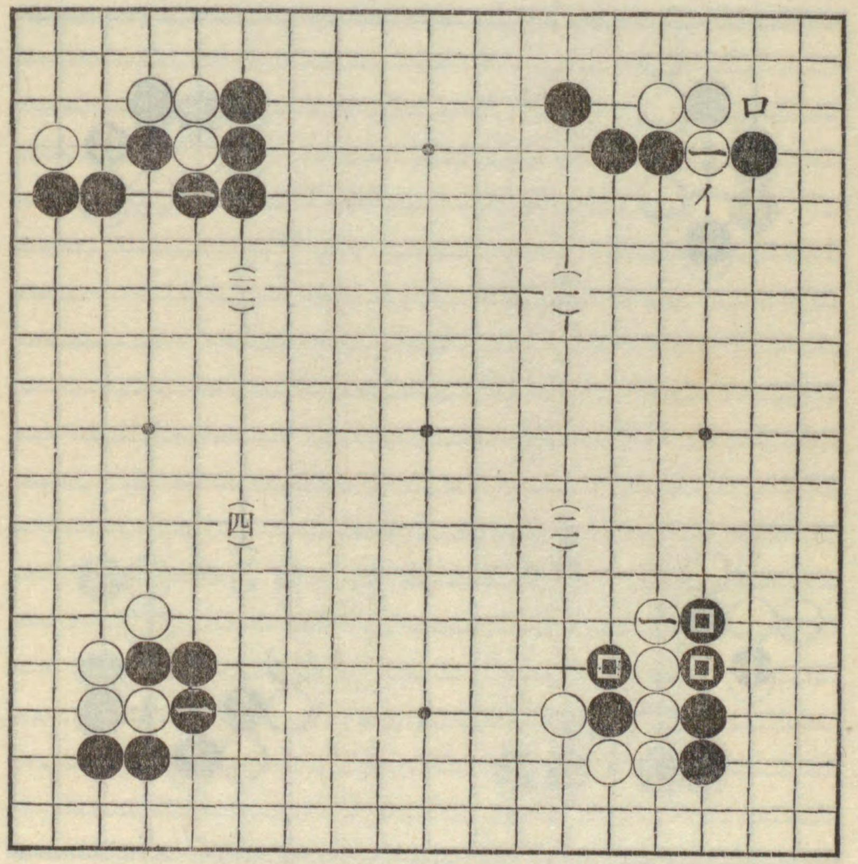

基礎篇六十八圖

時用ゆる手であります。

**第六十九圖**　出と約出の中には、形によりて、次に外に突出さうとする意味の時と、既に外へ突出した形との、二つがあります。

（一）では、白一と將に突出さうとする手で、此時黒にイと打たれると、其出を止められてしまふのであります。

（二）では、既に突出した形で、斯樣に外に突出した形となると、自然黒□□を左右に隔てゝ、黒を攻める形になりますから、斯かる出は、大層




基礎篇六十九圖



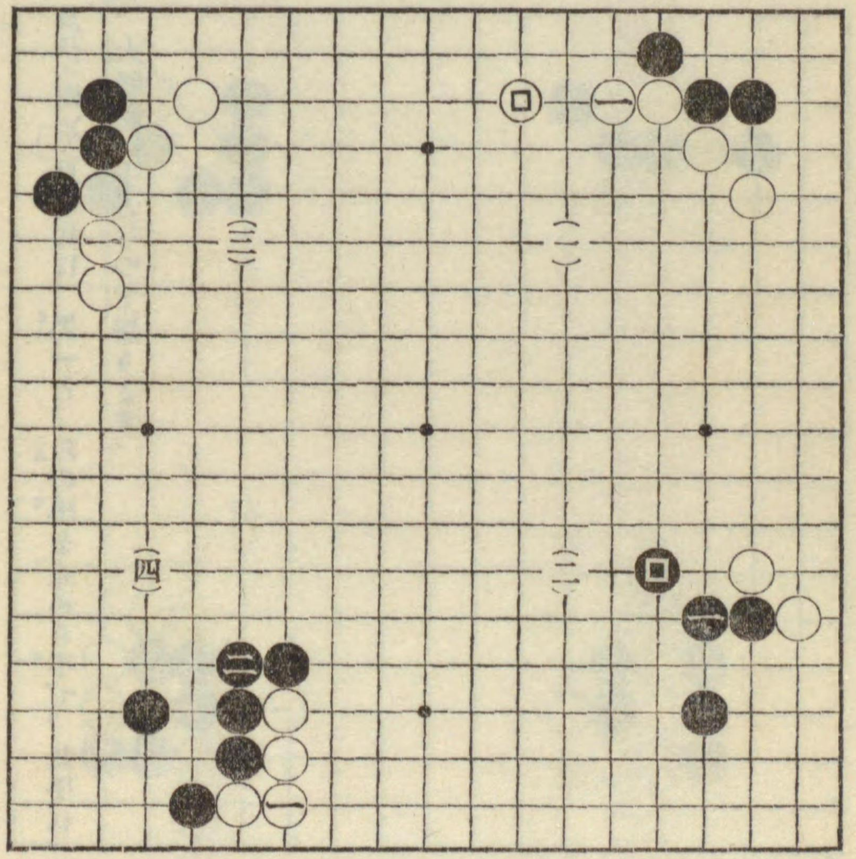
善い手となります。

約へは、出に對する形で、（三）、及び（四）で見る樣に、黒一と、白の出を止める手で、此手は、實戰では敵を圍み、且つ攻める場合、大層善い手となつて居ります。

**第七十圖**　引と粘　引

は味方の石に接續する手であります。(一)では㊀の白に白一と引き、(二)では㊀の黒に黒一と引いた手で、此手は次にある粘の樣に、直接の連續で無く、間接の連續であります。

(三)の白一、及び(四)の白一、黒二は、皆粘の形で、此形は實戰では、味方の石を一つとし强力のものとしますから、多くの場合最善の形として、用ゐられて居ります。




基礎篇七十圖

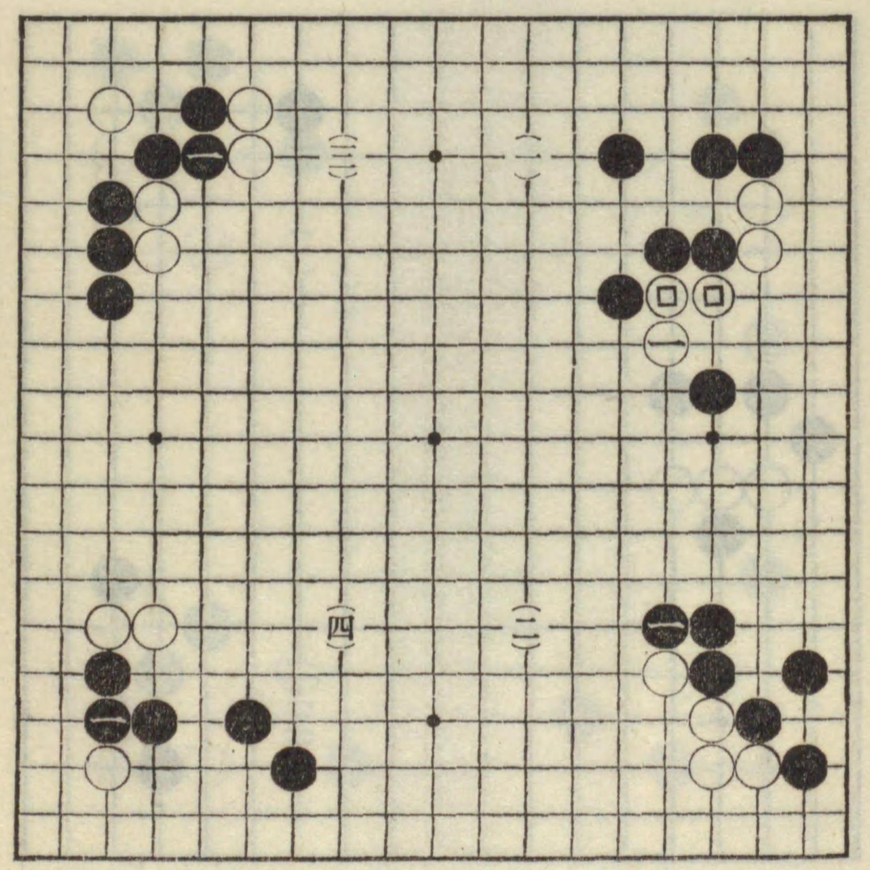




**第七十一圖**　曲とグズミ曲とグズミと、此二つは共に石を三角形に打つ形で、場合により、多少活力を重復する嫌もありますが、又場合により大層善い手となる事もあります。

で此曲とグズミとは、形は同じでありますが、其異る點は、一つは、前に述べた通り外で打つ場合、之を曲りと云ひ、内で打つ時をグズミと云ひます。

今一つは、(一)、(二)の樣に、白㊀㊀(一)圖)の行の形

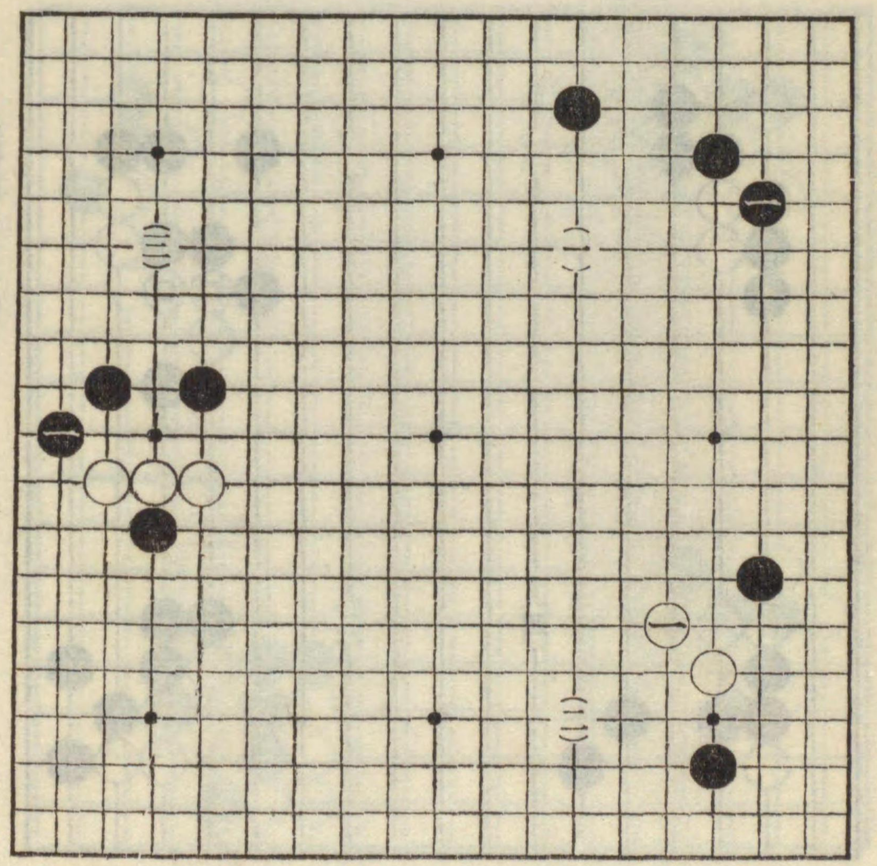



基礎篇七十一圖

から三角形に打つ手を曲りと云ひ、(三)、(四)の様に尖の形から三角形に打つ手をグズミと云ひます。

**第七十二圖**　尖　尖の中にも色々の着意はあります。

先づ(一)では敵の石の無い場合、單獨に打つた手で、此手は星の黑と連絡を取り、隅を堅くした手。(二)では石は接しては居りませぬが、此一の尖によつて黑を隔てる意味の手。(三)の黑一は白の根據を衝き、之を攻める着意であ




基礎篇七十二圖

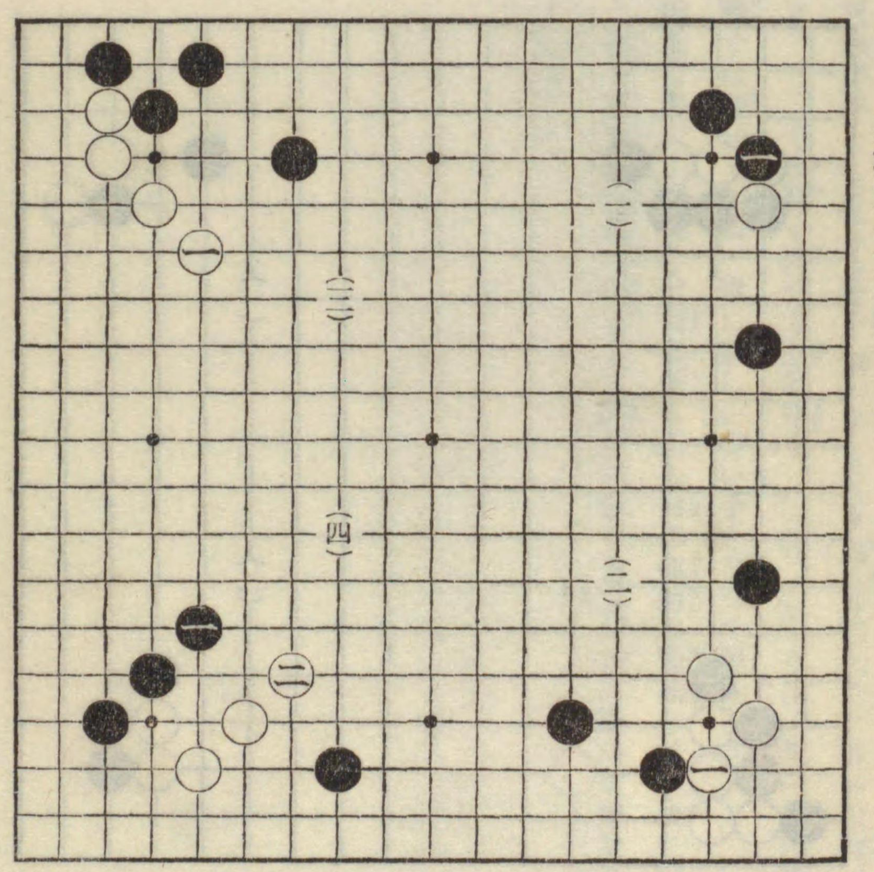




ります。

**第七十三圖**　尖附と雁行尖附とは尖の形で敵の石に附け打つ手で、此尖附に攻と守りとの二つの場合があります攻は(一)の様に、黑一と尖附けて、夾みの他の一つの黑と應じて、白一目の根據を奪つて之を攻める手。守りは(二)の様に、白一に尖附けて隅を守り此石の確にしたのであります。

雁行は、尖又尖と連け打ち進む手で、此形は、(三)の白一、(四)の黑一、白二との様




基礎篇七十三圖

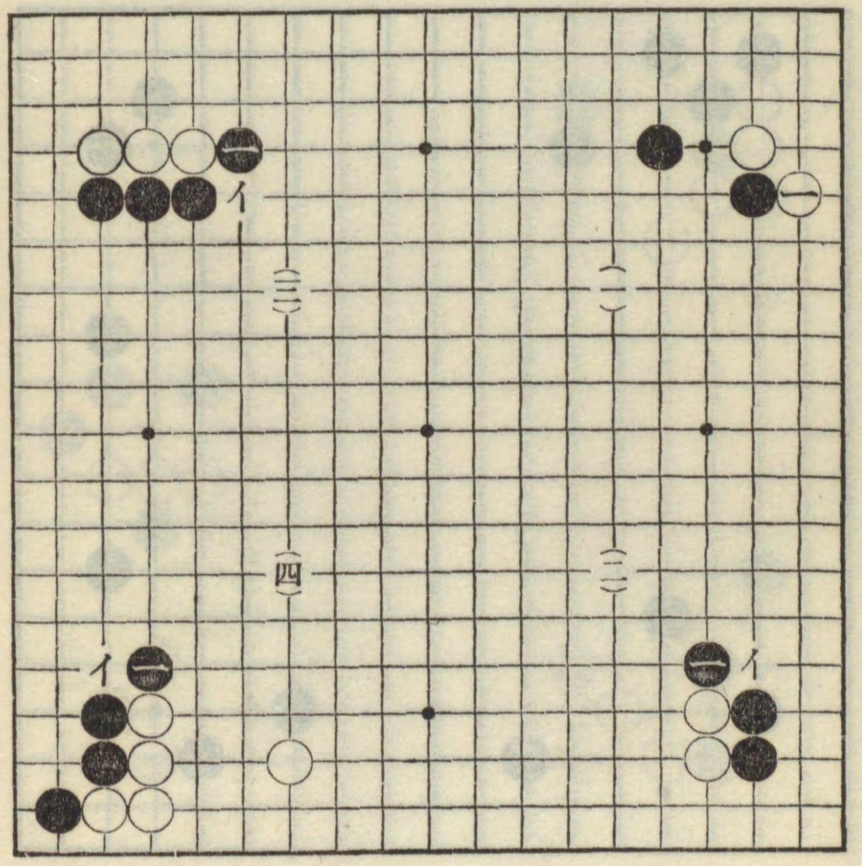
に、皆敵の石と相對し中央に進む手であります。

で同じく中央に進む手としては、一間飛或は斜走よりは少しニブイのでありますが、然し(三)、(四)との樣に近くに敵の石のある時は、此石との關係上、斯く尖々の形が一番好形となつて居ります。

**第七十四圖**　綽　綽と

は必ず彼我の石の接する場合に出來る手で、手としては前の行の中の何の形よりは手強い意味を持つて居ります。

故に此手は其時の形勢によ




基礎篇七十四圖





りて、善い手となる事もあれば、又無理手ともなります。善い手となる場合は、(一)白一の綽、(二)黑一の綽、(三)黑一の綽なぞで、(一)では斯く打つて白を守り、(二)、(三)では、黑一着の先手を利用し攻勢を取つたので、實戰では斯かる綽は、常に劇しい好い手となつて居ります。

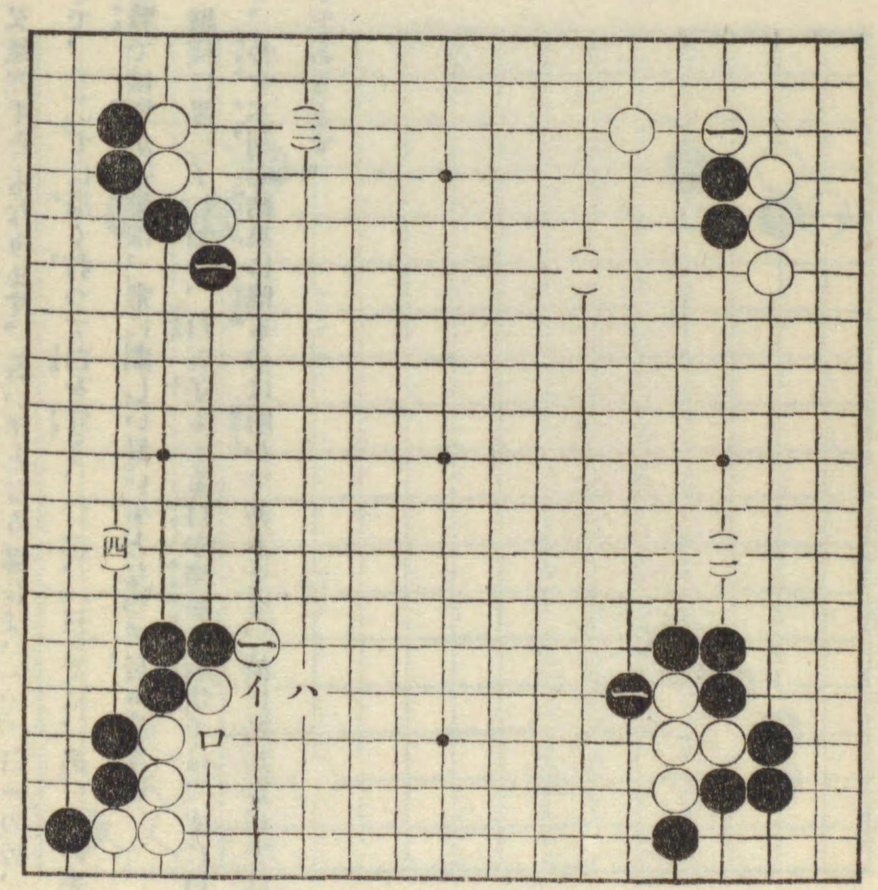
處が(四)の黑一の綽は無理で、斯樣に黑三子に對し、白五子もある白の優勢な場所では、次に白にイと切られ、石を兩斷せられて、必ず不利の結果に陷るのは明かであります、故に斯かる形では一はイと、行の形に打つのが本手であります。

**第七十五圖**　綽卷り、二段綽

綽卷りは、形は前の綽と同じでありますが、綽の形によりて、敵の根據を奪ふ手でありますから、之は實戰では大層善い手となります。

先づ(一)では、白一と綽卷りを打つて黒二目は全く根據の無い浮き石となつてしまひます。(二)も(一)と同意味で斯く黒一と綽卷りを打つて、黒四目は所謂「駄目づまり」となり、逃げる手の無い石となつてしまひます。

二段綽は、綽又綽、と連續







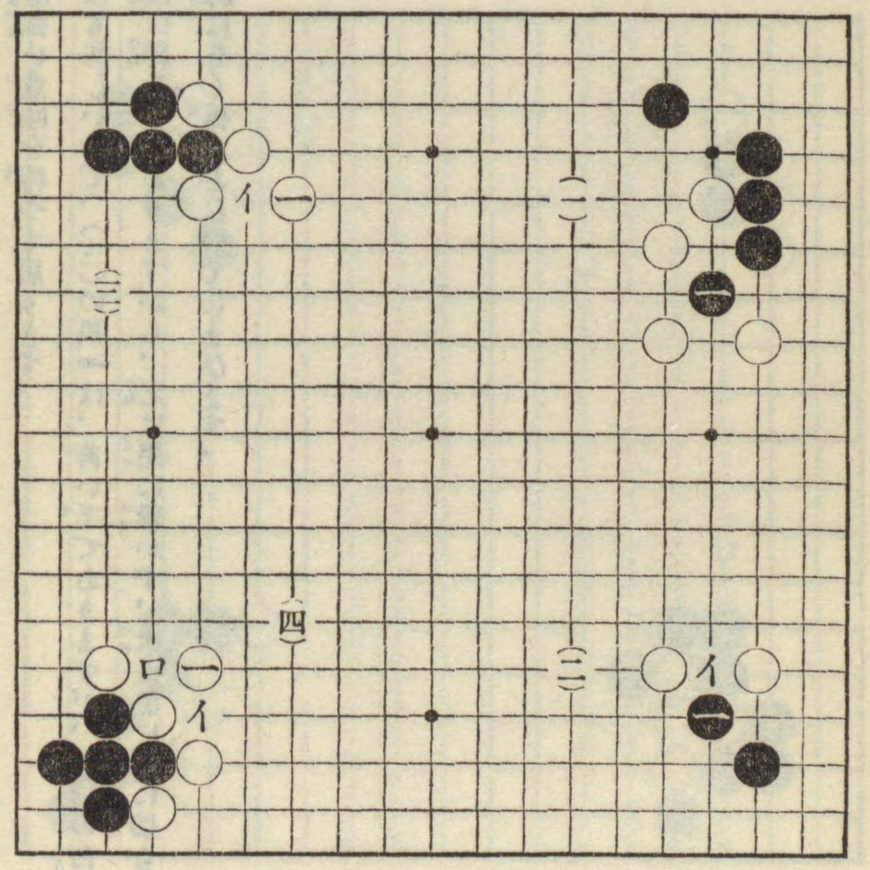

して綽ねる形で、之は綽よりも一層強い意味を持つて居ります。

故に此手は綽より猶一層善惡の差も甚しいので、(三)の黒一は、善い手でありますが、(四)の白一は黒の堅い石に向つて、一と二段に綽る手でありますから、之は黒に響かず、次に黒にイに切られ、白ロ、黒ハとなつて、此一の綽は全く孤立となつてしまひます。

## 第七十六圖　覗　掛粘

(一)と(二)の黑一は覗の形であります。覗きは敵の缺點を衝き次に斷ち切らうとする手で、之にも亦善い場合と惡い場合とあります。(一)の黑一は白を斷切る事の出來る善い手でありますが、(二)の黑一は次に白にイと粘がれ、徒に白を堅くせしむるので、之は惡手であります。

(三)と(四)の白一は、共に掛粘の形で、之は石を接續する手としては、堅く粘ぐよりも優つて居る場合もあります

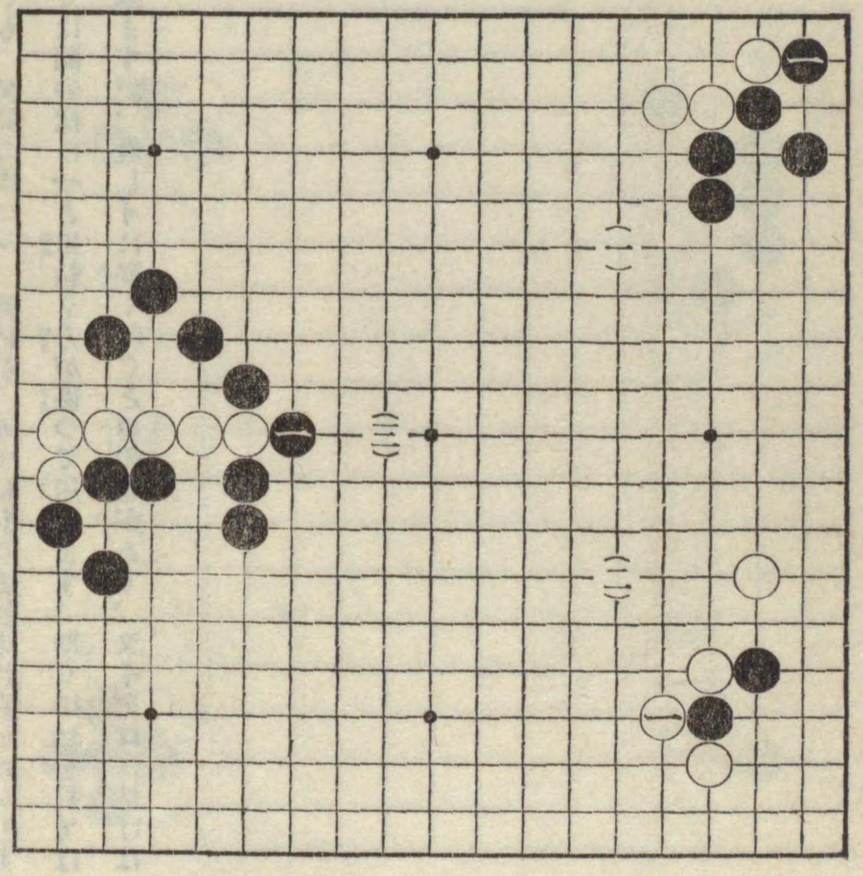





先づ(一)では、此手をイに粘ぐも、又圖の樣に一に掛粘も、何れもイの切を防ぐ手でありますから、大差はありませぬが、(四)では圖の樣に一と掛粘ぐ方が優つて居ります。斯く掛粘を打てばイとロとの切を同時に防ぐ事が出來ますが、若しイに堅く粘ぐとロの切があり、又イをロに粘げばイの切が殘つて居ります。

**第七十七圖**　約　約は行、尖の兩方に出來る形であります。で此約は、場所又は形によつて色々と意味を異にするのでありまして、(一)の黑一は隅を守る手。(二)の白一は、黑を約へ突出しを防ぐ手、(三)の黑一は、之も白の突出しを防ぐ手であります。

で此中(三)の黑一の約へは最緊要の手でありまして、圖の樣に黑一に打てば、此一手で白の出を止め、六目を取る事が出來ますが、若し此點を反對に白から突出されると、



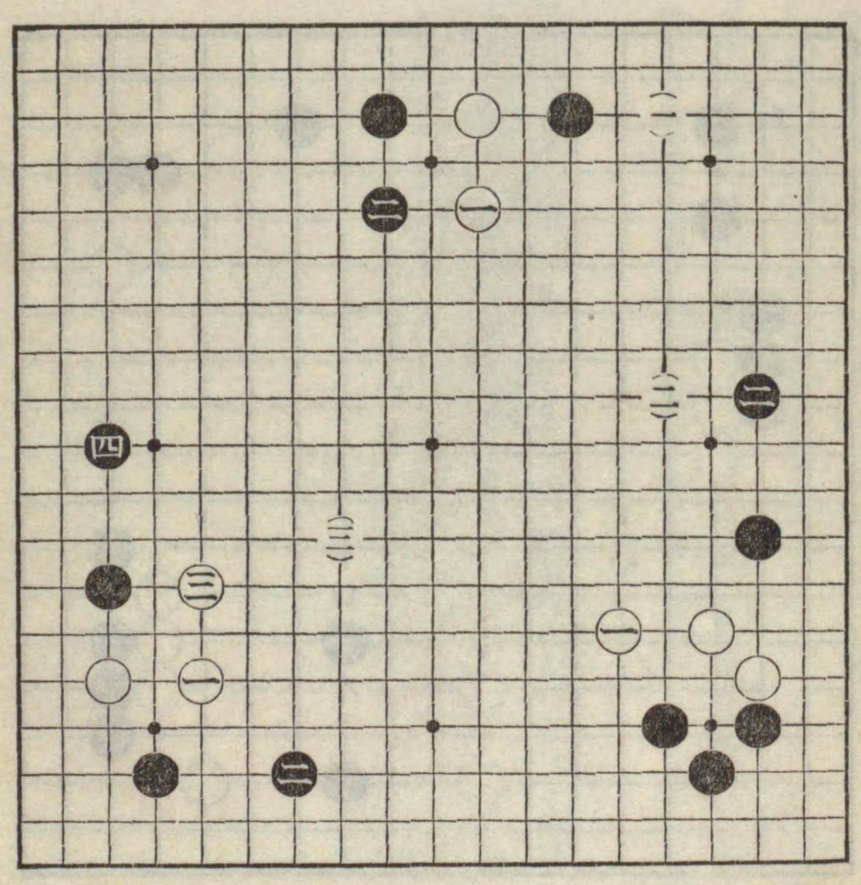

基礎篇七十七圖



只白を逃がす許りでなく、黑は石を左右に隔てられ、却て黑石が攻められる結果となります。

**第七十八圖**　一間飛　敵味方の石が、離れてある場合に、中央に進む手としては一間飛が、一番確かな善い手となつて居ります。

(一)では白一に飛び、黑二に飛となり。(二)では白一に飛び、黑二に二間に打ちました。で此一、二は何れも或る石を基點としての飛の形でありますが、斯く盤の三線(或



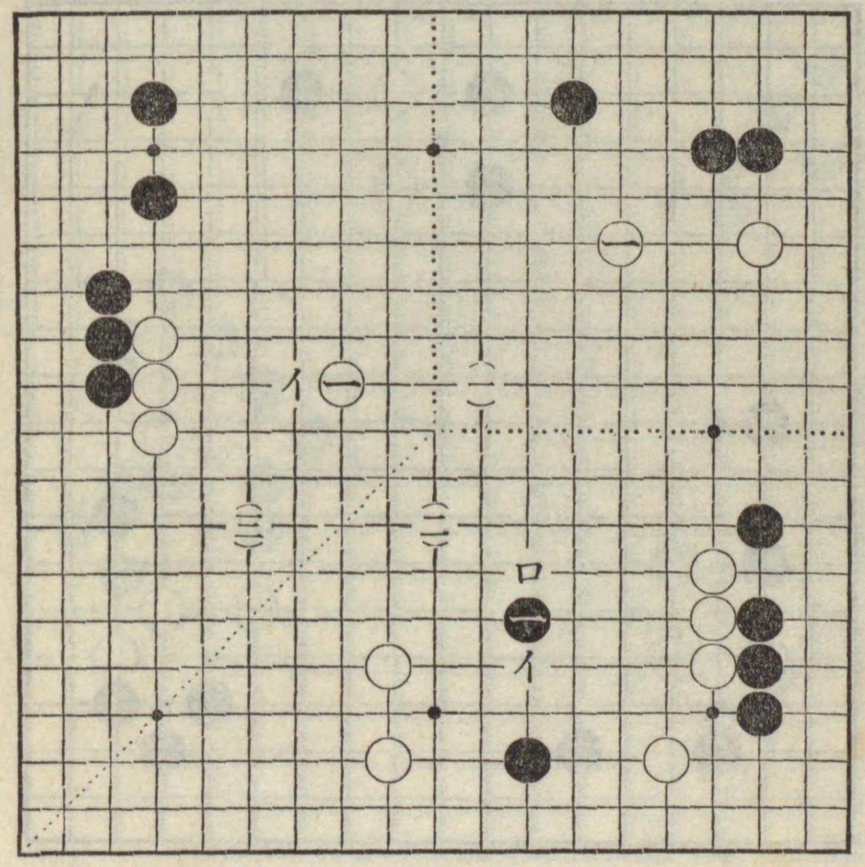

基礎篇七十八圖

此二間飛の形は、一間よりも（四線）の側方に打つ形は、之を飛と云はず拓と稱して居ります。

次に猶（三）圖で飛と拓とを區別して見ますと、白一は一間飛、黑二は二間拓、白三は一間飛、黑四、二間拓の形であります。

**第七十九圖**　二間飛、三間飛

（一）、（二）の一は二間に飛出した形であります。飛は前に説明しました通り、中に向つて進み出す手で、七十五圖（二）、（三）の様に側方




基礎篇七十九圖





に進む手ではありませぬ。て早く進む事は出來ますが、其代り危險も伴つて居ります。

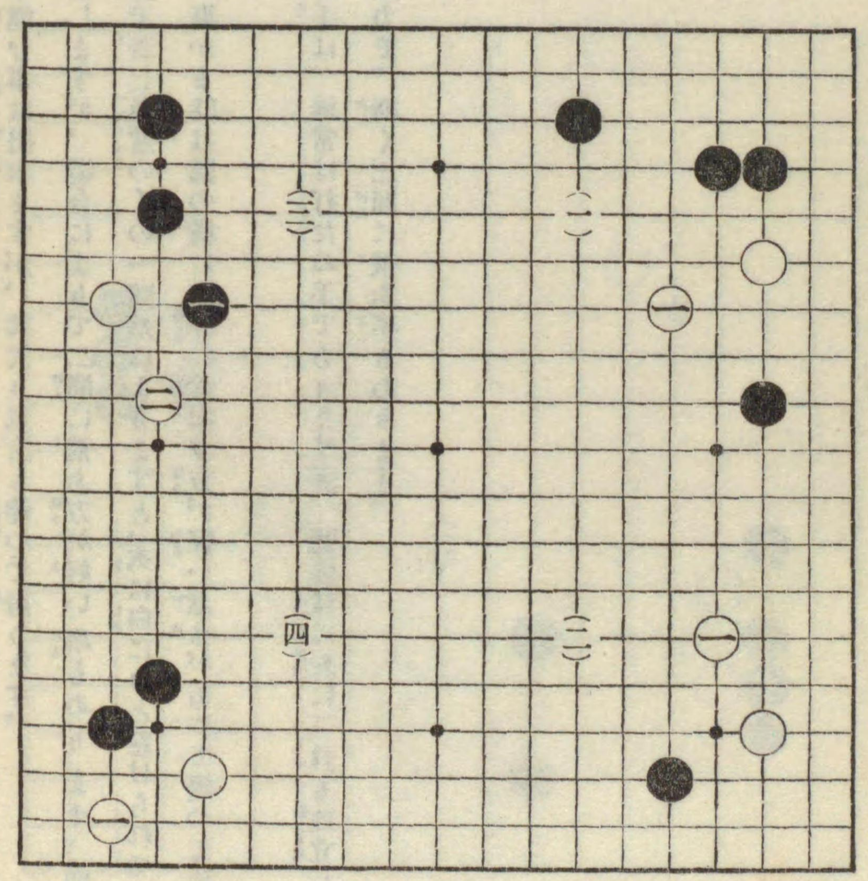
多くの場合は、一間飛を好手としますが、場合によりて二間に飛ぶ方が好い事もあります。即（二）の様な場合、左右の白が優勢で若し通常のイの一間飛によりますと、次に白にロと懸けられて、此石を逃げるに大層困難な場合、斯かる時は圖の様に二間に飛出す方が輕い意味があつて優つて居ります。

（三）の白一の様に、三間に飛ぶ手は、通常は打たぬ手でありますが、圖の様に左に三目も連立して堅くなつて居る時は、此石の勢力で、斯く三間に飛ぶ事もあります。

**第八十圖**　小斜走　小斜走は一間飛に次いでの好い手であります。此手は一路曲折し斜に進む丈に、敵に其缺點を狙はれる恐れもありますが、又其れ丈變化に富んで面白い場合もあります。

（一）、（二）、（三）、（四）共に皆小斜走の形であつて、又此小斜走にも位置と形の異るに從ひ、意味を異にして居ります。

先づ（一）の白一は、中へ逃出した手。（二）の白一は小斜走に應け隅の白を守り、併し




基礎篇八十圖



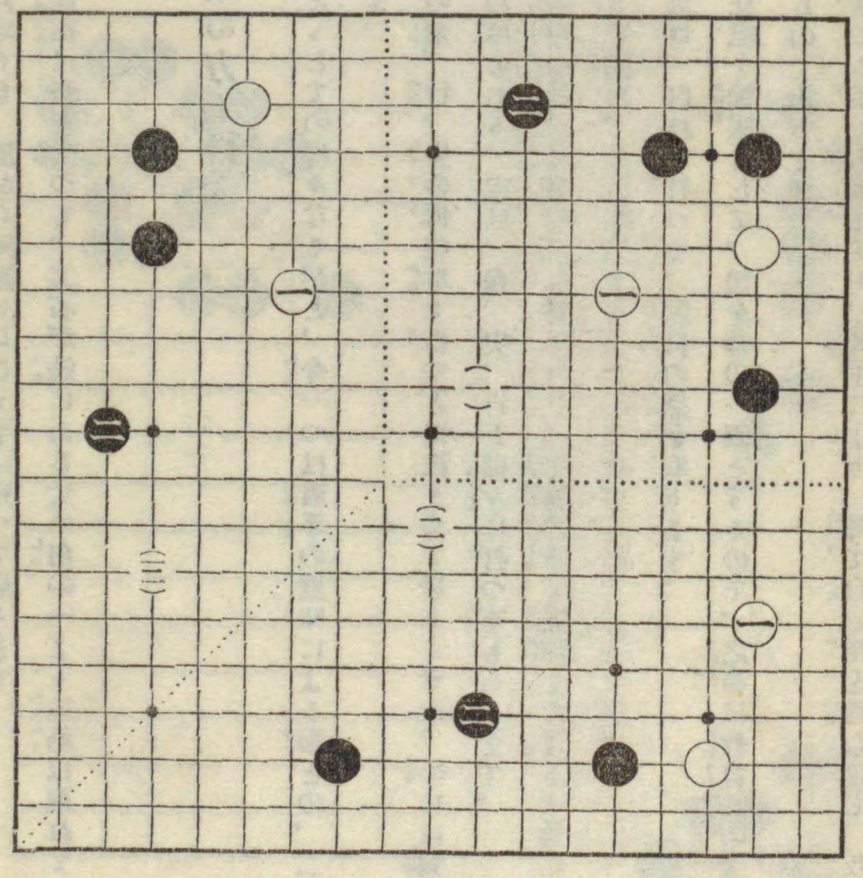


て黑を攻める手。（三）の黑一は小斜走に掛け、次に白二と之に應じ。（四）の白一は小斜走に走つて隅を占領した手であります。

**第八十一圖**　大斜走、大々斜走　（一）、白一は中央に向つて大斜走に飛出した手、黑二は側方に大斜走に拓いた手であります。

（二）の白一、黑二は共に大斜走に拓いた手で、之等は、何れも根據を得んとする時、用ゆる手であります。

（三）、白一は、中に向つて




基礎篇八十一圖

大々斜走に飛出した手で、此形は何時でも、黑から兩斷せらるゝ手は殘つて居ります。

黑二は大々斜走に拓いた手で、此拓は飛と異つて、其石が邊にある丈に白の一より連絡は取れて居る譯であります。

## 其他の形の用ゐ方と得失

形には、行、尖、飛の三つをもとゝしての種々なる形と、今一つは着手の意味による形との、二通りある事は前述の通りであります。

で此着手の意味による形は、前の飛、行、尖の何の形で打つとは決まつて居りませぬ、時には飛で打つ事もあれば、又尖、行で打つ事もあり、或は、飛、尖、行と種々に打つ事もあります。

**第八十二圖**　打缺　シボリ　此方法は、二卷の內の押つぶし、追落の中で說明した通り、共に石を捨て、此捨石の力で、敵の活力を減じ、且つ駄目づまりとして攻めるのであります。

其打方は(一)では白イと打缺、黑ロ、白ハと打つて、數目の黑を取ります。

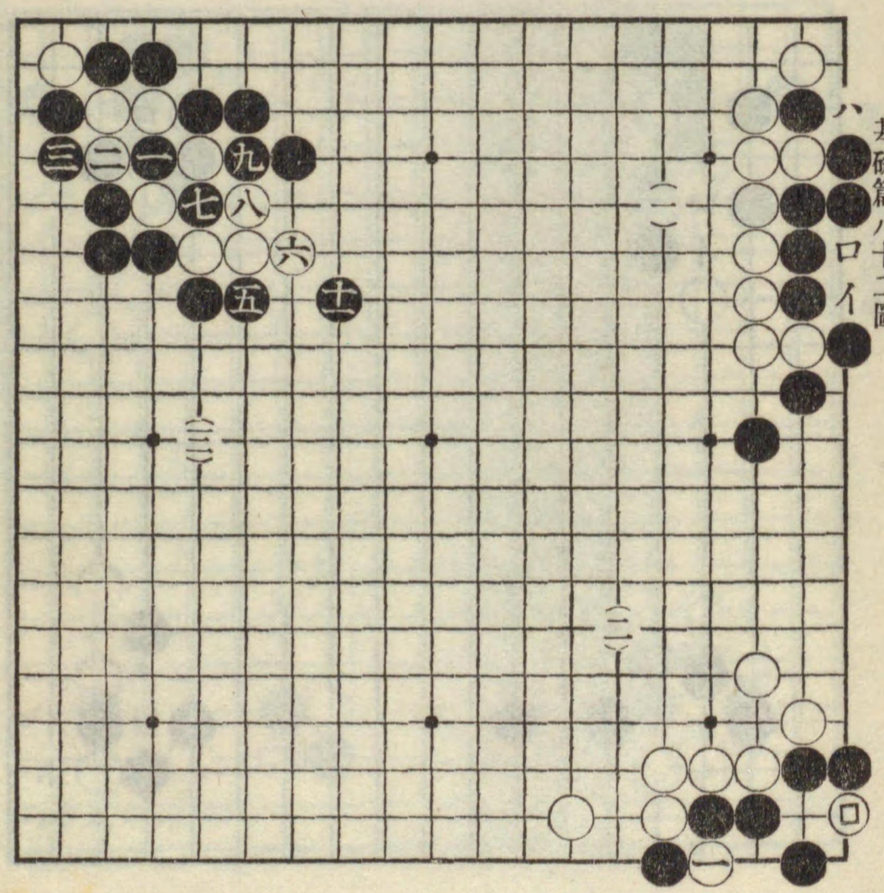
(二)では白一の打缺によりて、此處を缺眼として、黑を㊀の一眼とするので、之等は皆打缺の手段によりて敵の石を取る事が出來るのであります。

(三)、黑一は、わざ〳〵一目を捨てる手でありますが、此手により、却て白の形を惡しくし、反





對に黑は形を整へる事が出來るので、斯かる方法を總てシボリと云ひます。次に黑七も同じ手段、之によりて白は大層凝り形となりました。




基礎篇八十二圖

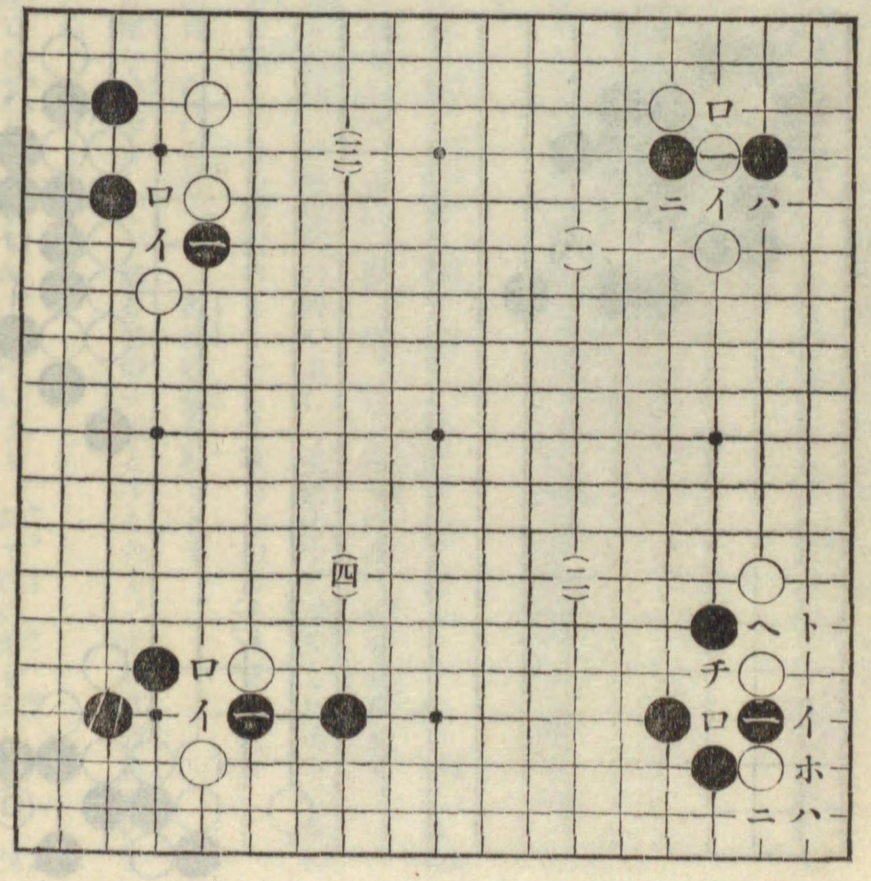
㊃一ノ處粘　㊉七ノ處粘

**第八十三圖**　綽込　附越

此二つは、敵の缺點に割込んで、先づ其形をクズシ、次いで攻勢を取る方法であります

（一）の白一、（二）の黑一は共に綽込で、此中（一）では次に黑イに打てば、白ロに粘、黑ハ、白ニと切て黑を攻める手。（二）では白イなれば黑ロ白ハ、黑ニ、白ホ、黑ヘ、白ト、黑チに當りとし、白を下邊に壓へる手であります。

（三）と（四）の黑一は、共に附越で、次に白イに打てば黑ロに切り白を二つに切つて攻




基礎篇八十三圖





める手段であります。

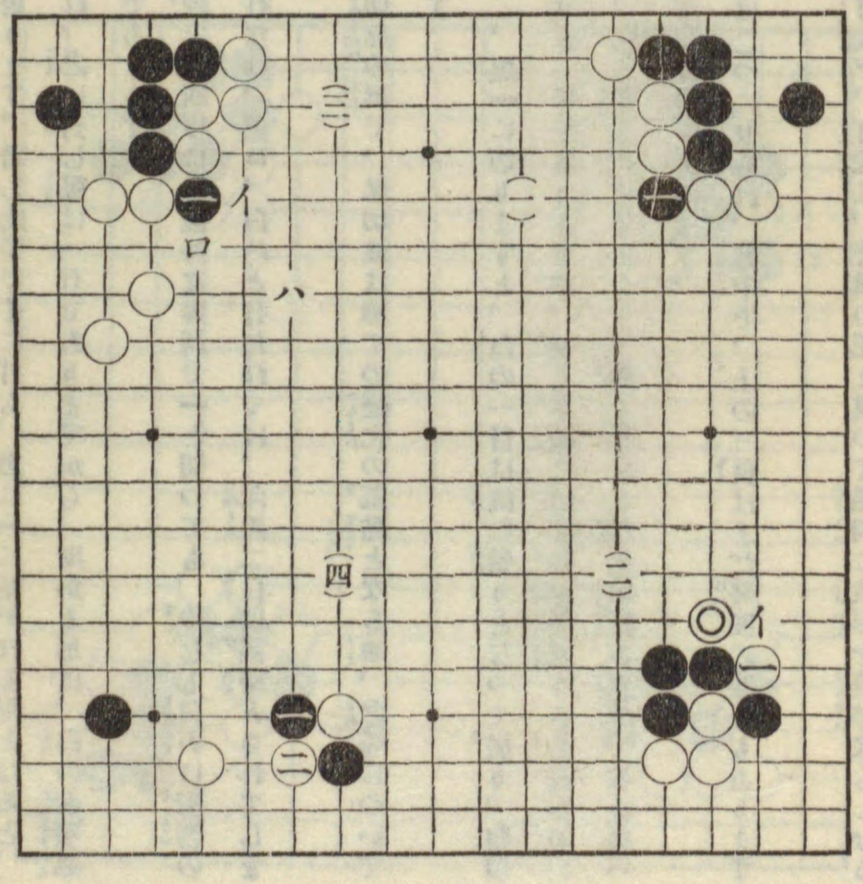
**第八十四圖**　切　切違

切は前に述べた通り、敵を兩斷して其勢力を分ける手でありますから、多くの場合は善い手となります。

然し之も場合によりては、大層無理となる時もありますので、今之を實例によつて見ますと、先づ初めに、

（一）、黑一の切は、此切によりて以下强く攻擊を取る事が出來、此手は切としては非常に善い處であります

（二）も、此形では是非一と




基礎篇八十四圖

切らなければならぬ要所となつて居ります。若し此手でイに打ち、黒に一に粘がれる形となると、白◎、イと隅の三目は二つにせられ、之に對し黒は一石でありますから、斯かる形は、白の大層惡いのは、前にも度々説明した通りであります。

處が(三)の、黒一の切は大層無理で、斯様に白優勢な場所で一と切つても、少しも白石に影響の無いばかりで無く、次に白にイと打たれ、黒ロ、白ハと打たれては、此黒二目は捕虜とされてしまひます。

(四)、黒一、白二は前述の通り切違の形で、又切違は總ての變化の基點となる事、之等については、既に前に述べた通りであります。

**第八十五圖**　切提　打拔

(一)、黒一に切りますと、白の一目は既に當りとなつて居り、白の之を逃げようとするには、イに行びる一手でありますが、斯く下邊に於て最早發展する餘地の無い場所では、次に黒にロと打たれて、白二目は死となります。總て斯かる形を切提と云ひ、初め黒一と切つた時、既に一目は死となつて居るのであります。

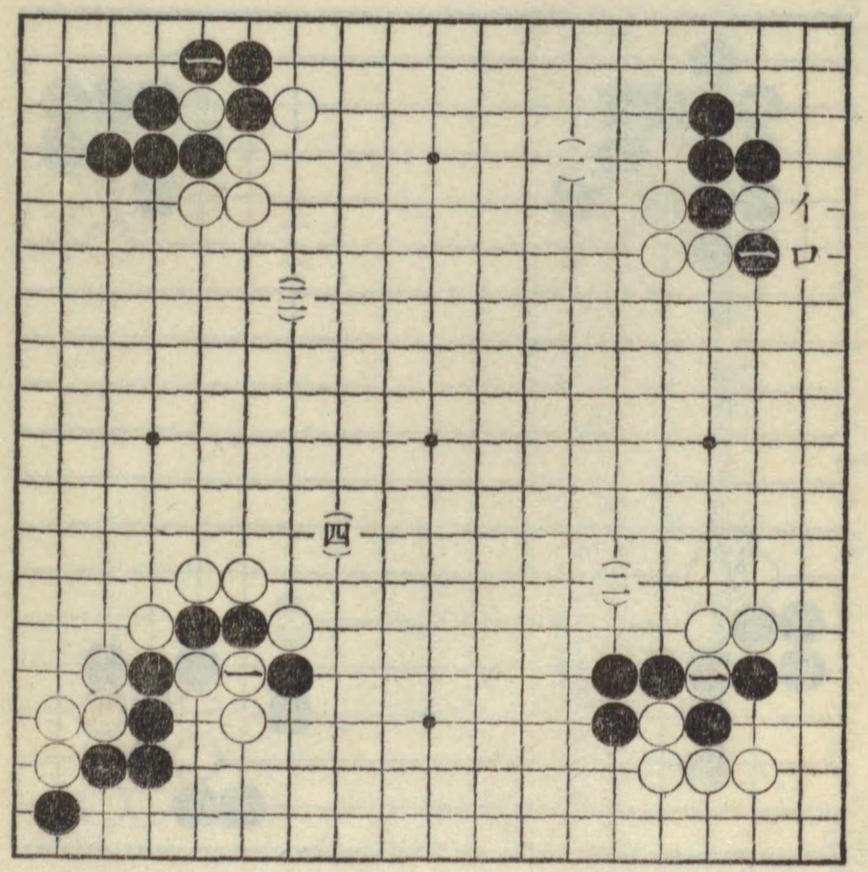
(二)、白一に切れば、上下の黒は二つにせられ、其中で、上の三目はまだ發展の餘地もありますが、下の二目は死となります。

(三)の黒一、(四)の白一は共に打拔で、打拔は、普通の死と異つて絶對に我形を優勢ならしむる





形となりますが、然し之れにも、善い場合と惡い場合とあるのは、他の種々なる形と同じでありまして、其例を擧げて見ますと、先づ(一)と(二)について見ると、(一)は勢力が只下邊の極く狹い間に丈及ぼすのみならず、今直ぐに打拔かずと宜い石であります。之に反して(四)は中央四方に勢力を及ぼし、此一の一手で全く形勢一變してしまふ大切の打拔であります。



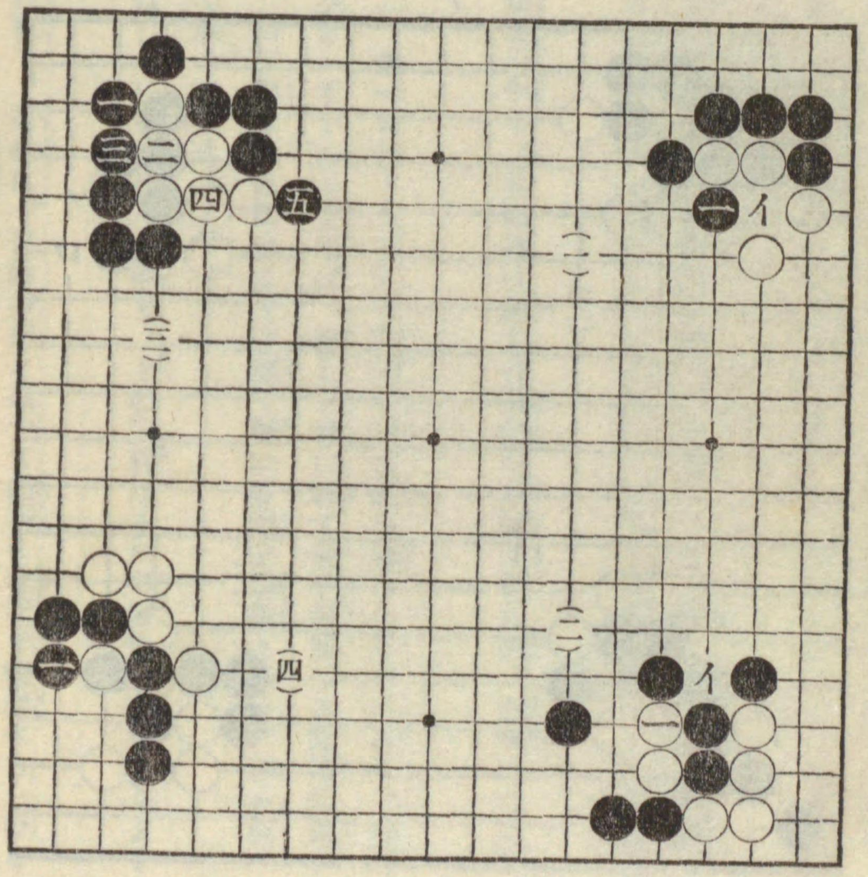

基礎篇八十五圖

**第八十六圖**　當抱へ

當りは、敵の活路を只一つとし、次に當に打抜かうとする形とする手であります。

で當りと打つて、善い場合と惡い場合の例擧げて見ますと先づ(一)、(二)の一の手は、共に當りでありますが、次は相手の手番で、(一)では白イに粘ぐ迄、(二)では黑イに粘ぐ迄、却て敵を堅くしますから之等の當りは打たぬ方が優つて居ります。

次に(三)での、黑一に當り白二、黑三に當り、白四、黑




基礎篇八十六圖

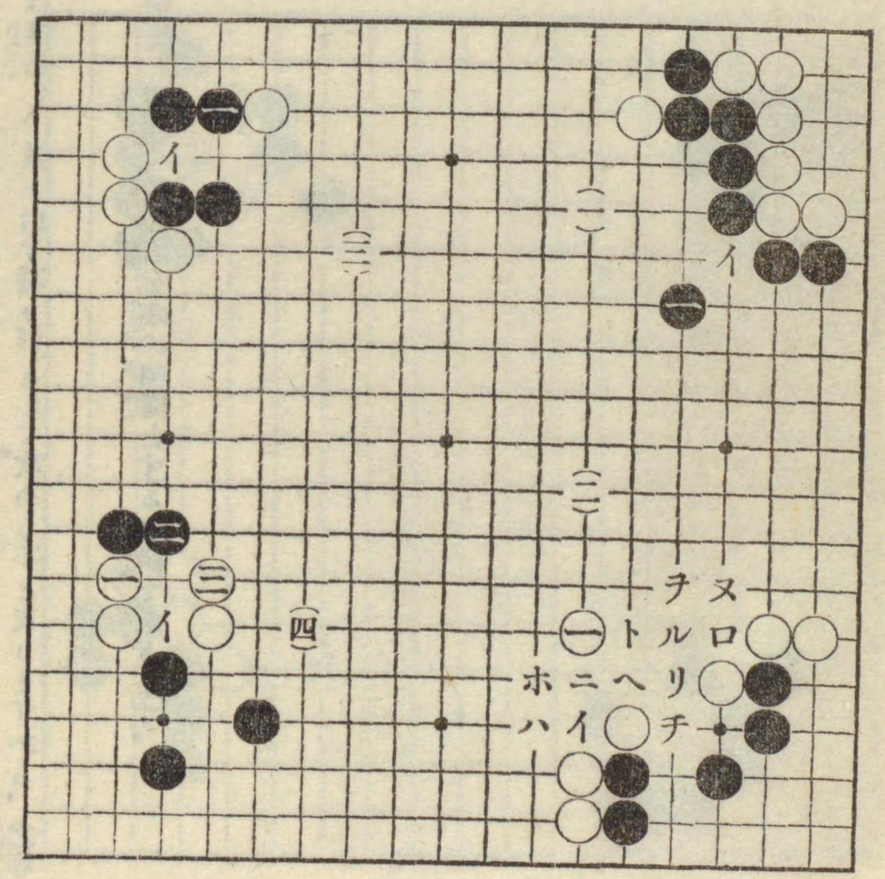


五と打つ手は、此當りにより、黑は連絡し、其上白を凝り形として攻める手となりますから、之等は大層善い手となります。

(四)、黑一は抱へで、之は前の切提と同樣、敵の石を確に捕虜とする手段であります。

## 第八十七圖　斜走粘（ケイッギ）二重粘（ニチョウッギ）

共に我石を連續する方法で、前に述べた堅く粘ぐ手と比較して、形勢によりては大層働きのある場合もあります。（一）、黑一はイの切を防いだ手で、之はイに堅く粘ぐより優つて居ります。（二）、白一は巧妙な粘方で、此形白にイとロとの兩方に切があります。で若し一の手でイに堅く粘ぐとロの切が殘つて居り又白イをロに粘ぐとイの切が殘つて居ります、即此双方の






切を一時に防ぐ手が、白一の粘方でありまして、之等は粘の中でも最巧妙な形であります。で此時黑若しイに切れば、白ハ、黑ニ、白ホ、黑ヘ、白ト、黑チ、白リと打ち、一目を捨てゝ完全に連絡し。又黑イの切をロに切れば、白ヌ、黑ル、白ヲと打つて、之も一目を捨てゝ、連絡します。

（三）の黑一、及び（四）の白一、黑二の時、白三で打つ手は、共に二重粘の形でありまして、此場合、此粘方は（三）、（四）共にイに堅く粘ぐより優つて居ります。

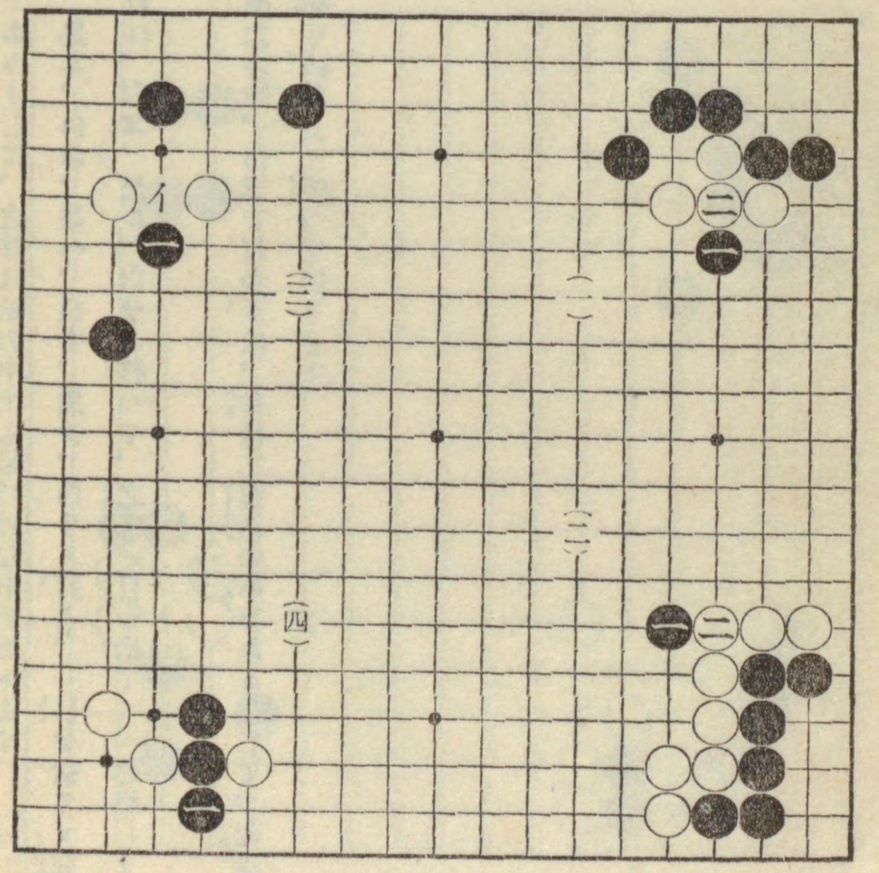
## 第八十八圖　覗　突拔

覗きの中にも、形によつて善い手となる場合と、惡い手となる場合とあるのは、前に述べた通りであります。先づ(一)では、黑一に覗き、白二に粘となつて、此覗、粘の交換は何らが有利であるかと云ひますと、元々此形白は掛粘の形で、切る手の無い處でありますから、此覗きは寧ろ黑に有利であります。

(二)の黑一の覗きは惡手で此形まだ黑から二と切る手が殘つて居る處を斯く打つてわざ〳〵白に二に粘がしてしまふのは、つまり一手損となります。

(三)の黑一の覗は、次に白イの粘となるので、場合によりて斯く打つても差支へありませぬが、先づ〳〵時機を見合せ打つ手であります。

突拔は、(四)の黑一の樣に、敵を兩斷する手でありますから、如何んな場合でも、此形の惡い時は無いと云つて宜いのであります。




基礎篇八十八圖





# 圍碁獨習第三卷 終

昭和六年十一月廿六日印刷
昭和六年十二月一日發行

（圍碁獨習 第三卷）
定價一圓
郵稅六錢

著作者 鈴木爲次郎
東京市麹町區永田町二丁目一番地

發行兼印刷人 八幡恭助
東京市赤坂區田町一丁目十五番地

印刷所 三京社

發行所 日本棋院
東京市麹町區永田町二丁目一番地
電話銀座七〇五番
振替東京六八五八六番

著作權所有

232
335

# 日本棋院刊行圖書

**初學圍棊講義錄**（六冊完結）
定價一冊一圓 送料四錢 六冊分 六圓 送料共

**高等圍棊講義錄**（十二冊完結）
定價一冊一圓送料四錢十二冊分十二圓送料共
日本棋院監修

**圍棊手筋解** 定價一冊 一圓五十錢 送料六錢

七段 瀨越憲作著
**互先定石第一卷**（一間夾、二間夾前半）
定價 一冊 一圓二十錢 送料 四錢

**互先定石第二卷**（二間夾後半、三間夾）
定價 一冊 一圓二十錢 送料 四錢

七段 瀨越憲作著
**置棊定石項手篇**（全一冊）
定價 一冊 一圓二十錢 送料 四錢

七段 岩佐銹著
**互先布石詳解第一卷**
定價 一冊 一圓二十錢 送料 四錢

七段 岩佐銹・七段 瀨越憲作共著
**置棊布石詳解第一卷**（九子七子の部）
定價 一冊 一圓二十錢 送料 四錢

**置棊布石詳解第二卷**（七子五子の部）
定價 一冊 一圓二十錢 送料 四錢

**置棊布石詳解第三卷**（八子六子の部）
定價 一冊 一圓二十錢 送料 四錢

**置棊布石詳解第四卷**（四子二子の部）
定價 一冊 一圓二十錢 送料 四錢

七段 瀨越憲作著
**置棋定石大桂馬篇**（全）
定價 一冊 一圓二十錢 送料 四錢

六段 加藤信著
**碁聖秀策の布石**（上、下）
定價 各一冊 一圓二十錢 送料 四錢

日本棋院監修
**日本棋院段級錄**（毎年一回一月發行）
定價 一冊 五十錢 送料 二錢

日本棋院特製
**圍棊罫紙**
甲種（美濃紙）一帖五十枚 八十錢 送料四錢
乙種（西洋紙）一帖五十枚 四十錢 送料八錢
丙種（西洋紙半截）一帖五十枚 二十五錢 送料四錢

232
335